日本建築協会

# 建築と社会

特集

建築への証言'98―21世紀に向けて

1998 9





# 都市の顔をつくる仕事。

都市の詩情をスクリーンのように映し出すカーテンウォール。
その多彩な表情のひとつひとつに私たちの技術が活かされています。
不二サッシは、都市景観を彩る、新しい建築文化
コミュニケーションスペースを創造してまいります。

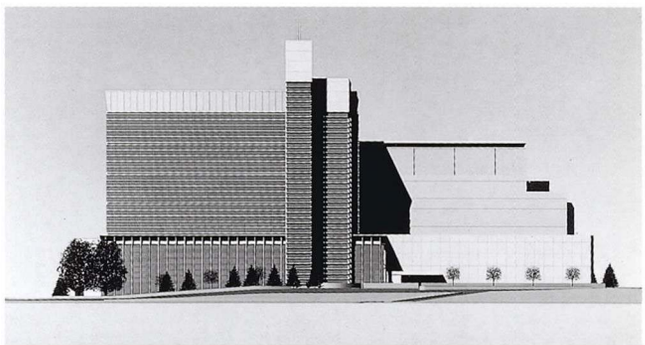
窓から夢をひろげていきます
不二サッシ

本　　社 〒211-0012川崎市中原区中丸子135 TEL.044-422-1111
大阪支店 〒541-0053大阪市中央区本町3-4-10 TEL 06-694-1692
ホームページ http://www.fujisash.co.jp/

# 会告

## 伊丹市立文化会館見学会

日　時　1998年10月7日(水)
　　14:00—17:30
講　師　沖　　正夫／伊丹市営繕課副主管
　　関井　　徹／佐藤総合計画
　　森田矢主史／鴻池組所長
定　員　60人
　　＊申込者多数の場合は抽選
集　合　現地
　　＊阪急「伊丹」駅から徒歩約5分
　　＊JR「伊丹」駅から徒歩約10分
参加費　会員1,000円、一般2,000円
申　込　9月30日(水)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　①催し名
　　伊丹市立文化会館見学会
　　②氏名
　　③個人会員・団体会員・一般の別
　　④職場・学校名
　　⑤参加証郵送先
　　⑥連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
　　＊参加証を10月1日(木)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　TEL.06-348-0633
　　FAX.06-348-0634
　　〒530-0001



**“多機能”なホールをめざして**

本計画を取り巻く状況は様々な面において2面性を有している。例えば都市的状況においては、計画敷地が歴史情緒溢れる地区と市街地的商業地区の接点にあたること。求められる機能として、1,200席収容のホールゾーンと会議室・和室の研修ゾーンから構成されること。これら様々な2面性を融合することこそが本計画の主旨であり、デザイン展開の起点となる。

音楽と演劇への高いレベルでの対応が図られた大ホール、ガラスと石との対比で構成された外観デザインはその具体的展開例であり、これら様々な展開における2面性の融合によって“多目的”ではない“多機能”な文化会館となることをめざしています。・

大ホールは音楽と演劇とを融合した総合芸術実践の場「音楽劇場」として位置づけ、オペラ・ミュージカル・バレー等の音楽演劇を主目的とし、舞台下に格納される音響反射板・昇降式前舞台等の舞台機能を始め、様々な配慮がなされています。

また、バリアフリーについては、一般共用部はもちろんのこと、舞台・楽屋といった演者の為のスペースにおいても配慮しています。

（関井　徹／佐藤総合計画）

●建築概要
所在地　兵庫県伊丹市宮ノ前1-1-3
設計監理　伊丹市・佐藤総合計画
施　工　鴻池組
敷地面積　4,963.80㎡
建築面積　3,908.15㎡
延床面積　12,634.20㎡
構造規模　SRC・RC・S、B1・6F・P2
工　期　1996年7月～1998年10月
オープン　1998年11月3日（予定）

## 加古川ウェルネスパーク見学会

ウェルネスとは「心とからだの健康」のこと。さらに個人が積極的に健康を獲得するため、ライフスタイルを向上させていく活動を意味する。

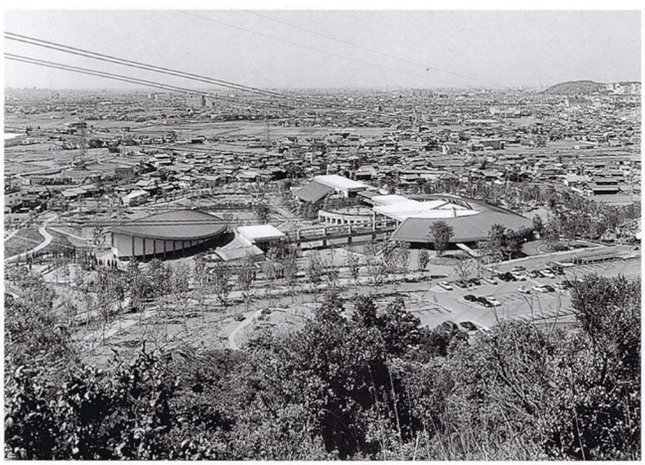
敷地は山のふもとに広がる田園地帯の南勾配の緩い斜面にある。敷地入口の東には平荘湖と呼ばれる人工の湖があり、加古川市の中でも自然を多く残す地域である。

約8.7haの敷地の中に、各施設を独立感ある群構成とすることによって、互いに響き合う楽しげな風景をつくり出すよう意図した。ウェルネスセンター棟を中心に、音楽ホール棟、図書館棟の3棟を半屋外のコリドールによって連結させている。

公園ゾーンは、森林浴が楽しめ、日々の散歩にも飽きない、さまざまな植栽によって演出が図られて、敷地のそこここに、いろいろな風景をつくり出している。

PC版利用のハイサイドライトによる自然光の採り入れ、エアダンパー利用による窓自動開閉システム自然通風、地中温度利用の換気、井戸水を利用した放射床冷暖房、屋根の二重化、雨水回収利用など、建築設計と設備設計が一体となった手法を駆使して、徹底した省エネルギーをさりげなく実現している。

（大谷弘明）



●建築概要
所在地　兵庫県加古川市東神吉町天下原370
主要用途　健康増進センター、音楽ホール、図書館
設　計　日建設計
施　工　大林組
敷地面積　86,329.00㎡
建築面積　9,420.09㎡
延床面積　10,972.06㎡
構造規模　RC・S・プレキャストコンクリート造・大断面木構造、B1・2F
工　期　1996年1月～1997年9月

日　時　1998年10月14日(水)
　　14:00—17:00
講　師　大谷弘明／日建設計設計主管
定　員　30人
　　＊申込者多数の場合は抽選
集　合　現地
　　＊JR「加古川」駅or「宝殿」駅からバスで約20分
参加費　会員1,000円、一般2,000円
申　込　10月7日(水)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　①催し名
　　加古川ウェルネスパーク見学会
　　②氏名
　　③個人会員・団体会員・一般の別
　　④職場・学校名
　　⑤参加証郵送先
　　⑥連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
　　＊参加証を10月8日(木)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　TEL.06-348-0633
　　FAX.06-348-0634
　　〒530-0001

# 平成10年度 建築工事実務講習会

主催 ㈳日本建築協会

■趣旨と内容

- 官公庁・設計事務所・建設業をはじめ、設備・営繕など幅広い分野の有能な技術者を養成する目的をもって、講習会を開催します。
- とくに取りつきにくい施工計画と仮設見積、現場実務の基礎である積算業務に重点をおき講義します。
- また、都市環境の変化に伴う法令・規準の改正なども加え、技術の進歩に即応した知識の習得をはかります。
- 「積算業務」では建築数量積算基準にのっとり、また「仮設見積」ではS造・地下1階・地上13階建事務所ビルをとり上げ、わかりやすく解説します。

■申込要領

下記受講申込書の受講希望科目を線で囲み（両科目とも受講される場合は、両方を線で囲んで下さい）、必要事項をご記入の上、受講料を添えて本会事業課までお申し込み下さい。（受講料は銀行振込・郵便振替でも可。但し、その場合お払込みいただく前に、必ず受講申込書を郵便かFAXでお送りください。）引換えに受講券をお送りいたします。

■申込締切日

平成10年**10**月**13**日(火)

※但し、定員に達し次第締切ります。

■申込先

㈳日本建築協会

〒530-0001 大阪市北区梅田1-1-3-2100
（大阪駅前第3ビル21階）

TEL. (06)348-0633 FAX. (06)348-0634

- 受付時間　毎日、午前9時半～午後5時半。但し、土・日・祝日を除く。
- 詳細は、事務局事業課へお問い合わせください。

■科目・講師

## 施工計画

- 施工計画Ⅰ　関川　詞之氏
  大成建設㈱関西支店建築部工事計画室次長
- 施工計画Ⅱ　佐貫　久氏
  鹿島建設㈱関西支店建築部生産計画室長

施工計画はその良否が、いかに能率よく、品質を確保し、安全で、経済的に本体工事を施工するかの鍵をにぎっています。仮設から仕上げ、設備にいたる工事全般について、適切な施工計画をいかに立案するか、その要点をわかりやすく説明します。

と　き　平成10年**10**月**20**日(火)
午前9時～午後5時
ところ　大阪府建築健保会館・多目的ホール
（大阪市中央区和泉町2-1-11）
定　員　120名
受講料　10,000円（テキスト代、消費税を含む）

## 積算・仮設見積

- 積算業務　仲村　澄夫氏
  ㈱竹中工務店神戸支店見積担当課長
- 仮設見積　梅原　弘記氏
  ㈱大林組本店建築生産技術部副部長

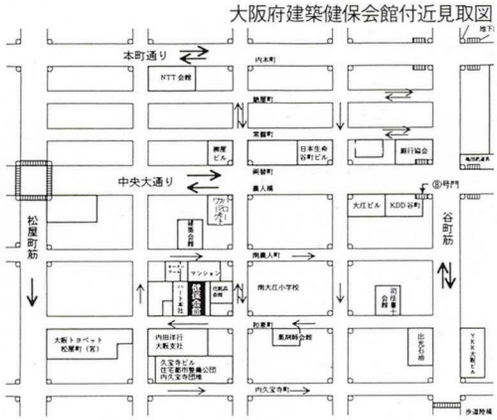
見積業務のなかで、基本となるのは数量積算です。この積算の手順、基準を主体にコスト管理等を合理的に行えるように解説します。また、仮設工事費は、全体工事費に対して大きな比率を占めているにもかかわらず、単に床面積当たりとか請負金比率といった概算で見積されている場合も多いのが現状です。施工計画に基づいた合理的で迅速な見積方法を解説します。

と　き　平成10年**10**月**22**日(木)
午前9時～午後5時
ところ　大阪府建築健保会館・多目的ホール
（大阪市中央区和泉町2-1-11）
定　員　120名
受講料　10,000円（テキスト代、消費税を含む）

■受講料振込口座番号

- 取引銀行
  住友銀行高麗橋支店
  （普通No.860034）
  三和銀行瓦町支店
  （普通No.210054）
  大和銀行北浜支店
  （普通No.272234）
- 郵便振替
  00910-9-39975

大阪府建築健保会館付近見取図




キ リ ト リ 線

## 平成10年度建築工事実務講習会 受講申込書

No.＿＿＿＿

社団法人　日本建築協会　御中

平成10年　　月　　日

| 郵便番号 | | 受講者氏名 | | 年齢 | 受講希望科目 ※両科目とも受講される場合は、両方を線で囲んで下さい。 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 所在地 | | | | | 施工計画 | 積算・仮設見積 |
| 事業所名（または氏名） | | | | | 施工計画 | 積算・仮設見積 |
| 担当責任者 | | | | | 施工計画 | 積算・仮設見積 |
| 電話番号 | | | | | 施工計画 | 積算・仮設見積 |
| 受講料支払方法 | •事務局へ持参　•現金送金　•銀行振込　•郵便振替　いずれかに○印を付して下さい。 | | | | | |

※受講申込書が足りない場合は、複写して下さい。

今月の表紙

神戸市東灘区・香雪美術館の近く

撮影　絹巻　豊

表紙デザイン　安里俊久

■特集予告

10月号／ゆれをとめるーたえる技術からかわす技術へー

11月号／会員作品特集
医療施設

12月号／第45回青年技術者
JR西日本


編集委員会（平成10年度）

■副会長　田ノ畑好幸
金多　潔　西岡　道雄
葉袋　公明　野口　太郎
■編集理事　堀内　一夫
荒巻　恭士　桝井　貴廣
井上　豊　水谷　昇
小島　雄　村上幸三郎
佐野　吉彦　谷津　和久
竹中　統一　※山根　敏和
立野　一郎　□施工材料分科会
真塚　達夫　植田　実
松村　慶三　小椎八重猛
山田　修　太刀川丈爾
◎興謝野　久　※十倉　毅
■特集小委員会
○内田　直樹　能美　敏男
□計画分科会　野口　幸忠
★計画系　福井　茂和
伊縫　憲幸　□法令分科会
梅村　宏尚　城戸　史郎
※小浦　久子　椎名　辰之
鈴木　克彦　※炭崎　勉
田中　直人　中　勝生
松川　敏正　中岡　光平
横関　真紀　浜野　幸雄
吉村　英祐　■作品作風小委員会
★建築計画系　赤木　隆
上杉　秀隆　秋山　克彦
江副　敏史　秋山　茂
大村　昌聡　朝倉　一晃
荻窪　伸彦　小笠原絵理
菅野　忠司　川上比奈子
笹村　欽也　倉渕奈千子
佐藤不二男　杉原　繁
塚本　史郎　寺岡　宏治
※刃金　国雄　中村　文紀
服部　光宏　藤城　義丈
山本　匡　△前川　治彦
★インテリア・住宅系　前田　幸宏
※石川　佳子　牧野　雅一
加藤　力　増田　敬彦
角方　利幸　増田　俊哉
北浦かほる　■会員企画小委員会
小梶　吉隆　伊藤　郁郎
小島　保人　池田　聡実
下村　陽子　稲木　裕子
中村　雅人　大谷由紀子
中村　孝之　糟谷　浩史
畑　康之　河崎　敦子
西田　和子　高岡　伸一
ベリー史子　高田　光雄
□構造分科会　高橋　麗子
大氏　正嗣　△塚口　明洋
岸本　一蔵　辻川ひとみ
岸本　圭暁　長友理津子
楠本　隆　花野　元一
佐治　明志　福田　瑞穂
下野　直人　増渕　昌利
田中　剛　山嵜　章子
※田辺　太一　■広告企画小委員会
野口　拓也　岩井　武夫
松村　和夫　△小幡　義明
吉澤　幹夫　加納伸太郎
□設備分科会　勝　一弘
梶井　宏修　河原　正雄
河津　隆之　長野　洋一
渡邊　浩文

◎委員長　○委員長代行
△副委員長　※幹事



印　刷　平成10年8月25日
発　行　平成10年9月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　話　06-348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本電植株式会社
定　価　1200円〔本体価格1143円〕



# 建築と社会 9

1998

ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第79集／通巻918号


# CONTENTS


特集●　**建築への証言'98—21世紀に向けて**

□20世紀の建築とその後に来るもの●川崎　清 —— 18
□建築技術者のあり方から見た20世紀の建築●福田晴虔 —— 22
□建築—20世紀から21世紀へ●馬場璋造 —— 26
□アンケート・建築への証言'98● —— 30
浅井　謙／池上俊郎／石井　修／上杉秀隆／上田信也／歌　一洋
遠藤秀平／太田隆信／岡田聿之／加藤邦男／狩野忠正／柏木浩一
貴志雅樹／岸　和郎／金　澤富／久保清一／小林一成／小林　恒
佐野吉彦／笹木　篤／瀬戸本淳／田中英一／高口恭行／髙砂正弘
瀧　光夫／竹原義二／塚口明洋／寺地洋之／遠松展弘／徳岡昌克
中嶋龍彦／中村勇大／新居照和／西村征一郎／堀田　正／本多友常
三谷幸司／三宗司郎／山崎泰孝／山田　元／吉羽逸郎／吉村篤一
渡辺豊和
□20世紀の建築は語られ、そして21世紀の建築は描かれたか●
佐藤不二男 —— 58

会告　伊丹市立文化会館見学会.加古川ウェルネスパーク見学会.平成10年度建築工事実務講習会. 1
話題建築を聞く（27）オープン後1年たった京都駅ビル（再掲） 73

作品作風　加古川ウェルネスパーク 4
松原市民道夢館 8
神戸市営 筒井住宅 10

gallery　VOID-MOON-1（森井浩一）●中村文紀 12
大地の呼吸　修学院離宮庭園（京都）●宮地雄一郎 14
社会の眼　午後の街かどで●末次攝子（ジャーナリスト） 15
建築の眼　メルボルンの学校●杉山茂一　マイホームづくり（3）●増田繁治
意を決して●梅原良矢　京・散歩“湯葉”●浜崎　彰 16
素材と技術が生み出すデザイン　「ゴム—雑貨から」●板倉満代 60
W　座談会—デザインと建築 62
法令コーナー　改正建築基準法の実効性を確保するために●炭崎　勉 64
構造の頁　超音波でコンクリートの強さを調べる●吉荒俊克 65
設備の頁　ビルの上に建つ観覧車の設備●中野渡晴夫／井上雅庸 66
施工材料の頁　コードレス押しボタンスイッチシステム●岡田敏夫 68
基礎講座　照明設備●谷本敏和 69
REPORT　第2回ユニオン建築フォーラム妹島和世「近作について」を聞く●森田昌宏 70
書評　「日本の写真家39—山田脩二」●高口恭行 71
BOOK STATION　短評4題●大谷由紀子・河崎敦子・高岡伸一・塚口明洋 72
information　東西アス協組建築講演会.JIA市民大学講座開講.パブリックアート・フォーラム高岡で交流を.〜日本建築の可能性〜.東京芸大学生による椅子展.20世紀のイタリア建築をたずねて—大阪府建築士会—.タキロン国際デザインコンペティション'98公募.建設リサイクル推進—建設省—.『設計プロポーザルの進め方』発刊.「チーフ・アーキテクト バージョン5.0J」発売 74
月間の動き　平成10年6月分 76

エントランス

▼ゆらぎの池と棟を結ぶコリドール

作品風作

設計■
日建設計

監理■
加古川市建築部建築課・日建設計

施工■
大林組

# 加古川ウェルネスパーク

「ウェルネス」とは「心とからだの健康」という意味である。市民が心と体の健康づくりに積極的に参加できる施設として、この「健康」という概念を建築に具現化してゆくことを求められた。

私たちの生活は物質文明の中にあって、日々都会化していく。この建築は自然の中で五感を鍛え、知性と感性を磨き、健康を取り戻すための施設であるから、ここでは効率能率重視ではなく、とりまく環境を重視して、自然の中でゆったりと時を過ごすことのできる施設づくりが大切だと考えた。

そこで敷地の高低差20mを活かしたランドスケープデザインを行い、ウェルネスセンター棟を中心に音楽ホール棟、図書館棟の３棟を広い公園エリアの中に配置。全体が自然の中に溶け込み、人々が快く過ごせる場所を提供することに努めた。敷地のそこここには、いろいろな風景を創り出している。

内部空間は気候や天気の変化を感じ取ることのできるよう計画し、環境への負担を小さくする配慮や、自然エネルギーの積極的な活用をできるだけ多く採り入れた。建築的には大きな屋根と庇をつくり、採光と通風をよく考えることから始めた。

建築をつくる材料選びにも、ウェルネスという考えをあてはめようとした。簡素で長持ちし、自然の風合いが失われないものを組み合わせた。屋根は素地の銅板、壁は白の塗壁とレンガ風タイル、床が鉄平石の乱張りや玉砂利の洗い出しなど。また米松の集成材を随所に使った。柔和で暖かみのある人間的な肌合いの建築を目指した。

健康つくりを兼ねて市内を歩く「加古川ツーデーマーチ」は昨秋で８回目を迎えたが、２万を超える参加者のうち市民ウォーカーはその６割にものぼる。車社会が進み、歩くことが減った地方都市こそ、健康づくりのきっかけとなる施設が必要であろう。市民がライフスタイルを変えていくためにも、このウェルネスパークが完成した意味は大きい。（大谷弘明／日建設計）

所 在 地 ――兵庫県加古川市東神吉町天下原370
敷地面積 ――86,329.00㎡
建築面積 ―― 9,190.40㎡
延床面積 ――10,857.40㎡
構造規模 ――①ウェルネス棟　RC、S、2F、B1F
　　②音楽ホール棟　RC、W、2F
　　③図書館棟　RC、S、2F、B1F
工　　期 ――1995年12月～1997年９月
最 寄 駅 ――JR西日本加古川駅または宝殿駅
撮　　影 ――名執一雄



鳥瞰全景



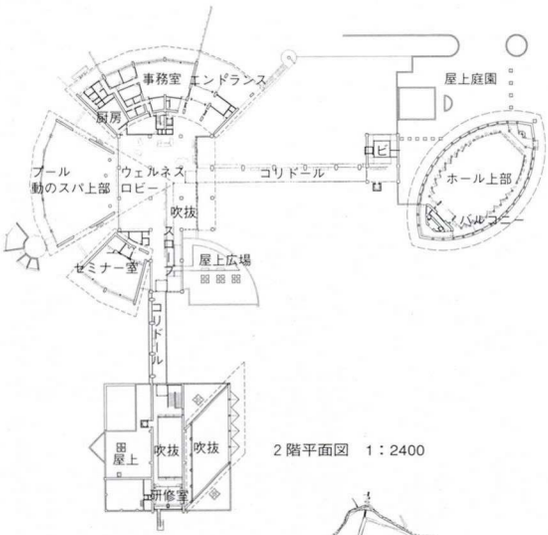
公園園路

▼ホール棟外観





ウェルネスロビー

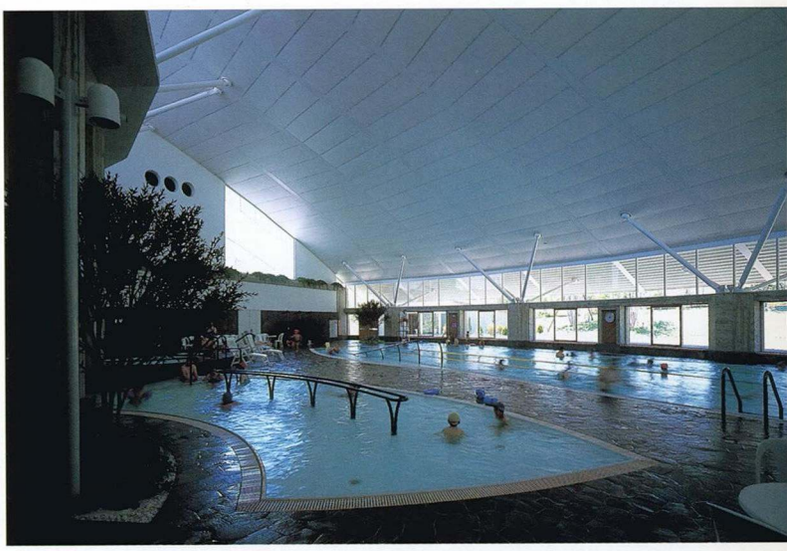



2階平面図　1：2400




配置図　1：7000

◀ホール

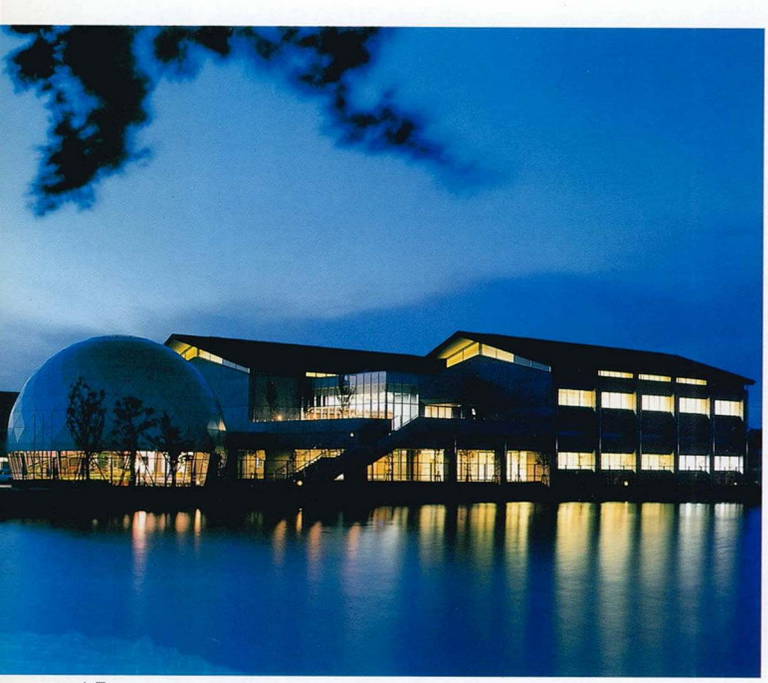


プール

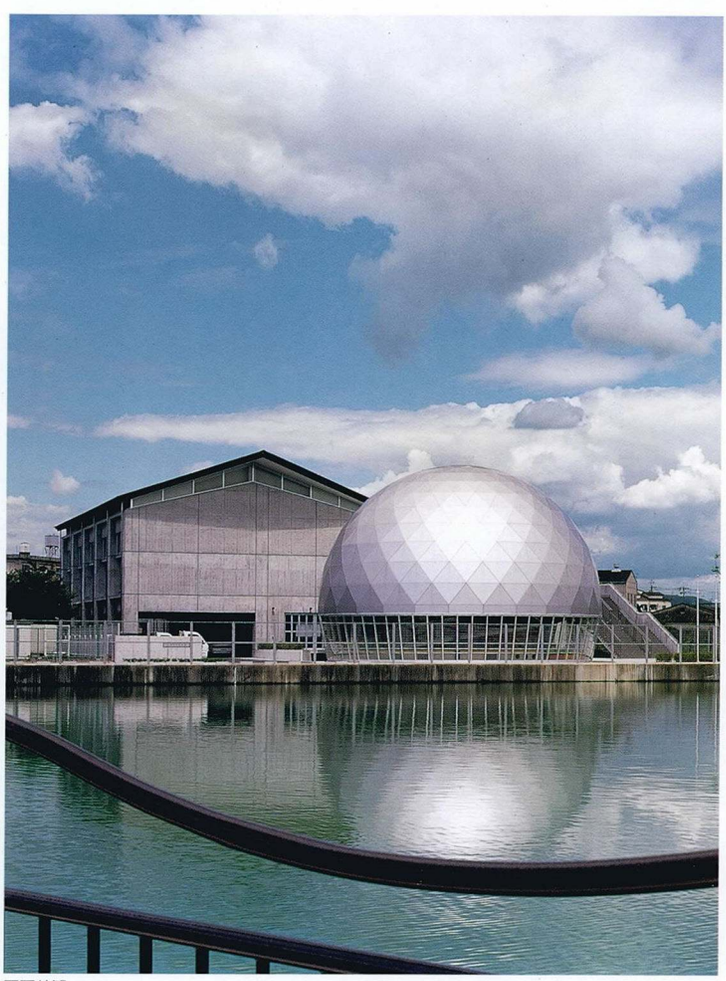
▼図書館



南西面外観



夜景



西面外観

作品
作風

設計監理■
小西設計

施工■
大末・松村特定建設工事共同企業体

# 松原市民道夢館

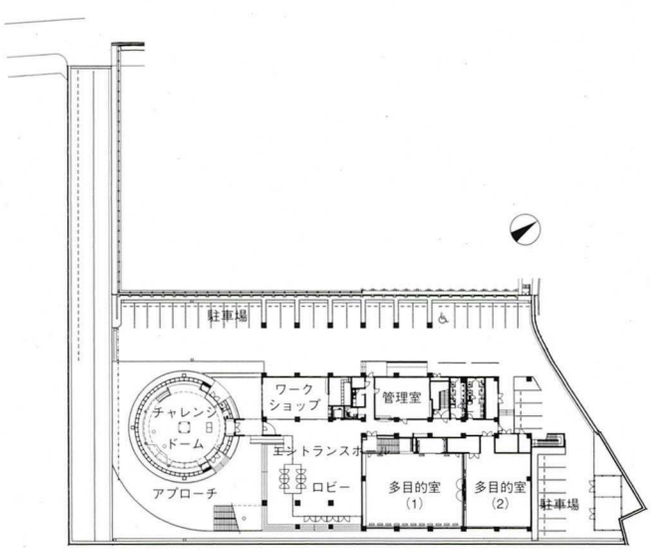
本施設は、伝統スポーツ活動のための武道場、子供の創造力を育む楽しい遊び場、誰もが体験学習できるワークショップで構成される複合施設である。競技規則に制約される武道空間と自由な発想から成り立つ子供創造空間の動線と騒音を分離させるために、2階に武道場を配し、大会時は屋外階段から屋上庭園を介してアプローチさせる。その他の施設は1階とし、中でもチャレンジドームは、管理面、騒音の問題も考慮し独立空間とした。

チャレンジドームは、その内部すべてが子供の遊び空間として機能するように、中央にはローラースライダー、周囲には空中散歩が楽しめるスロープと回廊、ロープクライミング、ブロック迷路、モグラの穴等、飛んだり跳ねたり、登ったり出来る遊具を設置した。

外観は、幾何学的形態をもち、柔らかな曲面をアルミパネルで表現し施設全体のシンボルとなるデザインとした。

21世紀に向けて、次代を担う子供達が遊びの心を忘れず健やかに育つための環境づくりと人間性を重視したスポーツ、文化、コミュニティーの場として、市民のふれあいが図れる施設となることを願うものである。

（二ノ丸利雄／小西設計）

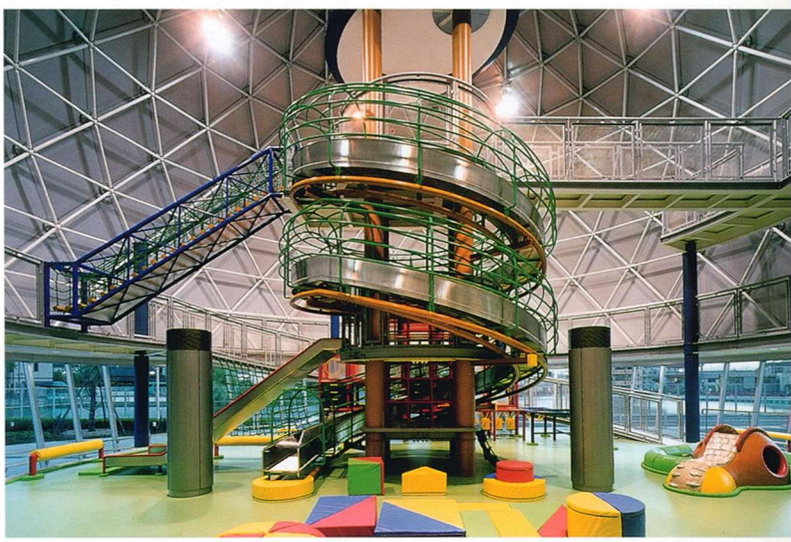



配置図・1階平面図　1：1400

所 在 地 ――松原市阿保4-210-7
敷地面積 ――4,558.73㎡
建築面積 ――1,957.68㎡
延床面積 ――3,200.19㎡
構造規模 ――RC、3F
工　　期 ――1997年7月～1998年6月
最 寄 駅 ――近鉄南大阪線・河内松原駅
撮　　影 ――伸和



1階エントランスホール



チャレンジドーム



1階多目的室

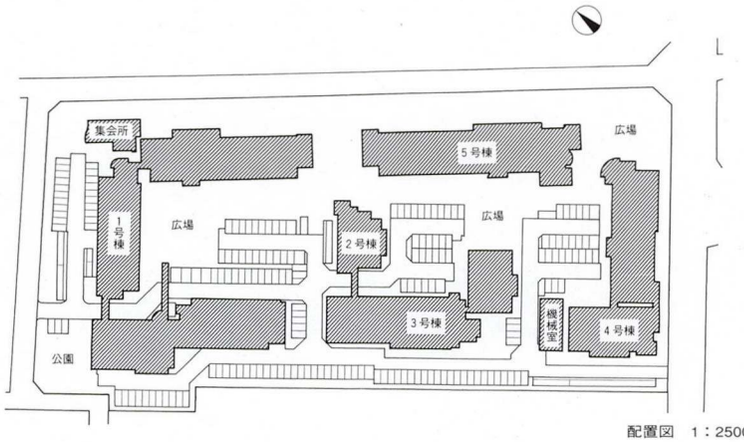
▼2階武道場



東側道路（中心軸）沿い



囲み配置内部の広場




配置図　1：2500

作品
作風

設計■
（基本設計）神戸市住宅局住宅部建設課
ウルム建築・計画研究所
（実施設計）神戸市住宅局住宅部建設課
第１工区：フジタ大阪支店一級建築士事務所
第２工区：佐藤工業一級建築士事務所大阪支所
第３工区：ウルム建築・計画研究所

監理■
神戸市住宅局住宅部建設課
ウルム建築・計画研究所

施工■
第１工区：フジタ・東亜特定建設工事共同企業体
第２工区：佐藤・大本特定建設工事共同企業体
第３工区：鹿島・住友・日産特定建設工事共同企業体

# 神戸市営　筒井住宅

神戸市が阪神・淡路大震災からの復興を目指して策定したマスタープラン「神戸市復興計画」において、シンボルプロジェクトの一つとして「東部新都心計画」が位置づけられている。「東部新都心計画」とは神戸市の東部に位置する大規模工場跡地を中心にして、新たな都市機能の導入や地域の活性化を目的とした計画的な整備を図るとともに、市街地復興の先導的役割を担うプロジェクトである。
筒井住宅は、この「東部新都心計画」地区内に位置しており、被災者を対象にした災害復興市営住宅203戸と震災復興のための住宅市街地総合整備事業による従前居住者用賃貸住宅372戸を一体的に建設している。筒井住宅では、囲み型の住棟配置を用い、東部新都心計画の中心軸となる通りに面して低層住棟を配置することで、連続的な街並みと賑わいのある街路空間を設け、大規模団地が周辺との調和を乱すことがないように配慮している。また、震災の教訓を活かして、地域コミュニティ育成のための地域開放型集会所や大型防火水槽を設置している。さらに、被災者に高齢者が多いことと、将来の超高齢化社会に対応するために全住戸のバリアフリー化を推進するとともに、60戸のシルバー住戸を導入している。

（神戸市住宅局住宅部建設課）



所在地 ―― 神戸市中央区筒井町１丁目
敷地面積 ――21,891.57㎡
建築面積 ―― 6,451.47㎡
延床面積 ――41,240.21㎡
構造規模 ―― ６～14階建、SRC・RC
工　　期 ――1996年３月～1998年３月
最寄駅 ―― 阪神電鉄春日野道駅
撮　　影 ――島　修一（左上）、伸和　他



全景（鳥瞰：南東から）



囲み配置内部



外観（南東から）

gallery

# VOID-MOON-1

設計
## 森井浩一



都市部に立地する住宅において、私は、住むことの権利を再考し、獲得することを目指さねばならないと思っている。

本計画では、住むことの権利として、光と風の整合、視線の権利の獲得、ボーダーレス、シーンの連続としての空間の編集、等を設定する。

計画地は、東大阪市にあり、周辺には中小の工場が点在する地域である。住環境としては決して良好とはいえない。敷地は間口７ｍ×奥行25ｍの細長い形状である。
建築物は、住宅兼ワークショップである。

周辺環境と敷地形状により、中庭を軸に開かれた計画とした。異なるヒエラルキーを持つ前庭（アプローチ）―中庭―裏庭の連続性を空間構成の軸として、機能を編集し、視線の権利の獲得を試みた。中庭―裏庭の間に生活空間を、軸に沿って彩色された壁とともに諸室を配置した。中央の階段室は、生活空間とワークショップを分離・融合する。ブルーの壁は垂直性を強調し、円弧を組み合わせたペントハウスの屋根へと視線を導く。
中庭において、９度の角度で振られた外壁面はパースペクティブを発生させ、ガラスを通して認識できる彩色された壁とともに、視覚的拡がりを演出する。庭の連続性により整合された光と風は、内部空間を豊かなものにする。

住むことの権利は、意識の中心に位置し、その獲得は、より快適な生活シーンを形成する。

森井（もりい）　浩一（ひろかず）
1963　大阪府生まれ
1986　京都工芸繊維大学工芸学部
　　住環境学科卒業
1986
〜　アーバンガウス研究所勤務
1995
1996　MORII DESIGN WORKS
　　一級建築士事務所設立
1997　大阪府立工業高等専門学校
　　非常勤講師

撮　影―平井　美行
企画編集―中村　文紀（作品作風小委員会）







# 大地の呼吸



修学院離宮庭園（京都）　　撮影　松村　芳治

夏の初めは活力の季節。幼い頃の近所の空地はむせかえるような草いきれと旺盛な昆虫の羽音に包まれ、果てしなく広かったように思う。あてどない期待感が夏の熱気に煽られ、走り出したい衝動に駆られた。草むらに大の字に寝転がると、ススキの向こうに青い空が広がっていた。いつの頃か、空地のススキは帰化植物の背高泡立草に変わっていた。茂みに分け入って秘密の通路や基地を作って遊んだ。ある時、背高泡立草は花粉で咳が出るからと、みんなで全部抜いてみた。空地はガランとして手狭に見えた。この遊びも終わりかなと子供心に感じたものだ。からっぽの空地に死の気配を感じていたのだろうか。夏の終わりは思索の季節。

今や、地球そのものが心の中で箱庭のように小さくなったけれど、夏の自然は人を誘惑して止まず、子供たちの野生を目覚めさせる。不思議な風景を前に、ふと我にかえり、遠い記憶が甦る。

この美しい共生関係を次世代にもずっと伝えてゆきたい。

宮地　雄一郎（元編集委員）

# 社会の眼

## 午後の街かどで

美しい造形物が、綺麗な背景のゆとりある場所に立っているのは好ましいが、地方都市が真似をして、ごそごそ立てたがるのは笑止です。移りゆく時代に耐える見識で取り組まなければ税金が泣きます。




ジャーナリスト

末次攝子（すえつぐ せつこ）

京都日日新聞記者、大阪読売新聞記者を経て
1958年　読売TV放送局へ出向、教育教養課長、制作部長、副理事を経て読売千里文化センタープロデューサー
1979年　大阪府参与（91年３月まで）
1989年　高槻市文化振興事業団常務理事～現在
1991年　国際日本文化研究交流財団常務理事（96年３月まで）
主な著書:「おんなの眼」（創元社）女のまつり（創元者）「おんなと仕事」（共著）筑摩書房　1985年国際ソロプチミスト女性功労賞／92年大阪市民表彰／95年大阪府女性基金プリムラ大賞
1979年～現在、毎日放送ラジオ「末次攝子の日曜サロン」出演


「戦艦ヤマトを引っくりかえしたような」て皆言うとりますがな。そいでも去年秋オープンの時は、えらい人気。伊勢丹デパートへぎょうさん行かはって、毎日１億ずつの売り上げで」タクシードライバーは京都駅へ向う私を旅人と見て、晴れがましく説明します。「京都らしくない」「センスが悪い」「金もうけ主義の設計」「高さ制限で横に拡げすぎて、動線がややこしい」等々、物議の渦巻いた新京都駅。メタリックな外貌で、まだ建設が続いています。

この夏、日曜日の午後、東京から友人がやって来たが、大変な人出で、喫茶店も満員です。ホテルの料飲街が開く５時まで、ホテル３階に張り出しのビアホールで待つことにしました。なま温い風が通るここで、遥か正面に全長140メートルの長いエスカレーターに群り乗る人々が、豆粒のように波打つのを望見して、民衆の流動エネルギーを実感します。

友人は新幹線からの通路の踊り場（通称＝室町広場）で「マンガ大会ショーに揉まれて来た」と汗を拭く。「すっげえ眺めだったぜ」と今日の印象を、東京へ帰って告げるでしょう。「おのぼりさんばっかしで、京都人はめったにいませんやろ」と言ってのける京都育ちにも感心しますが。

京都タワーは、今では「なつかしいシンボル」と洩らす人がふえたそうです。建設のころ、もっと造型感覚が磨かれていて、経済力があったなら、スマートな形に出来上っていたでしょう。

古都の自然も、由緒ある建造物も、大切にしなければならぬのは勿論ですが、街の姿は、世相と共に変ってゆく。鴨川のフランス橋―ポン・デザールのいきさつは、興味深いものでした。

御堂筋を久しぶりに淀屋橋から南へ歩く午後。街路樹の蔭にしゃれた彫刻が並んでいました。グレコやブルーデルの女性像、朝倉響子、清水多嘉示、と作品いろいろ。ぼってり、おいどの張った立ち姿は「ア、日本の女だ」と口走ったら、つれ立つ青年が笑いました。高村光太郎作「東北の女」。農耕民族の肉付きをよく捉えています。

爽やかな少女像の左右にびっしり自転車を置いてあったりして、味気ないが、これも商都のエネルギーと見るべきでしょうか。

車は南を指してひた走り、舗道の人もせかせかと急ぎます。「御堂筋のたそがれは―」と昔の歌にありましたが、今も陽気と時刻とによっては、人々は語らい歩いているのかしら？

金融機関のビルが堅い表情をつらねて、近寄りがたくしています。ショウウィンドウには、無雑作な自社の広告ポスターを並べるのがやっと、の野暮な光景です。１階のガラス張りの中に軽やかな茶房や花屋でもあったら、もっと色気のある街になるでしょうに。

美しい形が、綺麗な背景のゆとりある場所に立っているのは好ましいが、地方都市が真似をして、行政マンや議会人の思いつきで、あるいは何かの縁の造型物を、ごそごそ立てたがるのは笑止です。移りゆく時代に耐える見識で取り組まなければ税金が泣きます。

「市民憲章」と呼ぶものを、競うように並べたのは昭和40年代のことでしたか。大阪では大阪市ほか7市1町を除く35町村が、おごそかに宣言したようです。目抜きの行政の建造物の前で、大きな石材に刻みこんだ「心と心を結ぶまち」「生きるよろこび燃やすまち」などなど、れいれいしい文字にクビをかしげたくなるのは、私ばかりではありますまい。

梅田のディアモールは、ミラノ風が売りもの、とか。“ドウモ広場、とは!?”どうもどうも。綺麗で不愛想なことは、駅前１、２、３ビル地下街のそうぞうしい庶民性と対蹠的。西へ西へと地下をたどれば、天井が、猛烈に低くて。お役所仕事も百面相ですね。

長堀地下のクレスタをのぞきます。派手な造り、広い通りに人影が少ない。ブランド物を扱う服飾店が軒並みに閑散として。ガラス天井を流れる水の趣向、広場のモニュメントもデラックスだが、人工の街の薄ら寒さも…。「アメリカ村や心斎橋筋から人の群を呼び込む構想」とか聞きますが。たのしい生活感が漂う日を期待することにしましょう。

## メルボルンの学校

杉山　茂一

昨年、１ケ月ほどメルボルンに滞在したときに、学校建築を幾つか回ってみた。メルボルンの学校については予備知識もまったくなく、明確な意図をもって見たわけでもない。20校ほどを駆け足で回ったことでもあり、ごく表面的な見方しかできなかったのかもしれないが、一つ示唆を受けた点があった。

メルボルンの学校には、建てられた時期や地域によって幾つかのタイプがあるように見受けられた。そのなかに、管理部門とホールを核として、これに教室群を付属させる構成の学校建築があった。ホールは地域の象徴となる立派な建物で、建設後数十年を経過している。一方、教室群は粗末なプレファブ建築で、その配置はやや成り行き的である。おそらく児童数の増加にともなって、教室の増改築が行われてきた結果なのであろう。

建築計画的には粗雑なところが多く、どこまで意図されたものなのか疑問なところもあるが、学校建築のなかで地域の核となる要素を固定する構成は、学校と地域の関係、変化への対応という点で、都市における学校の一つの方向を示すもののように見えた。ちなみにホールは地域の集会に開放され、なかには結婚式場として利用されている例もあった。また、このタイプの学校は新しい郊外住宅地にはなく、インナーサバーブに幾つか見られた。

大阪市立大学工学部建築学科助教授

## マイホームづくり―(3)

増田　繁治

建築を志した者にとって、マイホームを自分の手でつくることは、生涯の夢である。それが30代で実現できたのであるが……。一応専門家と言われている者がつくったが故のさまざまな悩みや問題点がつぎつぎと出てくるのである。日本の住宅を考える時、夏期の風通しと冬期の日照をいかに旨く設計に取り入れるか、である。つまり、方位の確認と敷地隣接の状況をしっかりと頭に入れてプランをつくることである。この基本を疎かにすると取り返しのつかないことになる。また玄関や廊下、階段は将来を見越して広めにしておくこと、台所は明るく清潔に、２階建ての場合は２階にもトイレをつくることである。家族に女性が多い場合には、整理がし易すく十分な広さのある納戸を用意することも重要な設計の要素である。自分の個室（城）が持てて、１つの夢がかなったのであるが、娘の成長と共に城は侵食される運命であった。

これまでの反省を糧として、出来ればもう一度、理想的なマイホームづくりに挑戦したいと思っている。その時には、尊敬している（故）村野藤吾先生が常に手を入れていたときいている宝塚の村野邸を手本にしたいと考えている。建築は、雑学の集大成であると言われているが、その中でも住宅づくりは、特別にむずかしいものと、実感しているところである。

兵庫県都市住宅部営繕課長

## 意を決して

梅原　良矢

高校を卒業して以来、９年間ほど東京で学生生活を過ごした。

就職で大阪へ帰ってきたのだが、両都市の違いがなんとなく理解できるような気がしている。５年ほど前から、明治神宮と代々木公園に面した敷地に建物を計画しており、現在、その設計監理の為、ほぼ週に１度東京に出張しているので、時間の有る限り新しい建築や展示を見たりはしている。建築は自分で訪ねることによって実物を確認できるのだが、建築家やデザインの流れ等の展示空間は、都市によってかなりの違いが有り、その内容の理解や想像力に異なった印象を受けることが多々ある。ある都市でスタートした展示がすばらしかったので、別の都市でもう一度確認したいと思って行くと、展示スペースの関係からか重要な部分が省略されていたり、空間が落ち着かなくその作家の理解に集中できなかったりもする。展示というのは、その建築空間そのものと全体の構成といった要素が非常に重要に思える。

大げさな言い方だが、最近、意を決して、水戸までイタリアの建築家の回顧展に行った。この展示は残念ながらこちらには来なかったのだが、その作家の豊富な内容、展示空間のすばらしさ、展示の構成の仕方等にかなり刺激を受けることができた。

坂倉建築研究所取締役

## 京・散策“湯葉（ゆば）”

浜崎　彰

仕事で京都に行った折、夜の食事となるとおばんざい（お惣菜）の店へ足を運ぶことが多い。たまに奮発して京料理をと思っていても、つい懐と相談してしまう。

おばんざいには、一年中変わらない定番メニューと季節の素材を使って調理したものなど種類も多く我々には馴染みやすい。その中で私は“湯葉”を使ったものを注文することが多い。特に気に入っているのは、生湯葉を、おろし生姜をいれた醤油だけで食べる湯葉刺である。また、さっと揚げて粉山椒をちょっとかけたものも変わった酒のつまみになる。湯葉は淡泊な味で料理の主役にはなり得ないから、さりげなく料理に使われていることが多いが、それだけにその上品な味は飽きがこない。

かつての京都は名水の町であった。町の中いたる所に澄んだ水を湧き出せる井戸があり、豆腐・湯葉・麸（ふ）といった京の味を代表する食品は、そうした名水によって育てられた。現在京都にも湯葉専門店は数えるほどしかないが、これらの老舗が昔からの製造法を続けていることはうれしいことである。

この飽食の時代に大豆を原料とした湯葉は、良質の蛋白源として栄養価が高いにもかかわらずヘルシーで、生活習慣病（成人病）予防のための伝統的健康食品といえるだろう。

清水建設大阪支店設計部部長

■ 特集 ■

# 建築への証言'98——*21世紀に向けて*

20世紀の建築とその後に来るもの／川崎　清

建築技術者のあり方から見た20世紀の建築／福田晴虔

建築——20世紀から21世紀へ／馬場璋造




20世紀の建築は語られ、そして21世紀の建築は描かれたか／佐藤不二男

企画　建築系分科会　　Layout　Mitsuhiro Hattori

# 20世紀の建築とその後に来るもの

川崎　清

建築家・立命館大学教授・工学博士

世紀末という言葉のイメージであろうか、何となく爛熟した文化がやがて衰退する暗いイメージがある。しかし、世紀末の直ぐ隣に新世紀という新しい希望に満ちた世紀が待ち受けている。本当に世紀末とか新世紀には特化した現象があるのだろうか。編集者から寄せられたテーマは、「これからの建築の可能性」と言うことで、21世紀の展望を開く建築の未来予測とも言うべき内容で、私にはやや荷の重いテーマである。そこで私なりに20世紀の建築の総括を中心に、その後に来る問題を論じてみたい。

## 世紀末と新世紀

今は、正に世紀末の真只中で、もう21世紀が目前に見えている。ここへ来て、サスティナブルの地球をめざして、急に、デザインの視野が大きく動いて、地球レベルに直接かかわることになって来ている。また、バブルの崩壊から、我が国の政治経済は先行き不透明な不安感に満ちたものになって来た。世紀の境目に来て、にわかに世相は激変の様子を見せ始めているが、建築界は、それらと無縁に推移することが出来るであろうか。

100年前、20世紀の幕開けの時代は、ヨーロッパではフランス革命の後遺症も薄れ、新しい国家体制の確立が急がれていた時代であったことと、産業革命の成果が大きく実ろうとしている頃であった。19世紀末のフランスはベルエポックと呼ばれ芸術の最も華やかな時代であった。エッフェル塔が建てられた1889年のパリ万博に続いて1900年のパリ博はシャンゼリゼー、アンパリッドとエッフェル塔を結ぶ都市博であり、同時に世紀末を彩ることになったアールヌーボー博とも呼ばれるものであった。アールヌーボーは、世紀末に生まれ、新世紀になってまたたく間にヨーロッパ全土に広がり、アールデコに引きつがれるわずか十数年間の寿命であったが、正に世紀の変わり目を飾るにふさわしい現象であったと言える。それは、産業革命後の急速な技術の進歩に対する不安と疑念が形になったものである。この20世紀の境目の前後は技術に対する信頼と不安の間に、ヨーロッパ各地で多くの建築運動とともに芸術運動が現われたが、その中でアールヌーボーは正に技術に対する反技術の芽が大きく吹き出した最初の現象であった。

建築の歴史の中では秩序に対する反秩序の様な形で時代の表現が交互する問題を経験している。ギリシャ的なものに対するローマ的なるもの、ルネッサンスに対するマニエリスム、バロックとロココ、様式復活に対する折衷主義などなど、理性的、構築的なものに対する情緒的、浪漫的なるものなど、人間の精神の営為の表裏が、時代の表現となって絡まり合ってきた様に思われる。アールデコをはさんでドイツヴェルクブント、ゼツェション、ロシア構成主義、バウハウスなどを経て、抽象的で合理的なモダニズムが表現の主役を占めようとする頃、併行して社会は新しい国家体制の確立とその為の利害の衝突による国家の威信をかけた第一次、第二次の二つの世界大戦を経験していた。そして戦争は、これまでの建築界の動きに、様々の波紋を投げかけつつ一応はピリオドを打つことになった。

戦争は、一方で権威的象徴的な建築物を生みだすと同時に、また、戦争技術を急速に進めながら進歩の思想の基礎を固めて行った。この思想が、機能主義を戦後に引き継ぎ、合理的で進歩的な技術の世界を、再び、表現の中心に据えることになったのではないかと思われる。

我が国の建築は、この間、どう推移したのであろうか。20世紀の幕開けは、ちょうど明治の革命期を乗り越え、国家の威信を高めつつあった頃で、1904年の日露戦争も勝利を得て、いよいよ近代化に入ったころであった。片山東熊、辰野金吾、岡田信一郎、などがそれぞれ宮廷建築、官庁建築、民間建築などに活躍を始めた頃であった。その後、我が国にもアールヌーボー、表現主義などの影響を受けた建築はなくはなかったが、ヨーロッパの様に華やかに開花することはなかった。世紀末を区切ることなく足早に過ぎた。この時から大正リベラリズムや昭和初期から興った帝国主義的な動きなど紆余曲折しながらも第二次大戦が終わる20世紀の半ば頃迄は、大きな見方をすれば、近代化を急ぎつつ、西欧の建築に追いつけ追い越せの時代であった。ようやく欧米と同調しながら建築界が歩み初めたのは20世紀の後半の舞台になってからである。

## 技術主義と反技術の表現

20世紀の後半の建築は、機能主義の展開と修正を軸としながらも、メタボリズム、ポストモダニズムなど多彩に色づけされて来た。そして、技術の普遍的表現を通し、汎世界的表現を目指すものから、固有のアイデンティティを表現しようとするローカルで個性的な建築に至るまで、多様な建築の表現が開拓されている。戦後の早い時代は機能主義の復権から始まり、その理論に沿ってインターナショナルアーキテクチャーが世界的な潮流となりつつあった。その反面、フランク・ロイド・ライトやアルヴア・アアルトの様に初めから機能主義とひと味違った個性派の巨匠達も既に存在していた。

戦前から機能主義を標榜して実践して来たル・コルビュジエが突然にロンシャンの教会（1952年）を発表し、建築界に大きな衝撃を与えた。巨匠自らが自己否定を宣言するかの様であり、それまでの理論の皮を破って、本来のコルビュジエらしさが出てきたと言えなくもない。秩序の強化と破壊は個人の中でも起きている。これを契機に、確固とした地歩を進めていた機能主義の建築が揺らぎ始め、建築の表現の流動化が始まったのではないかと思われる。

やがて近代建築をリードしていたCIAMも1956年、第10回会議でのチーム10の動議がきっかけとなって1959年に約30年の歴史を閉じることになり、近代主義は一応の終息に至った。

こうして1960年代位から建築のデザインが多様化の方向へと分化し始めた頃、H．ホラインのレッテーの蠟燭（ろうそく）店（1965年）など一連の作品は小品ながら、デザインの質が近代建築の拡大する技術思想に立ち向かえることを示す、象徴的な作品であったと思われる。さらに、金属とガラスによる明澄な空間を表現したJ．スターリング、建築の古典的で重厚な質感を表現したルイス・カーンなどは、モダニズムの修正と決着を示すものと思われた。

こうした間に我が国でメタボリズムの建築が現われたが、工業部品を生物細胞に置き換え、その思想と方法論に新鮮なものはあったが、機械論的な技術の思想を超えるものにはならなかった。そして、ポンピドゥセンター（1973年）を契機として新しい展望を開くものとして、レンゾ・ピアノ、ロジャース、フォスター等のラディカルな技術表現の担い手達が現れた。そして、この傾向は息が長く、さらに鋭くメカの究極を探るかの様に、最近のテンション構造を多用する軽快で透明感のあふれる建築に引きつがれている。

一方でR．ヴェンチューリやM．グレーブスなど強烈にモダニズムを否定する一群の建築家達が現れた。これまで機能主義の形と機能の融合や技術特有の純粋抽象的な表現とは異なり、ヴェンチューリの提唱する表現のハイブリットと磯崎の言うメタファーがデザイン手法のキーワードとなってポストモダニズムが展開し、多様な手法や形のコラージュ、アドホックな建築、バナキュラリズムなど、1980年以後は多様な建築の時代となった。

## 大空間と巨大建築

技術、反技術の対立の構図はあったが、ポストモダニズムは、アールヌーボーの如く時代に彩を添える役割を果たしながら、その幕を引きつつある。20世紀の時代が要請したものは、やはり、工業技術の進歩と戦争やその後の冷戦時代の宇宙開発などによる組織技術の発達によって、大型化していった建築ではないかと思われる。

例えば、ネルヴィーのローマオリンピックの競技場（1959年）や丹下健三の吊り屋根の国立水泳競技場（1963年）などに始まり、構造によるデザイン表現、或いは、技術による空間表現が20世紀の正当な建築表現であることを主張しつつ、1970年の大阪万博のお祭り広場に引き継がれた様に思う。大阪万博は「進歩と調和」がテーマであったが、建築界は正に進歩する建築、拡大する建築の表現の場になった。

その後の建築の巨大化は、超高層建築の方向とドーム建築に代表される大空間化の方向に向かった。

超高層はアメリカの専売特許の様なものであったが、戦後、ヨーロッパでもミラノのピレリータワー（1959年）、デュッセルドルフのフェニックスタワー（1960年）などを皮切りに始まり、地震国の我が国でも、振動理論による新しい構造概念によって、遂に霞ヶ関ビル（1968年）に超高層が登場することになった。二桁クラスであった建築の高さは、世界では400m級、我が国では200m級と三桁の数字を争う時代になった。超高層は構造的制約の為、表現の点で大きな制約を受けていたが、丹下健三の東京都庁舎（1991年）と原広司の大阪梅田スカイビル（1993年）によって、表現が超高層の制約を乗り越えられることが実証された。



京都駅（原広司）

大空間指向は、一方で大型化する建築の中のアトリウム空間を生みだし、もう一方ではブームとなっているドーム建築を生み出している。ここでは空間がメインなのではなく、そこに内包される人間のイベントが発生するドラマこそが主役であるとしながらも、時代を象徴する存在となっている。

大空間建築で特筆すべきは、レンゾ・ピアノの関西空港と原広司の京都駅である。

関西空港は大型建築であるにもかかわらず、手仕事のような精巧なディテールの完成度によって、技術の成果であるより、人間の成果、或いは技術と人間を結ぶデザインの成果であることを示し、緊張感のある空間をつくりだしている。20世紀の建築の一つの到達点を示している。一方、原の京都駅は、その評価について未だ定まりにくい点もあるが、内部に都市空間をつくり出し、都市を内包することを遂に実現した建築であることを示している。

建築家の見果て夢の中に建築がいつか都市を超えるということがあった。バックミンスタ・フラーやフライ・オットーなど構造的建築家が都市を覆う建築を構想したが、私の見方では、実現したのはパリのオルセーの美術館（1988年）と京都駅ではないかと思っている。オルセーの美術館は1900年パリ万博の時造られたオルセー駅を改造したものであるが、駅舎の大屋根の中に、まるでショッピングストリートを歩きながらギャラリーを鑑賞する様な都市的な空間をつくりあげた。原の京都駅は、大階段を中心に都市や自然の持つスケールと群がる人間のダイナミックな演出を手中にした。これらも一つの20世紀建築の成果でないかと思っている。

## 環境の思想

20世紀を一口に言えば巨大文明の世紀と呼ぶことが出来る。人類や或いは建築家達が夢想したものをほとんど手中にした。勿論拡大する夢ばかりではなく、多くの豊かな質をも手に入れた。しかしそれは、その裏で、物質とエネルギーの消費によって保証された空間である。その結果は地球温暖化、資源エネルギーの涸渇、環境ホルモン、地球砂漠化など、地球スケールの問題を引き起こすことになった。人間、社会、自然の共生の問題は、これまでの建築の方向に重い制約となって立ちはだかると思われる。

その様な意味で、京都駅などは20世紀の一つの成果を総括した建築であると同時に、20世紀の終止符を打つべき建築の一つであるかもしれない。いずれにしても時代の曲り角、或いは世紀の悼尾を飾るにふさわしいものではあったが、新しい時代の指標となるべき建築かどうかは今後の推移を見守る必要がある。そして今でも大深度構法や1000mタワーなどジオフロントへのあくなき挑戦は続いている。環境の時代・経済減速の時代を迎えて、巨大建築の時代は終息するのではないかというのが当然の見方である。しかし、構造的な文明の肥大化が、俄かに終息へと向かうかどうかはなお、予断を許さない。

当初、建築家達が意識した環境は、およそ視界の及ぶ範囲の環境であった。周囲の環境と文脈をつくる建築という解釈と、建築と緑の共存によるエコロジカルな表現を標榜する建築がそれである。緑の建築が始まったのはオークランドの美術館（1969年）からで、最近はE．アンバースなどに刺激されて、建築と緑の関係はより大胆になってきた。環境の思想としては未だ未成熟な段階であるが、建築が単体に溜まっていることに比べて、周囲に眼を向ける建築、緑を回複する建築は環境と共生する第一歩と言える。今環境との共生と言われるのは、省資源・省エネルギーはもとより、環境負荷の抑制、自然エネルギーの利用、リサイクル可能な材料の選定、有害物質の排出規制、耐用年限に対する工夫、地域風土になじむ空間のデザインなどなど、その課題は多い。こうした地球のサスティナブルな課題に対して、どこまで追随するか、正直なところは建築家は迷っていると思われる。しかし、一つ一つの試行錯誤の努力は、集積によって大きな成果となるであろう。

環境問題は表現に参加しにくい技術の問題を多く含んでいる。環境問題をつきつめると、建築は造らない方が良いという結論になるので、建築家の興味をそそるテーマになりにくい。しかし、気候風土になじむ空間と材料の使い方、リサイクル可能な材料や運搬エネルギーの少ない地場産材の使用、使い捨ての建築からストックとしての建築、地域風土になじむデザインなどのテーマは少しずつ建築の表現を変えていくものと思われる。


パリのオルセーの美術館

最近、鉄、ガラス、或いはコンクリートの中に集成材などの木材を用いる建築、瓦や土壁などの地方色豊かな材料を用いるなど、モダニズムとバナキュラーな感覚を統合しつつ、新しい風土主義の可能性が芽生えている。一方で、技術ラディカリズムはさらに進化して、フレームの消失感と共に光と陰をデザインのキーワードとする建築を生み出している。これは見方によっては桂離宮の様な日本の伝統的美意識に通じるものがある。緑の建築、バナキュラーな建築、そして透明な建築の三つの方向が最近の顕著な傾向になりつつある。

## テーマの喪失

20世紀は、物、空間、スピード、エネルギーなどが価値を持った時代である。それに新たに情報が加わった情報化時代と共に情報が価値を持つ時代となりつつある。20世紀から21世紀へかけての情報化は予想をはるかに超えて拡大すると言われている。氾濫するメディアの前に若者は創造よりも選択に追われるか、マスメディアの安っぽい共有イメージを押しつけられている。情報化が進むということは、情報が開かれていく中で、共有のイメージが拡大し、様々な領域の境目が消失していくということではないだろうか。溢れ出している情報の洪水によって自己を見出す余裕がなく、情報を咀嚼して自分と同化するいとまもない。かくて、個が自らの生きるテーマを喪失する時代に入っているのではないかと思える。「ゆらぎ」「カオス」などに特有の共感を見せる現象がそれである。

明日の建築を荷う最近の学生の設計やコンペの応募作品を見ていると、イメージ表現に優れた才を見せる反面、内容が空疎で病的なひ弱さを感じさせるものが多い。

我々は多様な世界に生きている。自己と外界の多様な関係をつなぎ、多様な中における自己の位置づけができてこそ、多様さを生きた環境、或いは、生きられる環境として捉らえることが出来る。環境との関係がバラバラで、自己と周りの文脈が構築できない人格による犯罪が多発している。最近、犯罪者の精神鑑定に、これまでなかった「多重人格」と呼ぶ新しい人格の特定が行われた事件がある。「多重人格」とは過剰なメディアや現象の前に、それらの脈絡をつなぐことの出来ない欠損した人格のことを指す。A.V.などの強い刺激によって、バーチャルな世界と現実との区別がつかず、人間愛と欲望との関係が把握出来ず、局面局面に応じて反応するだけで、統合的に自己をつくることが遂に見いだせない人格である。人間の個の喪失、テーマの喪失の兆候は始まっている。そして、それは社会全体のテーマの喪失につながっていく。

建築家の作業は現実を直視することから始まる。そして多彩なメディアを表現の手段として用い、複雑で多様な関係を一つの形に統合する。我々建築家は頭脳（思考）と手（技術）の連動によって一つの解に集約する方法をもっている。我田引水であるがこの多様な課題を目前にして、21世紀の人間像に求められるのは、良く訓練された建築家の様に、多様性を統合的に把握できる能力である。

この様な多様な諸源から一つの解を導くのは、進歩する情報技術に頼るか、もう一つは研ぎ澄まされた建築家の鋭い感覚によるものと思われる。システム工学は仕組みの統合制御には向くが、形の統合や形成は、建築家の鋭い感覚に頼らざるを得ない。

20世紀は機能主義に始まり多くの理論を生み出した。20世紀は技術の延長とそれの克服の葛藤の時代であり、その為に多くの建築理論が生まれた時代でもある。今、環境時代を迎えて、これまでのスケールを超えた課題の前に、新しい理論の構築を待つ間、情緒や感覚が理屈を超えてマジョリティを発揮するのではないかと思われる。

地球スケールと建築の関係を統合する哲学が望まれるが、このグローバルな問題を前にして、一回り大きく頭と手の連動を動かす必要がある。生き方への模索（頭）と、問題を解決する工学的方法（手）の両者からのアプローチが求められる。我々建築家は単に職能人としての建築家である以上に、社会をリードする立場で、都市のそして地球のグランドヴィジョンに立ち向かわなければならない。その様なオリエンテーションの中で、建築とは何かを考えることによって新たなるテーマが浮上するものと思われる。それは「人間と環境をつなぐものとしての建築」のテーマに他ならない。

（かわさき　きよし）

# 建築技術者のあり方から見た20世紀の建築

福田晴虔
九州大学大学院人間環境学研究科教授

## 1.「デザイナー」の出現

教科書的解説によれば、近代のデザイン思潮はウィリアム・モリスの「アーツ・アンド・クラフツ」運動を出発点としているとされる。それは手作りの職人仕事を理想とするもので、物づくりにおける作り手の主体性の回復がそのねらいであったということになっている。その後、二十世紀に至って「モダン・デザイン」が定着したとされ、そして世紀末に近くなったいま、それも「終わった」と取り沙汰されている現在、果たしてこのモリス的理想が部分的にもせよ達成されていたのかどうか、その答えは微妙である。

近代における「物づくり」のシステムが、モリスが考えていたほど単純なものではなかったのは確かだし、資本力を持たない職人が自立して物づくりをリードするという考え方が、モリスらが夢想した社会主義の体制下ですら不可能であったことは、私たちがこの目で見てきたところでもある。

またモリスらの誤算は、建築の分野において「建築家」と称する職能の占める領域を、過大評価（?）していたこととも関わっている。つまり、厳しく動きつつあるヴィクトリア朝の社会の中で、旧態依然のフロック・コートに身を包んで自らは手を汚すことをしない「建築家」たちを、物づくりにおける専制君主であるかのごとくにとらえ、その社会的存立基盤を突き崩すことに努めたということである。1891年、建築家登録法の国会上程を目指すRIBA（Royal Institutes of British Architects）の目論みに対して、モリスをはじめとする一団はこれを阻止すべく*Times*紙上で一大キャンペーンを開始している。世に言う“Profession or Art Controversy”である。

彼らは、「建築家」そのものの存在を否定したわけではなく、それが「プロフェッショナル」として社会に位置を占めることに反対したのであって、それは「芸術家」であるべきで国家資格などによって格付けされるべきではないと主張しただけであったのだが、建築家が近代社会の中で安定した地位を確保するためには、プロフェッションの途を選ぶしかなかったことも確かであって、モリスらはそれに対していわば「文化大革命」的な論理で立ち向かおうとし、「裸足の医者」ならぬ「裸足の建築家」を求めたのであった。

これは実は、建築が「芸術」か否かといった文化論ではなく、先頃の中国の場合のごとく、むしろ政治論争であるべき性質の問題であったのだが、十九世紀末の時点では、これが「近代」社会のシステムの根幹に関わる問題であるとの認識は、まだ出来上がっていなかったのであろう。

ただし、このキャンペーンは、モリスその人がリードしていたわけではなく、その中心となっていたのは、レジナルド・ブロムフィールドやノーマン・ショウらの「タレント」的、ないしは貴族的建築家たちであり、最晩年のモリスは、その知名度のゆえに担ぎ出されただけなので、その件におけるモリスの役割はだいぶ割り引いて考える必要がある。ここでモリスの名前を引き合いに出したのは、たまたまこのキャンペーンが彼の旧来の主張と一致していたということで、象徴的に感じられたからにすぎない。

この論争はどちらかが勝ちを占めたわけでもなかったが、結果的に英国では建築家登録法の施行は、それから半世紀ほど遅らされた。英国の建築家登録法は、その後、幾度も上程が繰り返され、1931年に一応の法制定がなされたが、これはまだきわめて不完全なもので、建築家が登録するか否かは任意であり、「登録建築家」という肩書きだけしか保証されなかった。1938年になってようやく、国家試験に合格し登録したものだけが「建築家」を名乗ることができるかたちとなった。ただし、これはそのように名乗らないかぎりは実質的に建築家の業務を行なうことを妨げない。つまりこの登録法は「建築家」という名称だけを法的に保護するものということができ、その後もこの法律の骨格は変わっていない。

モリスらの攻撃にもかかわらず、二十世紀になっても「建築家」は生き延びた。それどころか、1900年のパリ、1906年のロンドン、1908年のウィーン、1911年のローマと、第一次大戦前に立て続けに行なわれた建築家国際会議は、いずれも各国における建築家登録法の制定を要望する決議を採択していたし、英国では1890年代から

1940年代までの半世紀間に、登録法の推進母体であるRIBA会員の数は八倍ほどに増えている。このことから見るかぎり、プロフェッション化の趨勢は押し止めがたいものであったように見える。しかしこれがモリスらの側の完敗を意味したのかといえば、必ずしもそうではなかったところに「近代」の複雑さがあった。

モリスらの「手作り」の思想がそのまま実現することはなかったにせよ、そこからはあらゆる物づくりに共通する「デザイン」という考え方が生まれている。これは近代社会の職能システムとは関係なく、アール・ヌヴォーの時代を経て、グロピウスらの「モダニズム」にそのまま持ち込まれた。

モダニズムの「デザイン」思想が、そうした近代の職能システムとは無縁のところで出来上がっていたものであることは、建築に関して最も厳しい職能制度をそなえるフランスで、全く無資格のスイス生まれの若者シャルル・エドゥアール・ジャヌレ、つまりル・コルビュジエが活躍し、国家的権威とは無縁のところで世界的名声を得たことからみても明らかである。

そして近代の職能システムから外れたこの「デザイナー」という職業の出現こそが、近代の建築を特徴づける現象であると考えられる。一人の人間が「デザイナー」と職能的「建築家」の双方の顔を兼ね備えることは可能で、そうした例も数多く見られはするが、しかしそれら二つの顔の出自は互いに全く異なっているし、多くの場合、その利害は対立する。なぜなら、前者は「個」の理論で行動するのに対し、後者の行動原理は「集団」だからである。

こうした建築における「個」と「集団」の乖離現象は、19世紀以前には考えられなかったことである。モリス自身もおそらくこのような事態は全く想定していなかったはずである。

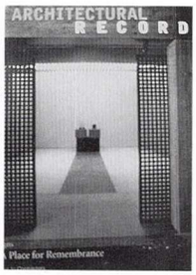
彼はむしろ、無名の「集団」の美意識が職人の手を通じて表われてくると信じていたのであり、物づくりの主体であるべき「職人」がいつの間にか「デザイナー」にすり替わり、既成の社会集団から外れた「個」として行動する一方、「芸術家」であって特定の集団の利害から超然としていたはずの建築家の方が、集団の論理で動き出してしまうということは、彼らの夢想だにしなかったことであろう。この「ねじれ」現象が産み出したもの、あるいはその矛盾を逆手にとってエネルギーに転化しようとしてきたもの、それが近代の建築であった。

## 2．プロフェッションの内と外

近代の建築家の「集団原理」、つまりプロフェッショナリズムは、必ずしもルネサンスの「人文主義者」的建築家の場合のような、内在的要請から生まれてきたものではなかった。それは、市場経済のなかで身を守るためにやむなく編み出された保身の戦術であったから、社会のあらゆる動きに対して「中立」の立場をとらざるを得ず、その中から時代を揺り動かすような新しい試みは出てこようはずもなかった。二十世紀の建築の新しい試みは、たとえば、リートフェルトが一介の家具職人であったり、ベーレンスがグラフィック・デザイナーあがりであったりしたように、ほとんど常に建築界の外側の動きに刺激されて現われてきたものであり、そうした外の動きを建築と結びつけるのが「デザイナー」の役割となった。建築はその自己展開の契機を、建築の外側にいる「デザイナー」に委ねてしまうのである。

あるいは、建築家集団の内側にいる者であっても、何らかの革新を試みようとするときには、そうした孤立した「デザイナー」の顔を持たなければならなかった。

そうしたジレンマを鋭く衝いていたのが、1933年、ブルーノ・タウトを迎え、大阪で催された建築家たちの集まりでの村野藤吾の講演、「日本に於ける折衷主義建築の功禍」（≪建築と社会≫1933年6月号所収）である。おそらく村野には、モダニズムの当時の方向について、その動機には深い共感を抱きつつも、それが必ずしも建築の内在的な課題に応えるべく産み出されたものではなく、保守的な折衷様式を求める当時の商業主義の風潮のなかでは、プロフェッショナルな建築家の地位確立とは結びつかないことが危惧されたのであろう。



Architectural Record 誌

実際、この時期の最先端のモダニズムは、多くの場合、商業建築ではなく公共建築によって代表され、また、それに携わっていたのは、フリーのアーキテクトでなく、官公庁の営繕を担当する技術者たちであった。彼らには市井のフリー・アーキテクトのような商業主義との格闘は無縁のことであった。

この当時、世界中の建築家たちを見渡してみても、こうした内在的要請と建築家の職能のあり方とを結びつけて考えようとしていた者は数少ない。建築家の職能の確立が遅れていた日本のなかからの発言という特殊な情況があるにしても、これは近代に共通する問題であっただけに、村野という建築家の慧眼と真摯さがしのばれる。

しかし、職能的建築家集団が近代建築の展開になんら積極的役割を果たさなかったとするのが、過小評価であることもまた明らかである。建築技術者の資格を保証しようとする彼らの努力が、きわめてゆるやかにではあるが、フォーマルな建築教育システムの定着と結びつくことによって、やがて多くの人材を世に送り出し、また、かつては古典建築のコピーに明け暮れていた設計教育に、近代的な「プランニング」の視点を導入したことは、もはや近代主義の後戻りを許さない強固な基礎を提供することとなった。

実際のところは、大学における建築教育、とりわけ「建築家教育」のコースが世界中に行きわたるのは、第二次大戦後を待たなければならず、英国の場合ですら、1940年代までは、十八世紀以来の事務所での徒弟的教育を経て建築家となった人々の割合の方が、遙かに多かったほどである。またいったん確立された教育機関は、しばしば「アカデミズム」の拠点となり、一見したところは「中立」の立場をとるかに見えながらも。その実、自由さがなによりも重視されるべきデザイン教育を圧し殺しがちであったことも否定できない。そのことがまた職能的建築家における批判的「デザイン・マインド」の欠乏とつながることにもなる。

しかし、こうしたデメリットを考慮してもなお、フォーマルな「中立的」建築教育システムの普及が近代の建築を支えてきた原動力の一つであったことは、当然ではあるが、見過ごしてならない事柄であり、その功罪評価をめぐる論議が深められる必要がある。

ただし、これらのフォーマルな建築教育は、ほとんどの場合、プロフェッションの主導によってなされてきたものではなかったのであって、プロフェッションはある意味で、それに「ただ乗り」してきたと言われても仕方がない面がある。それが一面では、教育の自由を保証することにもなったが、その反面、プロフェッションの求めるものと学校での教育とがずれ始め、大学での訓練がプラクティスと直接結びつかないという問題も生じている。

プロフェッション自身も、技術の高度化・細分化が進んで、もはやかつてのようなのどかな「建築家」という肩書きだけでは、仕事ができないまでに至っている現状では、教育機関に対して明確な統一的要求を行うことは望めない。いまやむしろ、教育の側からプロフェッションに対して主体的に指針を与えるべきときであるように思われるが、果たして現在の「中立的」教育機関にそれだけの力量があるだろうか。

学校教育とならんで、近代の建築界におけるもう一つの特徴は、建築ジャーナリズムの存在である。「プロフェッション」はその構成員の間に共通の文化を保持するために、内部的情報交換のメディアを必ずそなえているものであり、その意味ではさほど特異なことではないが、しかし建築の場合には、多くのメディアが建築界と一般の社会とのつなぎ目の位置にありながら、建築界全体のトレンドに影響を与えるほどの大きなファクターとなっている点が注目される。

たとえば、アメリカの *Architectural Record* 誌や、英国の *Architectural Review* 誌などは、いずれもプロフェッションの外側で作られた商業誌でありながら（あるいはそのおかげで）、「モダニズム」の普及・展開に大きな役割を果たしてきた。サリヴァンやライトをクローズ・アップさせた *Record* 誌のモンゴメリ・シュイラーや、保守的な英国の中にあって一貫してモダニストの側に立ち続け、それを定着させた *Review* 誌のペヴスナーらは、CIAM のマウス・ピースであったギィーディオン以上の役割を果たした。

ル・コルビュジエをはじめとするモダニストたちが、プロフェッションの集団のなかには居るべき位置を与え



Architectural Review 誌

られなかったにもかかわらず、世界の目を集めることができたのは、こうしたメディアのおかげであり、どちらを利用したとは言い切れないが、少なくともデザイナーの側はメディアの威力を充分意識していたはずである。

このようにして建築ジャーナリズムはプロフェッションの内・外両側に網を張り、外側にいる前衛的なデザイナーたちの活躍を拾い上げ、保守的なプロフェッション内部に影響を与えてきた。またプロフェッションの外側にいて情報を得ることができない建築学生たちにとっても、これは重要な啓蒙的ルーツであって、そこに掲載された批評は、多くの場合無味乾燥で退屈な学校でのトレーニングよりもはるかに大きな刺激を与えていた。

1960年代あたりを境にして、建築ジャーナリズムのあり方は大きく質的に変化したように見える。それはかつての「巨匠」たちが相次いで世を去り、重要なニュース・ソースを失ってしまったことにもよるのであろうが、かつての *Review* 誌や *Record* 誌、あるいは *L'architecture d'aujourd hui* 誌などの老舗のジャーナルはパリーを失い、米国の名門誌 *Architectural Forum* 誌は廃刊されるなど、建築言論界の求心力が急速に衰えた。それに代わって登場したジャーナル類は、狭いサークルをターゲットにしたものや、啓蒙的・批評的傾向の薄れた単なる「中立的」情報誌、あるいはタレント的建築家の宣伝誌となる傾向を見せている。しかし、これは必ずしもメディアの威力が失われたことを示すわけではなく、どのようなメディアにせよ、そこに登場し、あるいは取り上げられることではじめてプロフェッション内部でもその存在が認められるという構図はますます強まっており、肥大化し、細分化したプロフェッション内部でのコミュニケーションの欠如を、こうしたメディアが補う役割を担っているのである。

## 3．「祭りのあと」で

このように見てくると、「個」と「集団」の間の矛盾を梃子として展開してきた近代＝二十世紀の建築も、世紀終わり近くになって、その矛盾のエネルギーを使い果たしかけているかのように思われる。矛盾自身は決して解消しているわけではないのだが、「個」の側でも、また「集団」の側でも、反発するどころか相互にもたれあう構図の方が目立ち始めているのである。それが「個」のパワーの衰退のせいなのか、あるいは「集団」の側の巧妙な取り込み策が功を奏したものなのか、そのいずれとも決しがたい。あるいは原因はいずれの側にもないのかもしれない。

バロック文化研究の大御所、グィド・モルプルゴ・タリアブーエは、その講演≪バロックと私たち——なにゆえ我々はバロック人ではないのか、あるいはいかにすればバロック人となるのか≫ (Guido Morpurgo-Tagliabue, *Il Barocco e noi : Perché non siamo e come siamo barocchi*, in *Anatomia del Barocco*, 1987) のなかで、現代美術が自然の「偶発的形象の究極性」（カント）と見られるような様相を周到に模倣する傾向を持つことを指摘している。

建築もその例外ではなく、最新の構造技術によって可能となった複雑で有機的な曲面や、軸線の非直角の交わりなどは、かつての建築にみられた「規範性」の幾何学に代わって、表現の面でも中立性であろうと望む「認証的」な美学が支配している、というのである。これは言い換えるなら、規範的思考による現状批判を回避しようとする傾向であり、矛盾に気づかぬかあるいはそれをそのままやり過ごしているということである。

こうした傾向はとりわけ「ポスト・モダーン」が「終わった」とされる1990年代以降のデザインに顕著に見られるものなのだが、果たしてこれが一過性の現象であるのか、あるいは「批評性」を武器として展開してきた十八世紀以来の芸術の終焉を意味するものであるのか、筆者には判断がつかない。

しかし芸術が社会の「鏡」であるとするなら、こうした傾向はまことにみごとに現代建築界の構図を映し出しているとも言えるだろう。二十一世紀デザインの趨勢を云々するまえに、我々自身の足許をもういちどたしかめておく必要があるのではなかろうか。

（ふくだ　せいけん）

# 建築——20世紀から21世紀へ

馬場璋造

建築情報システム研究所代表取締役

建築は20世紀を如何に21世紀に引き継ぐのであろうか。世紀が変わるといって、その瞬間から全てが新しくなるわけではない。助走がありバトンタッチがなされる。しかし走者が変われば走り方も変わる。20世紀には明らかに前の世紀と異なる建築思潮が存立し、いまやそれがまた変わろうとしている。とくに19世紀から20世紀への転換を的確に把握することは、次世紀への教訓となるであろう。その考察からはじめたい。

## 20世紀建築を支配した建築思潮

20世紀を支配した建築思潮の特徴を一言でいえば、モダニズムであり、イコール機能主義・国際建築様式である。しかしその成立から崩壊までを具体的に追跡してみると、モダニズムの支配はそう一筋縄ではなかったことがわかる。

しかしまず明らかな道筋は、コルビュジエの盟友でありCIAMの事務局長的存在であったギーディオンによってつけられた。複雑に錯綜した19世紀末から1930年代にかけての建築思潮を「ル・コルビュジエの主唱する機能主義」に強引にまとめ上げたのである。1941年に著された「空間・時間・建築」は、建築の歴史を語りながら、それが近代建築へ帰着する必然性を論じ、とくに機能主義の優位性を客観的な筆致で説き明かした。

戦後の建築教育を受けたわれわれにとって、それは近代建築史のバイブル的存在であった。歴史書というよりは機能主義の啓蒙書なのであるが、ほかに概括的な近代建築の歴史書がなかったこともあって、モダニズムの成立と歴史を知る手引き書でもあったのである。つまり昭和20年代から30年代にかけて、この書によって多くの建築関係者が機能主義の洗礼を受けたといってよい。

しかし、歴史的事実という観点からすると、本書で無視された流れや、過小評価された事柄が数多くあったことが、その後の歴史的追跡から次々と明らかになってきた。機能主義論争に破れたシャローンや、囲み型集合住宅をつくったベルラーヘやデ・クラークはその最たる例である。それ故、機能主義の規範が弱まってくるにつれ、それら事実の歴史的見直しが求められ、近代建築史の書き換えが要求されるようになってきたのである。1974年、私が新建築編集長を務めていたとき、村松貞次郎の提唱によって近江栄、山口廣、長谷川堯等と編纂した「日本近代建築史再考—虚構の崩壊」は、その日本版だったということができる。ただギーディオンの「空間・時間・建築」が間違っていたわけではない。当時、モダニズムの進行は時代の趨勢であり、装飾や様式建築の桎梏から建築を開放することに、現在考える以上に本書は大きな役割を果たしたのである。

もうひとつのポイントは、建築の20世紀は1900年にはじまったのではない、ということである。19世紀の世紀末は、明らかに20世紀にずれこんでいたのである。

具体的例としてみれば、ちょうど1900年に完成しているのは、ギマールの「パリ地下鉄入り口」である。これは典型的世紀末のデザイン、アールヌーボーの作品である。これすらも当時のパリでは前衛的過ぎるとみられ、ひと駅にしか採用されなかった。そして1901年の作品は、レヒネルのハンガリアン・アールヌーボー「ブダペスト郵便貯金局」であり、オルブリッヒの「エルンスト・ルードヴィヒ・ハウス」で、これはセセッションである。また1903年にペレの「フランクリン街のアパート」、ベルラーヘの「アムステルダム株式取引所」、マッキントッシュの「ヒル・ハウス」が完成しているが、これらはいずれも、20世紀の建築を予感させるものとは言い難い。

歴史的流れからすると、様式と装飾から建築を解き放ち、工業化の進展する社会に相応しい合理的な建築を構築することで新しい世紀を拓くことになるのである。過去の建築様式から訣別することを宣言したセセッションをはじめ、当時の幾多の建築運動は新しい時代の建築のあり方を模索していたのである。しかし過去の様式から訣別すべきことはわかっていても、建築から装飾を払拭する踏ん切りはなかなかつかなかったのが現実であった。

当時のオルブリッヒ、ワグナー、それより少し後のタウト等の建築でも、それは明らかである。装飾は建築の一部として切り離すことができなかったのである。

「装飾は罪悪である」と喝破したのは1908年、アドルフ・ロースであるが、その言に真剣に耳を傾ける建築家

は少なかった。一般社会からは、むしろ新進建築家の奇矯な発言としてしか受け止められていなかった。折衷様式や新古典様式の建築が、当時の社会ではまだ主流だったのである。それを機能主義の先駆的発言として評価したのは、あとの時代である。

実はこの装飾に対する姿勢が、建築において19世紀と20世紀を分け、さらに20世紀と21世紀を分けるものとなるのである。

さまざまな思惑が錯綜しながらも、時代を拓いた建築家たちは、連綿として続いている建築の装飾に対する思いを切り捨て、それによって工業による大量生産・大量消費の時代への適合を計り、合理的・機能的な建築を目指したのである。もちろん、そこでつくり出された工業製品による無装飾空間、ユニバーサルスペースの魅力もあったことは確かである。それが建築の20世紀であるといえる。

しかし一方、人間の本質において、装飾への欲求は捨て切れぬものがあった。モダニズムで抑圧されていた装飾への願望が顕在化してきて、20世紀末になってモダニズムへの反乱がはじまったのである。

## 建築における20世紀のはじまり

それでは建築における20世紀は、何をもって嚆矢とすべきか。いろいろ意見があろうが、あえて選ぶとすれば、1910年のベーレンスの「AEG タービン工場」であり、それに続くのが1911年のグロピウス＋マイヤーの「ファグス靴工場」ではなかろうか。いみじくもふたつとも工場であるというのは象徴的である。産業革命以前の様式建築の時代には、「工場」という建築概念は存在していなかった。それまでにない建築のプロトタイプであり、しかも機械が主役であるという建築において、やっと装飾を排除した建築が誕生したのは、故なしとは言えないであろう。ここにはじめて、20世紀を拓く建築が姿を現したといえる。

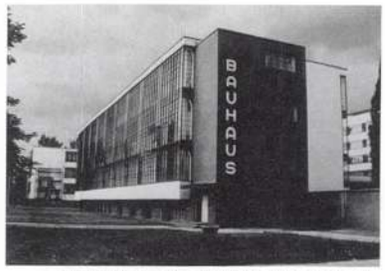
しかしそれが工場以外で実現するのは、1924年のグロピウスによる「バウハウス・デッサウ校舎」をまたなければならない。グロピウスはここでバウハウスのデザイン指導理念と相まって、20世紀の建築のプロトタイプを確立したといってよいであろう。

バウハウス・デッサウ校舎の魅力は、機械によってつくり出される工業化製品の明快な美を率直に表現していることにある。近代技術によって可能になった構造から独立したガラスの横連続窓＝カーテンウォールは、後に国際様式へと受け継がれる。そしてそれは、工場や学校に限らずどんな種類の建築にも適応できる汎用性をもつこととなった。鉄・ガラス・コンクリートをはじめとする大量生産が可能な工業化製品を、爆発的に膨張を続ける近代社会に供給する理由づけができたといってもよい。

建築における20世紀は、ここにはじまったということができよう。つまり19世紀は、1910年、本格的には1924年、ここまでずれこんでいたのである。

日本はどうだったであろうか。欧米から学ぶことを基本とした日本では、タイムラグは仕方がない。しかも導入に際して旧タイプの建築、つまり折衷様式や新古典様式を学習の手本として選んだため、欧米ではすでに新しい建築が模索されはじめたにもかかわらず、アールヌーボーやセセッションですら長い間異端視されてきた。わずかに遠藤於菟の「横浜銀行集会所」(1905年)で一部デザインとしてセセッションが採り入れられ、武田五一の「福島邸」(1905年)はアールヌーボーでデザインされたが、それらは新しい時代を目指した建築思潮と関わりなく、様式建築を選ぶのと同じレベルで摂取されたものである。だからこそ、思想的な迷いがなく、デザインとしてはかなり高い完成度を見せることができたといえる。しかし時代に立ち向かう壮絶さはそこには感じられない。コンドル、辰野金吾を頂点とする様式建築の展開が、まだまだ主流なのであった。

むしろ1915年につくられた後藤慶二の「豊多摩監獄」が新しい建築の息吹を感じさせる最初の建築といってよい。「工場」と同じく「監獄」もそれまでにはない種類の建築であった。無駄を省き、監視のしやすさといった機能性を追求した結果である。もちろんヨーロッパの新しい表現主義などのデザインが刺激となっていたことは確かである。やや後になるが、蒲原重雄設計の「小菅監獄」(1930年)も優れた表現主義の建築である。しかしこれはやはり特殊解であって、バウハウス・デッサウのような汎用性をもち得なかったのは当然のことといえる。岩元禄の「西陣電話局」(1921年)、セセッションを標榜した山田守の「東京中央電信局」(1925年)も同じである。それより当時、若手の官庁建築家が、新しい建築デザインを担っていたことを指摘しておきたい。



バウハウス・デッサウ校舎（グロピウス）

日本で最初に近代デザインとしての建築が出現したのは、最近取り壊された三菱地所・桜井小太郎の「丸の内ビルディング」（1926年）である。これはアメリカ・フラー社の施工によるもので、それまで新しい建築思潮はヨーロッパから流入していたのが、アメリカ流の実務用建築としてつくられたのは、その後の日本の建築のあり方を暗示しているようである。そして次が村野藤吾の「森五ビル」（1931年）であり、吉田鉄郎の「東京中央郵便局」（1931年）である。また安井武雄の「大阪ガスビル」は1933年である。経済活動の場であるオフィスビルが、合理性・機能性を追求する近代建築の目指すところと合致し、汎用性を獲得したのである。日本では、オフィスビルを中心にモダニズムは展開していったのである。

## 転換するデザイン潮流

はじめに述べたギーディオンの「空間・時間・建築」が著された1941年ごろから、モダニズムは不動の地位を確保した。しかし同じモダニズムでも、コルビュジエを中心とする造形的な機能主義と、グロピウスやミースのカーテンウォールによる国際様式とでは、理念においても形態においても明らかな違いをみせていた。そしていわゆる機能主義建築は主に文化施設を中心とする公共建築に、国際様式建築は高層化するオフィスビルを中心とする民間建築にと棲み分けることになる。この棲み分けについては、将来、論考する必要があろう。

ただモダニズムの時代になったからといって全てが装飾を排したわけではない。いまだに建設が続くガウディの「サグラダファミリア教会」は別格にしても、ライトは独自の近代建築を展開し、現在でも支持者が多い。その抽象的装飾要素は、ライトの建築と切り離すことはできない。因みに先年、アーキテクチュラル・レコード誌がもっとも優れた20世紀の建築は何か、という読者アンケートを取ったところ、1位は「落水荘」であった。また抽象的装飾のアール・デコは、1930年代のスカイスクレーパーに多く採用されているだけでなく、現在もポストモダニズムのデザイン・モティーフとなっている。

アアルトの建築も機能主義に近接しているが、本質は地域主義に根ざしており、国際様式とは異質である。日本でも村野藤吾は「日生日比谷ビル」（1963年）で窓にツイン・ピラーを採用し、柱頭に抽象的な装飾を付して議論の的となったが、それ以前にも装飾的要素を時折もちいていた。カーンの建築も、マスターズ・スペース、サーバント・スペースという理論の導入はモダニズムへの訣別を表明したものであり、「キンベル美術館」（1972年）のデザインは明らかにモダニズムの範疇を超えている。また安藤忠雄の建築も装飾とは無縁だが、モダニズムと全く別のところに創作の理念を置いているのである。

こうみてくると、奇妙に同居する機能主義・国際様式連合軍のモダニズムは、その方向性や質において、かならずしも20世紀を代表するものではなかった、という見方も成立する。しかしオフィスビルを中心とした合理性・経済性を重んじるモダニズムの圧倒的な量は、都市を覆い、一般社会に定着していることも、また事実である。経済を律とする現在の社会において、モダニズムはもっとも説明しやすい建築デザインであったといえるのであろう。またそれだけに堕落しやすい性質を内包していて、建築本来の役割を見失い、経済の一側面であるコマーシャリズムと野合してしまう危険性が高かったのでもある。

そうした意味からモダニズムの功罪を端的にいえば、功は経済社会の発展に寄与したことであり、罪は経済社会に取り込まれ、ついには建築の自律的意味を見失ったことにある。そしてポストモダニズムは、建築の自律性を回復しようという意図をもって登場してきたのである。

## ポストモダニズムの意味

「ポストモダニズムの建築言語」（1977年）を著したジェンクスは、この本を書く以前から講演で同様の内容を話していたのだが注目されず、本にしてはじめて、理解が得られるようになった、と私に語ってくれたことがあった。モダニズムは建築に意味をもたせることを否定したが、両義性をもつ建築が登場しはじめた、これらこそ



日生日比谷ビル（村野藤吾）

次の時代を拓く建築である、というのが本書の趣旨である。これはもともと、啓蒙書というよりは時代の変化を解説した書である。しかしそのなかから「ポストモダニズム」という言葉だけが独り歩きをはじめてしまったのである。

もっともそれだけの理由があった。形骸化してしまったモダニズムに疑問を感じるようになり、その単調なデザインに飽きながら、それを捨て去るだけの勇気を建築界はもてないでいたのである。またすでに、ジェンクスがこの書を書くだけの材料がさまざまな形で出はじめていた。これは先に挙げたようなモダニズムが全盛であった時代に底流となっていた建築思潮からではなく、モダニズムをくぐり抜けてきたなかから生まれたといってよい。ヴェンチューリやメタボリズム、磯崎新などにその先駆的な言説や作品を見てとることができる。そしてポストモダニズムの旗が掲げられると、グレイブス、スターンなどがそれに沿った建築をデザインし、かつて国際様式 MOMA のキュレーターとしてまとめあげたジョンソンまでが、その旗を担ぐことになったのである。

ポストモダニズムという言葉が独り歩きはじめると同時に、単に装飾や様式が解禁されたと思い込み、それがまた独り歩きをはじめ、日本ではとくにバブル経済期と遭遇したのである。建築と装飾や様式の関係に対しての素養もないまま、形態だけが表面的に華やかに踊っていたのがその時期である。それらが飽きられ、見捨てられるのは時間の問題であった。

しかしポストモダニズムの真意は、建築の自律性と人間性の回復である。そのためにはモダニズムで封印されてしまった装飾や様式の詰まったパンドラの箱を開けてもよいのではないか、ということであって、下手に装飾を弄ぶことではなかった。

## 建築の21世紀

ポストモダニズムはもう終わった、と最近みられているが、そうではない。それどころかモダニズムもまだ終わっていない。そして19世紀が20世紀にずれこんだように、20世紀も多分、21世紀にずれこむであろう。

私が最近、興味深く見守っているのは、コンペの審査員としての槇文彦と磯崎新の対比である。槇はあくまでもモダニズムの延長上での建築を支持し、「東京国際フォーラム」や「国立国会図書館関西分館」を選んでいる。一方、磯崎は建築の新しい風を期待し「坂本竜馬記念館」、「横浜港国際客船ターミナル」、「仙台メディアテーク」で意図的にそうした案を選んでいる。それぞれみごとに対比的である。槇が古く磯崎が新しいというのではない。いずれもそれぞれの行き方で、次の時代に生き残っていく理論とデザインを志向しているのである。この勝負の決着は、そう簡単につきそうにない。欧米においても同じである。コールハース、リベスキンド、ゲーリー等が新しい理論とデザインを模索する一方で、シザ、ヘルツォーク、ズントー等の建築空間の本質を問い直そうという考え方や、スペインの若手建築家を中心とするネオ・ミニマリズムが世界的に脚光を浴びている。

これらデザイン思潮の先端で競っている建築家たちの作品には、輝きがあり魂（ソウル）がある。如何に上手くつくられていても、文字通り形骸化してしまった多くのモダニズムやポストモダニズムの建築とは大きく異なる。建築の新しい潮流は、そうした建築への真摯な取り組みのなかからしか生まれてこないであろう。そして20世紀モダニズムへの反省が大きなポイントとなることは確かである。

こうした状況が折り重なりながら時間的な21世紀へとなだれこみ、多分、2015年ごろに次の時代を表象する建築思潮とデザインが成立するであろう。といっても、それがそれと認識され確定されるのは、もうひとつあとの時代となる。

どのような道を選び、どのようなデザインを展開するか、それは21世紀に生きるそれぞれの建築家の判断にゆだねられている。まずは時代に追随するのではなく、自らの信じ得る道を見出す努力が肝要であろう。判断が正しく弛みない努力がなされれば、次の展望が開けたとき、意外に頂上の近くにいる自分を発見することができるのではないだろうか。

（ばば　しょうぞう）

アンケート

# 建築への証言'98

20世紀はモダニズムの時代といわれていますが、様々なデザイン思潮が現われ、実際の建築作品やプロジェクトとして発表されました。近年ではさらに地球環境やエコロジー、高度情報化などへの建築デザインの対応が求められています。世紀末の今日、やや混沌とした社会状況の中で、建築デザインの方向性がみえにくい、或いは従来のようなデザイン行為そのものに意味があるのか、といった声が聞かれます。特に関西では、阪神・淡路大震災により、建築や都市が一瞬にして崩壊するという未曾有の体験をしました。

本特集では、様々な意味で成熟化に向かうといわれつつ、その姿が明確に見えない21世紀の社会に迎えるにあたって、この100年の建築を再考し、その中で得られた教訓をもとに21世紀の建築とデザインのあり方を考える一助になれば幸いです。

上記のような主旨のもと、関西の代表的な建築家の方々62名に下記のようなアンケートをお願いし、特集扉頁に記載しました43名の方から御回答をいただきました。以下に、この玉稿を五十音順に掲載いたします。

設問 1 あなたがこれまで影響を受けたと思われる20世紀の建築作品、建築家、建築思潮などをお教えください。あわせて、その理由をお聞かせください。

設問 2 あなたにとって、20世紀の建築とは何だったのか、あなたのお考えをお教えください。

設問 3 あなたが設計活動において、現在もっとも関心をもたれている事柄は何かお教えください。

設問 4 21世紀に向けて、建築の今後の流れ、めざすべき方向性についてお教えください。

※できれば各項目ごとにキーワードをおつけください。

## 建築の社会的認知を

浅井　謙

浅井謙建築研究所

### 1. 建築作品、建築家

○フランク・ロイド・ライトの一連の作品

創造的で人間愛にあふれた空間と表現力。

○アルバァ・アアルトの作品

計算された空間処理と気品あふれる表現力。

○薬袋公明

知能的空間処理と構成力。

○ KPF

古典的デザインソースを使いながら近代的表現力を持ち、永続性のある建築を創造する力。

### 2. 百花繚乱の時代

有史以来、建築に対する思考方法や表現は自由に発揮され、創造的建築作品の百花繚乱の時代であった。それは、人間の社会的経済的成果と相関関係にあり、次ぎに来たる情報化社会とその歪みが、良くも悪しくも大きな変化を、人間社会に与えずには置かないであろう。

### 3. バブル崩壊後の建築界は

1920～30年のバブル期に、ニューヨークの摩天楼を始め、多くの名建築が完成し今日の1980～90年のバブル期に、日本においても後世に残るであろう建築も幾つか完成した。

そのバブル崩壊と、少子化高齢化による建築業自体の急激な収縮は、設計そのものの社会的存在意義が問われていると考える。

特に今、経済的に建築の存在意義がまず問われ、厳しい経済的制約の中で、如何にして建築の成立を社会的に認知させるか。その非常に限られた予算の中で表現すべき方向はいかにすべきか。

その結果として、少額化した設計料でいかに設計活動を続けるか。

### 4. デジタル社会

今の厳しい社会環境は、根本的に文化の在り方すらも大きな変化と影響を与えずにはおかないであろう。

アナログ社会からデジタル社会に変化する中で、人間の文化としての社会変化も、設計のコンセプトも大きく変化し、また、建築の質的変化と価値大系の見直しが必要となろう。社会的経済的流れの分析と創造的構築が、建築の質的変化を起こすであろう。故、その見極めに全力を注ぎたい。　（あさい　けん）


タリアセンウエスト(F.L.ライト)

# 八百万(やおよろず)の神を訪ねる旅

池上俊郎
京都市立芸術大学助教授

## 1 八百万の神

建築家の仕事を訪れる旅は、八百万の神を訪れるようなものだ。

ル・コルビュジエのチャンディガールに都市と建築の関係の限界を感じ、フランク・ロイド・ライトのタリアセンウエストに大地から紡ぎ出された有機的空間とテクスチャーの絶対性を見たように思う。また、イタリアンラショナリストは、構造主義的な未来を暗示し続けているように思う。

現在までに私は27カ国80都市を訪れた。都市は自立し、アメーバーのように自己増殖を繰返している。これらの都市は、有名・無名の人々による建築の構成を試みる意志の総和として構成されている。

ある選ばれた建築家だけが、宗教家のように未来を暗示し続けると考える事には根底的に無理があるように思う。

## 2 ガラスの貴族

20世紀の建築は、産業革命の後にもたらされた平等な市民・消費者の創造と平行して産み出された、平等な場・消費される空間の広範な創造にあった。それは空間革命、生活革命として始まり、あくことなき実験記録としての歴史である。

到達したのが"ガラスの貴族"としての建築であるように、今は見える。

一方、建築的思考方法は、多様な世界に拡大された。ヨーロッパのプロダクトデザイナーは、多くが建築の出身者である。場とデザイン対象の密接な関係性を、建築的思考方法を利用することにより、より強調されて生活場の創造が探られたように思う。

"場"に対する思考機会の拡大は、20世紀の建築の多様性を表明した。そして、さらに拡大を続けている。

## 3 都市像・地域像

「パリは、セーヌ河左岸に建築学的記念碑的都市像を求めた」という言葉がある。

世界中の都市、或いは地域が統一的で均質に構成された"像"を失って久しい。個の建築の挿入によって、自然環境をも射程におきながら、"都市像・地域像"を復活させる試みが必要である。

また、建築の設計と等価な設計手法を、ランドスケープデザインやインテリアデザイン、プロダクトデザインなどの他の環境デザイン領域に適応させる必要がある。力強い磁場を形態と空間の関係性として多様に創り出す必要がある。

こうした指向性は、環境デザイン領域全体において新たなライフスタイルを探っていくことにつながろう。

「人民は、食卓に建築学的・記念碑的生活像を求めた。」とでも言えよう。

## 4 空間価値と新たなライフスタイル

1. 地球環境問題に対する配慮が多様に必要となる。
2. 日本の激しく変化する"建築思潮"とその消費の状況から脱して欲しい。社会ストックとしての都市文脈再創造に向け、空間のインフラストラクチャー構築を探る役割を"建築"は果たすべきである。
3. ライフスタイルの変化を再度問い、私達が"遺産相続していくべき空間価値と新たなライフスタイル"を探る必要がある。

(いけがみ としろう)

# 自然環境を重視した建築を

石井 修
美建. 設計事務所

## 1 建築作品

○帝国ホテル (F.L. ライト)

ライトの作品にはとくに関心があり、若い頃から何回か見ていたが、ちょうど壊される1年前(1967年)、義妹の結婚式があり、式の前日に1泊し、ゆっくり見学できたことは幸運であった。過剰な装飾といわれるテラコッタや大谷石などの構成は味わい深いものがあった。

○山邑邸 (F.L. ライト)

○そごう百貨店 (村野藤吾)

工業学校に入学し建築を学び始めた頃、竣工したてを見学し、まだ建築のことは少しもわかっていなかったが、現代建築のすばらしいデザインに圧倒されたことを思い出す。

○箱根プリンスホテルと三養荘 (村野藤吾)

円形の建物で客室は小じんまりしているが、運良く富士山の見える部屋に泊まり、そのバルコニーでの朝食は湖と森に囲まれた自然の中での時間を過ごせた。とくに、ロビーは私の好きな空間である。帰路、伊豆長岡町にある三養荘を特別に見学させていただき、村野藤吾の和風建築の優雅さに魅せられた。その他に好きで訪れたことのある村野作品は、箱根樹木園、八ヶ岳美術館、新高



八ヶ岳高原音楽堂（吉村順三）

輪プリンスホテルの恵庵、西宮トラピスチヌ修道院がある。

○分譲地に建つ小住宅（吉村順三）

吉村先生より工事監理を任されて、住宅建築とはどういうものかということを教えられ、私の住宅設計の原点ともいえるものであり、吉村先生は、最も尊敬する建築家である。これについては「住宅建築」'97年7月号に詳しい。

○池田山の家（吉村順三）

コンクリート打ち放しの壁面がこんなに美しく味わい深いものと初めて知った。居間の前の池はそれに面する食堂の出窓の両サイドにある通風窓とはめ殺しの大型ガラスが印象に残っている。

○浜田山の家（吉村順三）

敷地から浮き上がったコンクリートのキャンティレバースラブの上に建つ木造の小住宅で好きな作品である。

○大阪アメリカーナビル（吉村順三）

○奈良国立博物館（吉村順三）

池のサイドを進むアプローチと2階展示場に上るスロープは好きな空間である。

○ホテルジャパン下田（吉村順三）

自然の山や地形、海がうまく利用されたホテル。先生と食事を共にし、気持ちよく1泊させていただいた。

○八ヶ岳高原音楽堂（吉村順三）

屋根の形が八ヶ岳の山並みを想わせる高原の音楽堂である。大きな開口部と外部の自然風景とがつながる珠玉のように美しい建築である。

その他、雑誌等で見て、すばらしいと思った建物はいくつかあるが、ここでは実際に見た建物に限って書くこととした。

### 2　21世紀に残る建築

20世紀の建築とは何だったのかといわれると答えようがありませんが、21世紀まで大事にされて残ってゆく建築はひとにぎりのように思います。

### 3　自然環境

○自然環境（地形、緑、水、大気）の破壊を最小限にとどめること。

○自然エネルギーの活用。

○自然に大きな負担をかける現状のライフスタイルの見直し。

○一極集中型の都市から分散型の都市への移行。

○都市緑化。

### 4　エネルギー負荷の少ない建築

○大規模、超高層の建築はつくらない方が良いと考える。

○エネルギーを大量に要する建築はできるだけ避け、負荷の少ない建築をめざすべき。

○そのためにも、外観のデザインを重要視しすぎないこと。

○環境のよい地下空間の創造。

（いしい　おさむ）

# 進歩と傲慢と模索の時代

上杉秀隆

アーキトラスト・上杉建築研究所

### 1. 三笑主義

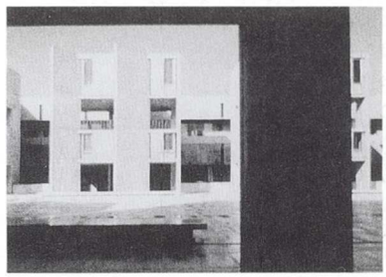
情報、知識としてはたくさんの作品、建築家、事物より基本的に影響を受けていると思われる。ただ、単なる知識ではなく、認識という意味では、過去に所属していた設計事務所の建築家や施主から得た経験による影響が、個人的には良くも悪くも大きいと考える。その中で心に響いた事柄は、「三笑主義」。妙に古くさく響く言葉であるが、良い建築づくりには、良い施主、良い設計者、良い施工者が揃ってこそ良い仕事＝建築が完成し、そしてその命も長らえられ、環境にも貢献することとなる。立派な建築はたくさんあるが、本当に愛されるものは少ないのでは。「良い施主を選ばなきゃ、いかんのだ！」師匠の言葉が印象に残ります。その施主に答える建築家になることが使命と教え込まれたような気がします。

### 2. 人類の進歩と傲慢と模索の時代

20世紀をすべて生き抜いてきたわけではないので、結果知識として語るなら、19世紀までの時代に比べて、20世紀の建築界の変動は技術的にも、思想的にも、意匠的にも大きく、そして多様化した。建築だけに限った事ではないが、20世紀は地球史上、百花繚乱〈人類の進歩と傲慢と模索の時代〉だった。本当の意味のよい建築は何だったのか、それはやはり、時代がたってわかる事だと思います。この20世紀に人類の行ってきた事柄を反面教師として、自分自身は市井の片隅で精進せざるを得ないと考えています。

### 3. MIND

MIND（心のあり方）が一番大事だと考えています。どうすれば、良い建築ができるか、設計活動は非常に社会的で、ともすれば未来に禍根を残すこととともなり、責任の重い事です。世の中には利己的な心ない事柄が増えています。世の中を抜本的に改革し良くすることはなかなか困難であると思いますが、街角のちっちゃな看板一つでも良くすれば、そして人の心を打つようなものを一つでも創り出すことによって人類に貢献できるのではないかと考えます。どうすれば、良い建築ができるか、愛される建築が、環境ができるの


ソーク研究所(カーン)

か、そういうことに努力することに関心が深いようです。

4. 人類と地球の財産

21世紀も20世紀と変わらない変動も多様化も続ける事となると思われますが、社会の経済的な活動だけを中心においた活動はもっと戒めるべき（無理ではあるが）で、建築を含めた資源を大切に、ものを大事にすることが重要だと考えます。そして、風土とか歴史とか固有の文化、伝統を大切に、流行に左右されない本当に愛される建築づくり、その「まち」らしさを創り出すことが、人類にとっても、地球にとっても財産になると考えています。

（うえすぎ　ひでたか）

# 普遍性から固有性へ

上田信也

大建設計大阪事務所理事・副所長

1　偉大な精神

サヴォア邸、マニセイユ・ユニテダビタシオン、ロンシャン礼拝堂などに代表されるル・コルビュジエの精神の自由さと、それを実体化する手法の独創性には当時強く惹き付けられた。とりわけ、彼の「建築をめざして」に見られる数々の宣言は建築に携わる者への決意を迫るものであった。また、ユニテリアン礼拝堂、ソーク研究所、キンベル美術館などに於いて一貫して「存在」を追求したルイス・カーンからは、建築の始源の偉大さを教えられた。そしてアフォリズム形式による彼の思惟の展開に、芸術家の深い洞察力の本質を見た。

2　課題を残したモダニズム

18世紀末の産業と政治の革命を経て確立された工業資本主義は、生産技術の開発に支えられた経済合理性の追求を骨子とした社会を作り上げていった。そしてこの進歩という概念のもとに、産業社会に生きる都市大衆の生活変革を目指し、生き方の「合理性」と「均質性」の世界的規模での様式化を試みたのが20世紀の大方の建築であったと要約できよう。そこでは個人、歴史、風土などの差異は基本的に捨象され、機械論的機能主義に基づいた建築は人間を疎外する結末を許してしまった。空間における人間の実存の回復を標傍したイデオロギーも時には見られたが、商業主義化されたアンチモダニズムの範疇と混同されがちであった。

3　生きられる空間を求めて

20世紀に失われてしまった人と社会の自己同一性の回復のために、建築は分かり易く構造化された安定したイメージを与える「場」の提供が求められよう。そのためには、フレキシビリティに富みながら、物理的に堅牢でライフサイクルの長い建物を提供する必要があろう。それはまた、街や集落のパタンやあるべき風景に沿った建物でなければならない。そして、空間心理や景観構造分野などの先賢の支援のもとに、それに相応しい視覚言語を創り出すことに努めなければならないと考える。さらに、我々の手許に蓄積されたエンジニアリングの知識を駆使して、「循環型社会システム」にそう建物の在り方も追及しなければならない。

4　普遍性から固有性へ

21世紀の建物は、今世紀の反省上に真に人間的なものでなければならない。空間に在って初めて人は人間的になるのであり、人を人間たらしめる建築的空間の創造こそが今後の課題となるであろう。効率や進歩といった概念を軸とする近代社会のパラダイムの変革が洋の東西で叫ばれている今、「固有性」とか「場所」といった他との違いに立脚した社会原理が徐々にこれらに取って替るとすれば、新しい建築の在り方も同様に変わらねばならない。そして、建築のいわゆる機能関連は人間学に基づきもっと厳密に検証される一方、その表現は風土や歴史などを強調した曖昧で非均質なものになるかも知れないし、建築は街並みや自然と一体化した風景を作り、人々はそこに自己を見いだすのではないだろうか。

（うえだ　しんや）

# 人と空間の内なる関係性

歌　一洋

歌一洋建築研究所

1　ルドルフ・シュタイナー

刺激を受けた建築は多少なりともありますが、特定するとなると思い当りません。強いてあげれば建築ではなく、科学、芸術、宗教、哲学等、新しい統一を目指した人（神）智学のルドルフ・シュタイナーの思想かもしれません。

2　二元論的建築

極論すれば、一元論的建築から二元論的建築、物質主義的建築だったのではと思います。

3　解き放つ空間

想像力なる空間、祈りの空間と人間を解き放つ空間に関心はありますが…。

4　人と空間の内なる関係性


国連ビル(コルビュジエ)

今後の建築の思潮にはあまり興味がありません。基本的には人間と空間の内なる関係性、幸福な生きられる空間へ少しでも向かえればと考えます。ただし自分自身が体現できる可能性があるとは思いませんが。

(うた　いちよう)

# Less is less

遠藤秀平

遠藤秀平建築研究所

## 1　Less is

Less is more
Less is poor
Less is beauty
Less is art
Less is correct
Less is less

## 2　資本主義の遺産

ヨーロッパ的還元とアメリカ的抽象とが織りなす資本主義機械が残した遺構としての学習装置。

## 3　コンピュータの価値と制度の行方

コンピュータにより生み出されるデジタル環境が設計行為に及ぼす影響。設計行為をシミュレーション行為であるとするとき、より精緻さを追求するバーチャルな状況の究極に見え隠れするもの。予測可能な多くの変数の許容の中に潜む予測不可能な特異点を出現させる接触。ピークを失った日本の人口曲線とメス化の加速が示す低密度による、21世紀前半の富の運用とコミュニケーション形式の変化がもたらす、コンピュータの価値と制度の行方。

## 4　建築の今後の流れ

建築を可能性への探求行為及びその結果の姿であると仮定すれば、具体的で物理的な解答を提出できる環境が減少し、建築に関わることが困難な状況となる。

### 目指すべき方向性

目指すべきとする規定的な状況の設定そのものが成立しない。しいて挙げるならば、より可能性を増す方向の示唆であろう。その可能性とは建物の出現により、より多くの人の占有意識にさまざまな変化を来す分有(部分共有)への実践行為であるとも言える。脱テリトリー化された非物質的領域が有する可能性の具体的な明示。

(えんどう　しゅうへい)

# 国際集客都市大阪をめざして

太田隆信

坂倉建築研究所代表取締役

## 1　ル・コルビュジエ

ル・コルビュジエの「国立西洋美術館」の基本設計図が、日本にとどいた頃、吉坂隆生先生の設計製図の授業があって、そして、現場の始まる頃、坂倉準三建築研究所に入れていただき、1958年秋には、短期間ながら現場でお手伝もさせてもらいました。そんなふうに建築の道を歩み始めましたから、何といっても、ル・コルビュジエです。

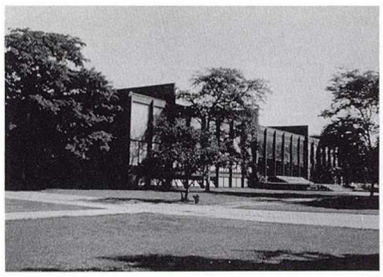
## 2　国連ビル

ずばり近代建築です。但し、そう答える前に、近代とは…、という問いかけにル・コルビュジエがいうところの良識ある市民の立場できちんと答えて、そのうえでの近代建築であることは言うまでもありません。

とまあ、大上段に構えてしまいましたが、ちょっと肩の力をぬいて、例えば、ニューヨークの「国連ビル」、作品としての評価はともかく、20世紀後半の爆発的な近代建築の世界的な流行を考えるとき、あの建物が、あの型であったことの意味は、はかりしれないものがある。その意味から、第2次世界大戦の1943年に竣工したルシオ・コスタ、オスカー・ニーマイヤー等による、リオの「文部省保健体育省」は、「国連ビル」のプレリュードであり、よりすばらしい作品。大戦のさなかによくこれだけのものをという思いも込めて、もっときちんと評価しなければいけない。リオの事例がなくって、ル・コルビュジエのスケッチと、W. ハリソン等の「ロックフェラーセンター」から、「国連ビル」へ、一躍に到達はちょっと、無理だったのではないか、そんなことを考えながら、この文をまとめている時にルシオ・コスタの訃報を聞きました。合掌。

## 3　国際集客都市大阪

終のすみかである大阪、もう少し範囲を応げて、関西のこと。ここは素直に短期的な目標としては「大阪オリンピック」、長期的な目標としては「国際集客都市大阪」をめざして、私達の街を、少しでも美しく、よりよくする努力を私なりに続ける覚悟です。ひとりひとりのそういったあたりまえの努力、その集積の大きさと意味を、今こそ再確認すべきときです。そのうえでそこから少しずつ半径をひろげ、せめて東南アジアまでは視野に入れて、これからのことを考えていきたい。



IIT クラウンホール(ミース)

4　人間らしい建築

歴史、わけても近代史現代史を大切に、着目大局、着手小局の精神で持続性ある知的な建築を創る……。ということは、つまり、人間らしい建築をめざすということでしょうか。　(おおた　たかのぶ)

# 地球環境破壊の世紀

岡田聿之

東畑建築事務所大阪事務所所長

1　ミース・ファン・デル・ローエ

IIT キャンパスでは、鉄、レンガ、ガラスによる絶妙なる外壁構成の建物群。その配置加減によって、その場に生ずる独特の屋外空間を体験した。

チューゲントハット邸と復元されたバルセロナ・パビリオンからは微妙な内壁の配置による連続体としての屋内空間、それが視点の移動に連れて刻々表情が変わる凄みを実感。これらによって「壁とは何か」が、わかった様な気になるから、これまた不思議な体験。IIT キャンパスには強靱さと優美さを兼ね備えたミースの作品の横に SOM 設計の校舎もある。一見、類似品だがプロポーション、ディテールともおおざっぱで、元祖と亜流の差が明らか。人まねはすべきでないことをこれまた実感する。

2　地球環境破壊の世紀

テクノロジーの加速度的進歩による楽天的前向姿勢、いわゆる文明の発展めざましく、可能性の追求、自己主張、競合による百花斉放。各人はその花の一輪、少なくとも花弁の一枚たらんと競いあった。

だが、ペシミスティックにみれば、建築は文化とならず。文明は、アルミ合金、コンクリート等の人工無機物と、自然界にかつては存在しなかった高分子化合物を産み出す。文明の名のもとに行われた地球環境破壊の世紀にあって、建築はその共犯者どころか主犯格。

3　サスティナブルデザイン

恒久的なものとは何か、せめて、長持ちするものとは何かを考える。

それは、物理的寿命は勿論のこと、機能、性能、デザイン等、いわば人間の理性と感性の両面を全て満足させるものということであろう。「恒久、～せめて少しは」の裁定はその満足度によるわけだが、その価値判断の切り口がなかなか見つからない。

4　21世紀は正念場

3のサスティナブルデザインと2に関連する最近流行の「人にやさしい」「自然にやさしい」というキーワードがある。

耳にもやさしいと冷やかしたくもなる甘ったるい言いまわしであるが、ことの二つは建築に求められることの全てを包含した言葉である。21世紀に向かっては正にこれが焦点であり、正念場であると思う。今回のアンケートは狭義の建築デザインについて云々ではないはずだが、そうしたキーワードをどこまでシリアスに考え、取り上げた回答がよせられるか期待している。　(おかだ　のぶゆき)

# 建築的なるものの喪失

加藤邦男

京都大学工学研究科教授

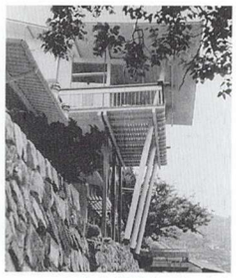
1　オーギュスト・ペレー／ル・コルビュジエ

1960年代の前半をパリで建築修業に過ごした私は、20世紀を代表する錚々たる建築の周辺に、非常にレベルの高い都市や建築あるいは田園、農村の建築の厚い社会的な層があることに感銘を受けました。また、時代を代表する建築の歴史的背景として、連綿と継承されながら更新される建築思潮にも強く惹かれました。なかんずく、イタリアに旅行した時に、ベルニニやボッロミニ、ピニトロ・ダ・コルトナらに代表される、ローマを中心として活躍した17世紀のエネルギッシュな建築家たちの作品から、強い衝撃を受けたのでした。

彼らの作品から、それと対峙する私は、作家としての彼らの建築的世界の「開け」に立ち会い、そのことに深く感動し、それが後の私の設計と研究の大きな始動力となりました。20世紀の建築家の中では、これらの古典的・バロック的伝統を近代に独自の方法で開花させた2人の建築家、オーギュスト・ペレーとル・コルビュジエをまず挙げたいと思います。

前者は古典精神を近代建築の形を通して再生した、その強い精神的な透徹性によって、後者は古典精神を基盤としつつ柔軟かつ「開かれた」(つまり生きることとして開く)詩的な昇華性によって私の心の中に深い建築的な筋目を刻み込みました。

最近、学生たちと共同でル・コルビュジエの最晩年の作品、フィルミニー・ル・ヴェールの教会堂(現在、工事が未完成のままに放置されている)の資料を集めて模型を作成し、その解釈を行ったところ、鉄筋コンクリートの堅いシェル状の塔の造形を通して、時とともに移ろい一瞬とも捉えきれないような光の空間的超越性が主題になっていることが確認されました。


日土小学校(松村正恒)

もし、この建築が完成されて実際に見ることが出来れば、この建築を透過して行く風のような感触が実感されることでしょう。ここに20世紀の近代建築を超克する仕方の一つが暗示されているように思います。

### 2 建築的なるもの

西洋の古典的な伝統における「建築的なるもの」への確信が、次々と新しく生み出される世界中の建築的事象を知識として知ることによって揺らぎはじめ、知識と情報が氾濫する20世紀は、「建築的なるもの」の意義や、そのイメージを喪失する大きな過程であったと思われます。最近の巨大化する情報化、メディア化によって、時空的に多様な世界が日常的に身近に伝達される時代においては、避けることの出来ない現象です。そのことがまた循環的に「建築なるもの」への信頼を消し去り、建築を解体してしまったと考えざるを得ません。

### 3 大きな開け

西洋的伝統における「建築をめざして」制作することと、作庭や諸芸能などに顕著であった日本的伝統における、自然(自ずから然(しか)なる、つまり「もの」の本性の自発的な現成)ということに没入して、そのそこですべてを包括するような「大きな開け」のうちに、自らも開くということとの、この二つの伝統の間を往還しながら、建築作品が「ものそのもの」として立ち現われることに立ち会えるような設計活動をしたいと願っています。

### 4 移ろいやすい虚

20世紀において、建築物から非物質的現象としての空間へとパラダイム・シフトが行われました。さらにまた、空間表象や表現がメディア化されています。このような状況のなかで、生きられる具体的現実に踏みとどまり、そのそこから真に生きる人間としての中心と方向を、建築においても再発見する努力がいま切実に要請されていると思います。

移ろいやすい虚としての建築像や空間的印象と、それを捉えて構築する作品と建築家の自覚もしくは自己実現という、この矛盾する2極を全体化する思惟の実践を、設計の場においても、人生を生きる境涯においても、心掛けてゆくことが重要な課題と思います。建築設計において、物質的問題や、環境問題などの日常的な生活問題に直面して、その解決の困難さに悩まされるとき、こうした一見すれば即効的な効果のないように思える原理的な思惟が、大きな力となるように思われ、建築という活動は、そのための中心的な役割を担うものでなければならないと思います。 (かとう くにお)

# 前衛への視点

狩野忠正
神戸大学工学部教授

### 1 場所性と建築

サグラダファミリア —— アントニオ・ガウディ
イマトラの教会 —— アルヴァ・アアルト
森の火葬場 —— エーリック・グンナール・アスプルンド
その場でなければならない建築であり、それ以外ではない建築。

### 2 ラショナリズムの限界

ラショナリズムを基本として空間を追求してきたが、それだけでは解決できないことがわかった。

### 3 関心をもつ事柄

reduse(最小)、reuse(再利用)、recyele(再生)+reconsideration(再考)

### 4 前衛への視点

ドメスティック、アヴァンギャルド……、素材、工法、形態などによる前衛への視点。 (かのう ただまさ)

# 「不確かなもの達」の悲鳴

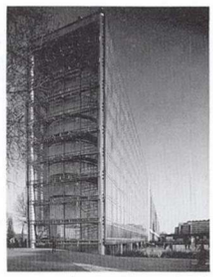
柏木浩一
竹中工務店設計部部長

### 1 松村正恒の日土小学校

「20世紀建築」が見失ったものに出会える。

### 2 片寄った二元的世界観の産物

二元的世界観は、ゾロアスター教の「光と闇」の対立に始まる。プラトンの「イデアと現象」で理論化され、デカルトの「精神と物体」の二元論哲学として完成。ガリレオ、ニュートンらが生み出した認識方法である、いわゆる「科学的アプローチ(定量的なものだけを研究対象とし、そうでないものは切り捨てる)」の敷延とあいまって西洋人の世界観を、より解りやすいものへの偏愛へと導いた。二元的世界観は実に明解である。反面、理論化できないもの、計測しづらいものは容赦なく切り捨てられる……。20世紀建築も、この片寄った二元的世界観の産物とみると解りやすいのではないか。機能主義建築、合理主義建築、インターナショナルスタイル……。20世紀建築を代表するどのキーワードにも、その裏に切り捨てられた「不確かなもの達」の悲鳴が聞こえるではないか。


アラブ研究所(ヌーベル)

### 3.4. 非二元的世界観でみた建築価値

現在、私がもっとも関心をもっている事柄であり、21世紀建築へ再び新たな一石を投じるであろうと思われるのは、非二元的世界観でみた建築価値である。例えば建築の「余白」の部分。二元的世界観で「余白」をみると、対立する「有と無」の単なる「無」。何の価値もない。だが非二元的世界観でみると、そこはあらゆる有を生み出す源。無があるから有が生きる。無が有以上の価値をもつ。

日本画でいうところの、「白紙」も模様の内なれば心にてふさぐべし。能では「せぬところ」が面白し。雅楽の「間」。いずれも、非二元的世界観でみて初めて「価値」が際立ってくる。 (かしわぎ こういち)

## 「モダン」の中に秘む虚無

貴志雅樹

貴志雅樹環境企画室

### 1. 虚無

影響を受けたと言うより、私にとって「モダン」を象徴するものとして、ウィトゲンシュタインの「マルガレーテ・ストンボロウ邸」を挙げます。彼は論理学を専攻しますが、エーゲルマンと共同して、この建築一作にだけ関わります。その結果、建築を論理的(?)につきつめればつめるほど、その先に虚無が見えたのではないかと思います。そして、言葉で表現できない何かがある事を見極めるために、論理学の方面に進んだと思います。

### 2. 補塡

私自身、今世紀から建築の設計を始め、まだその中にいますので、総括する事は困難です。ただ、1で書きましたように「モダン」の中に秘む虚無を補塡する作業として、多様な建築のムーヴメントが生まれましたし、私自身、このスタンスで設計してきたように思います。この代表例として、ガラスの表面にハイテクノロジーによって生み出されたアラベスク模様の装飾(機能的にサン・ルーバー)のついたジャン・ヌーベルの「アラブ研究所」は高く評価しています。モダニズム+地域性+装飾+エコロジーの融合として。

### 3. 地域性

自分の身の廻りの環境を見つめ、自分の感性に基づいて、何かを創り出せたらと考えています。私、一個人の人間としての尺度を基準にする事しか、現在考えられません。シザ、ズントー、ヘルツォーグの作品の中にある空間の構成素材の使い方、ランド・スケープとの関わり方等には興味を引かれます。

### 4. 身体性

何が正解かは解りませんが、高度情報化社会の到来とともに、人間の感覚(特に視覚)は拡大されてヴァーチャルな体験が人間の感性をますます刺激することでしょう。反面、リアルな経験をするという機会が減少し、精神的、身体的な疎外感は高まると思います。建築の概念は拡大していくと思いますが、建築が人間の為の器である限り身体性に裏打ちされた建築を考えていきたいと思います。(きし まさき)

## 20世紀的思考の終焉

岸 和郎

京都工芸繊維大学助教授

### 1. 20世紀の建築家

想像し得るすべての20世紀の建築作品、建築家、建築思潮の影響を受けている。あるいは受けていたいと考えています。何故なら、自分は20世紀の建築家であると考えているからです。

### 2. 現在

「現在」ということでしょうか。通常、歴史の本で見るとmodernの後にcontemporaryが来る訳ですが、この二つの違いは今のところ定義不能ではないか、と考えているのですが。

### 3. 境界条件

境界条件の設定の違いによって、まったく異なった解答を導き得るのが、建築設計というものなのだというのが、ようやくわかってきつつあります。従って自分にとっての現在の課題は、境界条件の正しい設定の仕方を知りたいということにつきるような気がします。

### 4. 終焉の作法

1で答えましたが、私は自分自身を20世紀の建築家と考えており、21世紀が、あるいはこれからの建築がどうなるかについてはほとんど考えていません。20世紀的思考の終焉の迎え方の作法についてむしろ考えねばならないと思っています。 (きし わろう)

## 希望なき輝かしさの時代

金 澤富

IAT Studio

### 1 建築+美術

影響といえるのかは別として、建築家として当然、建築にも、ま



ダンスシアター(コールハース)

た、現代美術にも多くの刺激を受けました。もちろんそれぞれ刺激の内容も作用点も違いますが、思いつくままいくつかあげれば、

ル・コルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローエ、ジェームス・スターリング、レム・コールハース、石山修武、バーナード・チュミ、クリスチャン・ド・ポルザンパルク、ロバート・ヴェンチューリ、磯崎　新、グレン・マーカット、コーリン・ロウ、カジミール・マレビッチ、マイケル・フリード、ドナルド・ジャッド、リチャード・セラ等々、様々な作品や論考。

### 2　希望なき輝かしさの時代

輝ける未来に対する希望に満ちた時代の建築と、その後の建築の修辞のソフィスティケーション。もしくは、二十一世紀に未だ希望をみいだせないでいる希望なき輝かしさの時代の建築。

### 3 4　建築の自律性の追求

具体的な事柄や建築の将来について語ることができないので、私個人のことを述べれば、建築の自律性を追求すること、そのことが逆説的に建築の自律の不可能性を露呈させるであろうし、建築家という職能の問題にまで発展するでしょう。

その状況での中で、いくつかの美的判断を保留することや建築の概念の拡張や原理的なこととの格闘から、ある種の可能性が見えてくるのではないかと思います。たとえそうでなくとも私達世代は希望のない輝かしさを楽しめる所作を持ち合わせていると思いますが。

(きむ　たくふ)

# 風土性への回帰

久保清一

アルキービ総合計画事務所

### 1　ものづくり

学生時代は磯崎新の「建築の解体」や篠原一男の「批評としての住宅」、また卒業したての頃は渡辺豊和と丹下健三の「ポストモダン論争」や「野武士達の活動」などが刺激となって、とにかく「自己の内部に宿る建築がどのようなものか」を発見するしかないという気持ちにさせられた。そして私の場合、師である高橋靖一の影響を強く受けていることもあって、必然的にモダニズムとポストモダニズムの両者を横断する問題について真剣に取り組む必要に迫られた。そんな状況下、私に勇気を与えたのが、堀口捨己でもある。特に分離派のことばとしてよく引用される「過去様式圏より分離する」は、その活字よりもはるかにものづくりの姿勢を教えられた。

### 2　装飾

私にとって20世紀を理解することは、「装飾」という命題を実践的に解明することであった。周知のように20世紀の建築は、「装飾を排した建築様式」として出現した。この歴史の切断行為によって失ったものを一つひとつていねいに整理し拾い集めない限り、「何もない箱」は、本当に単なる「退屈な箱」になってしまう。ヴェンチューリに影響されたわけではないが、建築の内なる世界だけに目を向けていても新しいものは何も生まれないという危機感が常にあったし、それは今も変わらない。

私にとって20世紀の建築とは、「装飾を排絶した建築」から「装飾しか残らない」をどう構築していくかの戦いであったような気がする。アロイス・リーグル、アウグスト・シュマルゾー、ヴィルヘルム・ヴォリンガーらの論述を、まずは建築の実践を通して再考しようと試みた。

### 3　ネオ・ヴァナキュラー

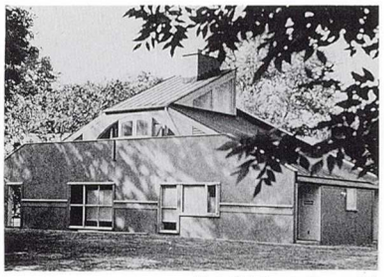
ネオ・ヴァナキュラー、ニューリージョナリズムといった建築の方向性について考えている。地形、地勢、自然素材、気候、そして流通、省エネ、リサイクル、さらに日本文化、伝統技術、等々に非常に興味をもっている。高度情報社会の中でそれらがどう建築に影響していくのか、変革が期待される。特にエネルギー依存からの脱却をめざす現代的な合理主義精神を基本とする自国文化、風土性への回帰というテーゼをデザインプロセスに取り入れ実践したい。

### 4　サスティナブルデザイン

この20世紀末における建築デザインの混乱状況が、このましばらくは続くと考えられる。それは建築という制度自体を否定しようとする動きであり、すでに何人かの建築家がこの反乱を企てている。しかし、今のところこの反逆の主旨が「近代主義の否定」にあるだけで、その後21世紀をリードする新理念として確立しているわけではない。

21世紀は環境の時代、あるいは生命の時代と言われる。地球環境問題をはじめ生命倫理がいかなる方向にシフトしていくかが注目される。サスティナブルディベロップメントの共通認識は深まり、モダニズムを越えてさらにグローバルに拡張するサスティナブルデザインの世界が展開されるだろう。しかし、それはかつての建築がめざした普遍的な形式でなく、高度なコンピューター技術に支えられたリージョナルな特性を多分に含む「環境の器」として、どう歴史的、美学的に定位するかが問われる。

(くぼ　せいいち)



母の家(ヴェンチューリ)

# ネットワークの構築

小林一成

鴻池組大阪本店設計部部長

### Ⅰ. 近代建築の原点

めまぐるしく変化する現代社会。建築にたずさわる毎日。私の建築観、意志決定の底に流れているのは、やはり建築を志し最初に学んだ近代建築の原点とも言える下記の3つの作品や思潮です。

○L・H・サリヴァン「形態は機能にしたがう」

近年建築の原点であり、今日でも解答を見いだすヒントとなっている。

○ル・コルビュジエ「ドミノ」「近代建築の5原則」

過去の歴史や様式に頼ることなく構築し建築を造ろうとする精神。

○ミース・ファン・デル・ローエ「ガラスのスカイスクレイパー案」

近代建築の姿、ユニバーサルスペースのイメージを見せたこと。

### Ⅱ. 技術革新によるデザインの変革

科学技術の驚異的発展により、豊かな生活をつくりあげた時代。建築の世界においても鉄・ガラス・コンクリートをはじめ各種建築材料、そして軀体・内外装の工業化等の建設技術の飛躍的な向上があった。構造的にはコンピュータ解析が進み、リミットデザイン、経済設計という概念が生まれ、設備的にも環境調節技術等の進歩により、人工的に環境をつくり出す考えが主流になった。

デザイン的には19世紀の様式建築から装飾と歴史を排除し、合理主義に基づく機能美を追求したモダニズムの時代。そしてユニバーサルで均質な空間に対し、人間性、地域性、歴史性、自然とのかかわりが問われつづけた。設計者としてこれらの課題に対応した新しいベースをつくり出すこと、また構造、設備から材料・工法まで幅広く技術的な知識が求められた時代といえる。

### Ⅲ. プロフェッショナルとしての日々の精進

建設業界だけでなく日本中不況感が充満している現在、挫折感だけでは好転しない。いつの時代にも建築は必要とされる。顧客や社会に対し、今まで建設業の中の設計部はデザインだけでなく企画、品質保証からコスト、メンテナンスまで一括して責任を持つことが期待され応えてきた。しかし規制緩和が進み外国企業を始め、異業種から特色をもったプロフェッショナルが参入し、生き残り競争が激しくなっている。自社内に多くの人材をかかえる余裕がゆるされない今、独立採算組織として組織形態、業務内容、装備の変革と、外部とのネットワークの構築がいそがれている。その中で設計者はプロフェッショナルとして本質を読みとる力や先見性が問われ、社会が必要とする優れたデザインをつくりだしていく日々の精進が一層求められている。

### Ⅳ. 環境を守る建築技術

20世紀文明社会は豊かな生活をつくりあげたが、大量生産による大量消費と大量の廃棄物を生む社会構造は環境や自然の生態系への配慮なしで成り立ってきた。少子化が進み、人口が減少する21世紀の日本において、山を削り海を埋め立て市街地を拡大するのではなく、空洞化した市街地のリニューアルや、建物のリフォームといった開発型から再開発型へ、量から質への流れが環境問題から考えても避けられない方向だと思う。新しい開発、大規模建築は海外が主流ということになるのでは。これからの日本で必要なのは環境を守るための建築技術、設計能力であり、細やかな配慮である。このプロセスで得られたノウハウは21世紀には全世界が必要とするであろう。

(こばやし　かずしげ)

# 空間に翻訳された時代の意志

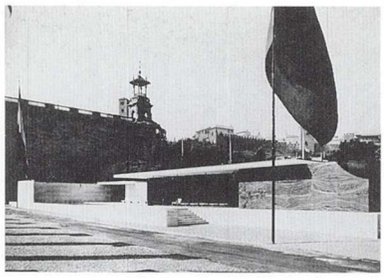
小林　恒

小林恒建築研究所

### Ⅰ　コルビュジエとミース

19世紀末、時代背景は科学技術万能の時代に入っていたにもかかわらず、建築やその他デザイン界は相変らずの歴史主義の中にあり、その表現は時代との間に大きな矛盾を含んでいた。まずグラスゴーやウィーン、ブリュッセルで芽を吹いたアール・ヌーヴォーはヨーロッパの各都市で急成長し、20世紀を迎える頃には東欧からロシア、そしてアメリカ、日本までも広まっていったが、1910年頃にはすでに衰退してしまった。その後、堰を切ったように噴出したデザインの潮流は表現主義、キュビズム、デ・ステイル、アール・デコ、構成主義そしてバウハウスという多種多様な形を生み、1930年前後のインターナショナル・スタイルの原理が確立するまでの僅か40年の間に同時に花開き、共通性の薄いものが同時に存在したのである。長い建築の歴史の中でしかも近代建築の形成は一瞬での出来事であり、また一つの時代が一つの形を生み出したような関係もなく特異にさえ感じる。そしてそれらとの影響関係が不明なところにアメリカのフランク・ロイド・ライトやスペインのアントニオ・ガウディ等も同時に存在したのである。

この様に短期間に噴出した様々な建築表現、その作品に接すると多くのものに感動するが、私にはその時代背景を含めて脈絡が読め



バルセロナ・パビリオン(ミース)

ないものも少なくない。一方、1930年以後の建築家の作品については情報としては感知するものの、インターナショナル・スタイルの創世紀に感ずる様な理屈なしに心おどる何かが欠如している。その様なこの設問について私はまず、ル・コルビュジエと作品「エスプリ・ヌーボー館」。そして、その後の彼の一連の住宅作品、次にミース・ファン・デル・ローエと作品「バルセロナ・パビリオン」と答えます。

その理由は、コルビュジエについては、彼の生みだす感動的で個人的な形態が好きであり、エスプリ・ヌーボー館には彼が駆使する建築的ボキャブラリーが鏤められているからである。フラットルーフでシンプルな平面計画、大きな開口に開放的なテラス、そして吹抜。ユニット家具やアート作品までも含まれている。

ミースのバルセロナ・パビリオンは私が最も感動し、興味を持った作品であり、今も新鮮である。形式主義の完全な排除、面の構成のみによる内外部の浸透性、非実在性、無限性、均質性。「デ・スティルの思想」が普遍的でかつ抽象的な空間の中に明確に表現されている。

この2つの作品は近代化の動きの中で20世紀のその後の建築の方向を決定的にしたと言っても過言でないと私は思っている。

### 2 時代の意志

19世紀末から1930年に至る約40年間が、建築表現あるいはデザインにおける近代化の異常な時代であったことは前述のとおりである。

アール・ヌーヴォーに発した新しい表現の試みは、そのモデルを自然界に求め、建築は歴史的様式から解放された。しかし、脱宗教化と歴史的な様式からくる連想性や固有性の崩壊は、一方でアール・ヌーヴォーを短命にしてしまった。

その後20世紀の時代精神は、機械をモデルにすることによって幕が開かれた。それは過去の歴史の中ではなく、同時代の中からのモデルの発見であり、20世紀の独自性と言える。機械の持つ要素は機能・構造・普遍性であり、この理念はそっくり「住むための機械」としてコルビュジエに受継がれ、1928年のCIAM(近代建築国際会議)での宣言となった。そしてその運動は都市までも機械として分析する思考(アテネ憲章1933)としてインターナショナルに広がっていった。

しかし、機械そのものが人間や社会を支配するに至り、また機械が合目的な意味だけで成立した古い概念がなくなった現代、機械は私達に様々な不安さえ与えるものとなり、近代のモデルとしての機械の美学はその力を失ってしまった。また、20世紀の後半、社会そのものも20世紀前半とは大きく変化し、機械に代表される文明の影響が大きく、環境問題が一気にクローズアップされはじめた。

そのような状況の中、ポストモダンの概念(チャールズ・ジェンクス1977)が建築の領域から提唱され、それは瞬時にして他のすべての領域にまで拡大していった。建築は歴史的連想性を改めて内包し、機能主義から新しい可能性を見出し新次元へと進んでいった。そして、複雑に多次元化した社会の中で、建築そのものが機械に代って時代精神のモデルとなっていくように思われる。しかし、このポストモダニズムは当の建築の領域に於いてさえ、非常に誤解されやすく、特にバブル経済の社会的背景と重なりあった日本では表層的かつ場違いの表現の建築が数多く出現し、戸惑いを隠せなかったのは私だけではないであろう。時代が建築をモデルに求めるとき建築家は重大な危機を迎えているのである。

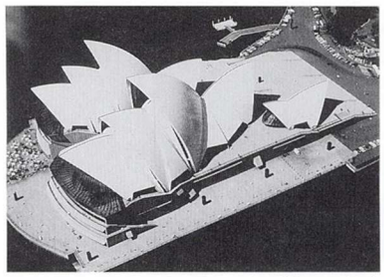
今一度、ミースが言った「建築は空間に翻訳された時代の意志である」(1924)を思い出さねばならない。そして、私にとっての20世紀はやはりミースがインターナショナル・スタイルの絶対的な存在であり、それを超えるものが目撃されなかった時代であった。

### 3 人に感動を与える

建築の表現に於いては激動の20世紀に私自身もその一部期間に同時に身を置き、実際に数多くの作品に接し、思潮についての書物を読んだりもした。その様な体験から、やはり「建築は人に感動を与えるものである。」ということが最も重要であると私なりに結論づけている。建築を設計する目的についてはその時の立場とか、関わりもあり、人により様々であろうが、他のもの作りの領域も含め、終局的にはこう言うことであると思う。ですから、建築家は人に感動を与えるためにどの様に作ればよいかを模索する職能であると言っても良いだろう。また社会や環境が急激に変化し、あらゆる情報が同時的に溢れる現代、建築家は環境開題への責任とすでに成熟した情報化社会にどの様に関わるかが問われている。

その様な状況の中、建築家で在り続けるためには、ずっと同じ手法で建築を作っていてはだめである。社会や環境の変化と共に自らも変化せねばならない。また、建築は集積された情報や知識の量によって作られるものではなくて、自身の中に流れるイメージをいかにつかまえて、それを具体的な形にするかということであると思う。そして、それは20世紀という時代を経て育まれた近代建築の表現に逆行することなく、インターナショナル・スタイルでありながらも、自身の民族性やその美意識に根づいたものでありたい。

と言うことで、未だにパソコンを操作できない時代おくれの私の最大の関心事は以前より「日本人の美意識」とそのネタの収集である。


シドニー・オペラハウス(ウッツオン)

### 4　環境への責任

20世紀の世紀末に突然降って湧いたようなポストモダニズム。時代精神のモデルであった「機械」を蹴散らし、再び歴史的連想性をと言うが、概念的には了解するものの、当の建築の領域に於てはその表現については非常に多くの問題を含んだ出発であった。特に我国に於ては民族性や地域性、宗教や歴史の面で欧米とは大きく異なるが、バブル経済の背景とそれに伴う何でもありの若手建築家の台頭が重なり、ポストモダンの表現そのものをバブル経済の象徴にしてしまった。

2年後に21世紀を迎えようとしている今現在、建築家達は作りながら考えており、最近の建築表現の流れは激しく動きつつある。かつての19世紀末からの40年間がそうであったように、この先がどうなってゆくかは誰にも分からない。しかし、そのような中にもごく最近ではあるが、モダニズムが芽生えた頃のような、それでいて当時とは異なったコンセプトを持つ新鮮な表現がヨーロッパと日本の中で生まれつつある。その思潮をどの様に呼べばいいのか分からないが、新しい「モダン」であり、それは統一された様式ではなく、むしろ非統一性を本質としている様に見える。その表現は明るく、透明感があり、解放的な空間がかつてのモダニズムの様相とどこかで重なり合っている。

工業化社会から情報化社会に移り、さらに成熟期を迎えた今、複雑に多次元化した社会に建築することは、そこに様々なものの「関係づけ」を問われている。建築と都市との関係、建築と建築の関係、さらにそこに人が関わる。コミュニケーションの空間づくりがより大きな課題となってゆく。また、モノからココロに移行してゆくであろう成熟情報化社会の中では、感性豊かなメッセージを空間や形に表現することを求められるであろう。そして、科学技術と建築の同時的な共振を伴うこの新しい流れは、互いの歴史文化的背景に共通点がない日本と欧米の建築をテクノロジーを共通項として、同時に同種化してゆくであろう。

また、かつて機械を時代の象徴としていた時代の文明の影響は全地球的なものとなり、人類が環境が無限でないことを知った現在、建築家が「環境」に対して何が出来るのか、どう関われるのかということが責任も含めて非常に大きな問題となる時代を迎えている。

(こばやし　ひさし)

# 新しい風景の中へ

佐野吉彦

安井建築設計事務所取締役社長

### 1.
### 1970年の衝撃

70年の大阪万博には強烈なインパクトがあった。そこには楽観的な未来があり、素朴なバナキュラーがあり、地中に納められて姿の見えない建築があったりした。つまるところ、万博は今日の都市の刺激と混乱を予言していたのだ。

### 時代を転換させるもの

風土や経済は建築の姿かたちを決めるが、大きな流れを変えることはできない。風土に反逆し、経済的制約を克服したものが、初めて光と力を持つ。たとえば、シドニーオペラハウス、ポンピドーセンター、そしてビルバオのグッゲンハイム美術館のように。

### モダニズムとリージョナリズム

普遍的であることと、地域性を持つことはほとんどのケースで矛盾している。ただし、すぐれた見識を持つ建築家だけがそれをしなやかに乗り越える。たとえば、槇文彦の代官山ヒルサイドテラスのように。

### 2.
### 何でもない。

19世紀後半の名作と言えば、クリスタルパレス・エッフェル塔・ブルックリンブリッジ。それらは都市の輝きを象徴した。(たぶん今でも) 20世紀の建築家のしたことはそれらの補足でしかなかった？

### 何でもあり。

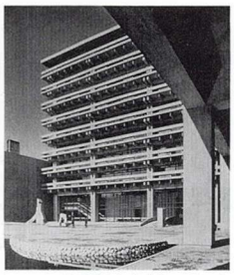
20世紀は理論を発明した時代。バウハウス、デ・スティール、ロシア構成主義、デコン。人と違うことを考えつくと商売になるわけです。

### 何でも来い。

20世紀最後の建築家は、何でもこなせることで評価された。自分のスタイルを見いだそうとしているうちに、そうなってしまったのだ。たとえば丹下健三。皮肉ではありません。尊敬しています。

### 3.
### 変換能力

自分（もしくは組織）の、保有する知識と技術。それらと実際の設計行為やプレゼンテーションとのあいだにどのような変換がおこなわれているのだろうか。変換の技量というものが建築家の能力を


香川県庁舎(丹下健三)

決めているような気がする。

**自在なるもの**

ひろがってゆく環、あるいはコラボレーション。自在なありようが解き放たれた建築と都市を生み出す。あなたと私のあいだに、さまざまな可能性がある。

**ペリフェリー**

都市のペリフェリー。すなわち「はざま」の地、もしくはヘタ地。誰もが解決できないポイントを解決してみせることの、大いなるインパクト。

**4.**
**都市をどう体現できるか**

20世紀はスピードアップの歴史。高まるスピードをどう表現するかにデザインは腐心してきたが、21世紀はギアチェンジの時代。都市が内包する異なるスピード感覚をどう併存させるかだ。未来派がやりかけ、いまコールハースが仕掛けていることですね。

**期待しましょう。**

作曲家・湯浅譲二は「見たことのない新しい風景の中へ連れていってくれる語り口が音楽の新しい世界だと思うんです」と言っている。建築家にそれができますか。まずはあなたの一本の線(いやクリック?)からはじまる。

(さの　よしひこ)

# 生命体の一細胞

笹木　篤
建築都市設計インタースタディオ

**1. 歴史の断続**

私の過去の建築とのつき合い方は、超古代の都市遺跡から、現代に到るまで、見境なくつまみ食いするというもので、これまで特に20世紀として特別な見方をしたことはない。

時間、空間、社会体制の中で、建築家や建築に携わる人々が、どういう解答をしてきたか、という点においては、遠い過去も近い過去も同様の教訓を与えてくれる。このような、多数の建築活動の総体が、設計行為の糧となっているように思う。

特に最近は古代、古典に関心が向いていて、例えば、メンチュホテプ1世とハトシェプスートの葬祭神殿や、ローマのパンテオンなどは、革新性、象徴性、簡潔性、構成力、構法における革新性、そして後世へ与えた貢献度等、どれをとっても秀でていると思う。

かつての日本建築の素晴らしさも、強く意識させられる。作者不詳の建築が群をなして、1つの織物を織りなすような美しさを生み出す。時代や地域における差異はあるものの、これほどまでに統一的なスタイルで、つい最近まで国土全域が覆われていたのである。1戸の住居のスタイルは、生活様式と密着した形で発展して、洗練の極致まで辿りついていったとも言える。それが群をなしていたのだ。国土全体がほとんど芸術作品だった。そんな気さえする。例えば、有明地方の「くど造り」、「じょうご造り」などは、地域の大工さんに任せておけば、自然にこの特異なスタイルの家が出来上がったそうである。今から40年ほど前のことである。

このような現象は現在でもいたる所で細々ながら起こっている。こう考えてみると、結果的には、個人の枠を越えて、地域や時代を代表するような作品を、私は自分で名作だと考えているようである。20世紀においても、地域性の概念は少し緩やかになったものの、私の考える名作はたくさんある。中でも、ルイス・カーンの一連の作品については、時代の枠すら超越してしまったような、歴史の蓄積を感じてしまう。

**2. 20世紀の両面性——個と全体**

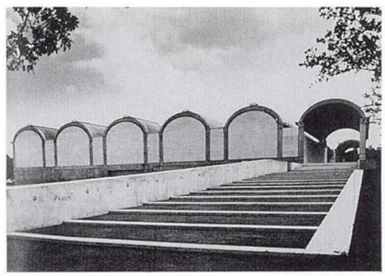
いろいろな角度から、いろいろな見方ができると思うが、その一面として言えるのは、個人の生活様式から国家の存在のあり方まで、種々の段階において新しいスタイルが確立された世紀だと思う。しかしながら確立のスピードが、環境の変貌のスピードに追いつかず、あわや悲劇的結末を迎えようとしているのかもしれない。産業、政治、生活水準、人口増加、といった、これらの諸要素の変化が、相互関係を決裂させた格好で暴走し、相応の生活スタイル(=住居スタイル)の確立が間に合わない情況にあるかのように見える。その反面、一万年以上の歴史を持つ人類の都市生活(空間)において、根本的な部分は何も変わっていないようにも思える。いや、むしろ、後退しているように見えることさえある。

20世紀の建築も、このような両面性を抱え込んでいると思う。話をスケールダウンすることになるかもしれないが、1つだけ言えることは、面としての建築群に対してどのようなストラテジーがありうるのか、という点で、今世紀での収穫は、余り多くはなかったように思う。個体としての建築の意味論は、猛スピードで変貌してゆく環境の中で、次第に空虚な響きとなりつつあるのだろう。

**3. 木材のこと、居住環境のこと**

関心や好みは毎年変わっているけれども、アンケート時のタイミングで答えるとすれば、我が国の森林に関することと、居住環境に関すること、である。

日本に限れば、森林を育て、山を管理する為にも、木材の消費を



キンベル美術館(カーン)

もっと増大させねばならない。その為には、国産材の流通革命、生産の合理化、そして林業全体の政策の充実をはかる必要がある。と同時に木材そのものの安全性を向上させる技術開発も重要となる。法規制の緩和は、輸入材を想定したものばかりが目につき、申請の現場においては、木材というだけで毛嫌いされる傾向が強い。その一方で、一般消費者のいわゆる「建材」に対しての不満の声は高い。かといって、木材に不慣れな人が増えているせいか、木材の多用には、あらぬ不安がつきまとってくる。このあたりの概念の整備を行い、需要と供給と規制との間の互いの捩れを解消させなければならないと思っている。目下、コーポラティブ集合住宅で国産材の多用を試みているが、これがシステムとして確立される様、力を注いでいきたいと考えている。

もう1つの関心事である居住環境に関して言えば、現在、産業Onlyの都市計画や道路計画がなされており、「住む」という永続的行為を中心にした計画にする為の、根本的な変更をすべきだと思う。道路工事は絶え間なく行われているが、その内容は、農村地帯の広域農道や、都市密集地帯を分断する都市内幹線道路、及びそれらに伴う区画整理といったものばかりである。このような場合、僻地や郊外における集落の居住地域内に、また都市の住宅密集エリア内に、地域の幹線道路を作り、通過交通を呼び込むことになっている。本来、真先に取り組むべきバイパス路の整備は、まだまだ立ち遅れている。

また、ここ10年ほど、日本の大都市密集地域の人口密度は、ほぼ横ばいあるいは減少傾向にあり、その人口密度の上限も、動物本能の為せる技か、おおよその数字で一致をみることができる。しかし、公営、民間に拘わらず、大規模なマンション建設は、不必要な人工過密を招くものが多く、当然ながら、道路、公園、学校といったインフラとのちぐはぐさが生ずる。

混乱とスラム化を招く人口密度のアンバランスが、どういう都市計画の下になされているのか、まったく不明である状態だ。これらの根本的な問題を解決して、初めて建築的提案が成立しうる筈である。

### ㈣. 相互依存の関係性

古代では神権(≒主権)が、中世西欧及び中近東地域では宗教が、近世近代にかけては軍事が国力の象徴であり、これらが建築行為を支えてきた。20世紀に入ると、自由と民主主義のパワーが建築行為を支えるかに見えたが、実際に国力を代表するのは国の経済力となり、商業パワーが建築行為を支えているように思える。資本主義と商業のパワーが、国家の中でどう位置づけされてゆくかによって、建築の方向づけも左右されるだろう。その前兆はもう垣間見えているようにも思える。

1個の人間が、1生命体の1細胞の如く、人間の集団の中でしか生きられず、その関係も予想以上に緊密で、微妙なバランスの上に成り立っていることが、少しずつ悟られている。

この関係はさらに拡がって、産業、政治、経済、自然、人口(密度)等の相互関係にもあてはめられることだろう。建築も単独ではスタイルが成立せず、より大きなグループの中の1細胞としての位置づけを明確にする必要がある。これは、都市部においても、農村部においても同様である。ただし、この方向は、20世紀の間に培われて来た、我々の快適な意識とは、まったく逆方向の印象を与える。(現実には同一方向の一過程なのだろうが。)

所有形態とは相反する価値観を、個々の建築に対して、明確に導入してゆく必要性も出てくると思う。(過去においては、当然のごとくなされていたことかもしれないが)

(ささき　あつし)

# 神戸で描く素晴しい街のイメージ

瀬戸本　淳

瀬戸本淳建築研究室

### ㈢. 神戸の建築家たち

私が影響を受けている建築家の中でも特に述べておきたいのは、神戸の建築家たちです。彼らは、他者とのつながりが一番大事だと考えています。その作品は、慎しくも品があり、歴史性、地域性をふまえたデザインは刺激的でさえあります。同時に和音を奏でながら生きていくことの楽しさ、すばらしさを教えてくれています。

自然環境と有機的な結合を示す建築の原点といえばやはり、古くから各地に存在している永遠不変のリズムをもつ共同集落でしょう。それは、まるで地中から出てきたような独特の暖かさがあり、素直に生活理念が表現されています。細部における芸術性と、内部空間の豊かさ、平等、対比と調和、光の充満、苔むすような田園的詩情、多層な空間による和諧生活の追求。生気がみなぎり、神が宿ります。

幸い、こんな理想郷のお手本は世界の各地でまだ体験することができます。

### ㈡. 街に対しての加害者

20世紀の中でも最近について言えば、みんなと生きている実在感をもった建築を創るのに苦しんだ時代、何かの呪縛から転ずるのに、苦しみもがいているため、神聖なものとして創られなかった多くの



マジョリカハウス(オットー・ワグナー)

建築が世にあふれている時代と言えるかも知れません。心を充分に開ききることができなかったからです。

そのために、多様な楽しみはうすれ、本物の生活のにおいも、物語もうすれ、芸術的理想の表現と、ポエティックな雰囲気がすっかり色あせてきました。心と切り離されたものを創ってもまったく仕方がないことに気がつかなかった建築家は、街に対して加害者になっている時代なのかもしれません。

### ㈢. 愛しい輝きに満ちた街

今、建築家の仕事の意義は、社会との相互関係に重点が移りつつあります。人と人、人と空間、人と街との関係は、苦しい時代からの反動で多くの人々が強く認識するようになってきました。

神戸でも震災から3年たった今、再建住民の人々や事業主自身が、すばらしい街のイメージを描く場面に出会うことがあります。そのイメージは、誰でも完全に魅了されるだろう理想の街です。子供もお年寄りも安心して楽しく生きることができ、自然もいっぱいで、愉快な情景がただよい、街が成長していくシステムさえも内蔵しています。

精神の中心軸は芸術的効果も高まって、そんな場が好きでみんなが集まってきます。計り知れないほど豊かで、なつかしくて、愛しい輝きに満ちた街、建築を人々はイメージすることができるのです。そんな市民と、きっちり会話できる建築家ほどデザインの力があると言われるような、面白い時代に入ろうとしているように感じます。

### ㈣. コミュニケーションの時代

21世紀は何でもイメージができると同時に、相手の心が見えるコミュニケーションの時代だと言われています。お互いが、心のくもりをとってはじめて対話がはじまります。そして感じる心と考える心の融合から安心立命的な安らぎが訪れます。本来心の中にある、「こうすると一番良いとわかっていること」を表に出して仕事をするだけなので、かなり楽になります。

人々がまちづくりのプロになっていくうちに、みんなで美の基準をぶつけ合っていくことになるでしょう。悪かったものはみんなで認めて変えていき、高い理想をもって気心を合わせながら創っていく作業の中から、念珠のような心のつながりをもった、生命の息づく街が姿を現してきます。これを人々は“奇蹟のまち”と呼びますが、実は人々の心自身が奇蹟なのです。自由を愛し、理不尽には屈しない自己表現のお手本みたいな街があちらこちらに生まれてきます。若い人達が今、「きっとこうなる」と私に言ってくれるのですから、間違いないと思います。

(せともと　じゅん)

# 名作は時代を超越する

田中英一

大成建設関西支店設計部長

### ㈠. オットー・ワグナー

建築設計を将来自分の職業にしようと決心する前、立ち寄った書店の雑誌で見た丹下健三の広島平和記念会館。ピロティーとマリオンの軽快さとプロポーションの美しさ。そのときの感動が今も忘れられない。建築学生の頃惹かれたのはフランク・ロイド・ライトとマルセル・ブロイヤー。バイトした金で買った建築家の作品集もこの二人のもので、今のところ最初で最後のものである。ライトの作品では落水荘やタリアセンのアトリエなど、環境とよく調和したキャンチレバーや荒削りのデザインの美しさ、しかも温かさ。一方、マルセル・ブロイヤーに見る光と影のコントラスト、シンプルで明解なデザイン。彼の理論、建築は調和か対立か。いまだ自分の中では結論を得ない。しかし、僕が一番惹かれるのはオットー・ワグナー。ウィーン郵便貯金局やマジョリカハウスなど、古い大木に芽を出した若葉のような新鮮さを感じる。美しく繊細な表現、材料の使い方など現代でも立派に通用する。20世紀初期とは思えない作品である。名作は時代を超えて美しい。

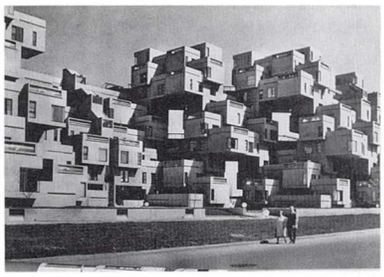
### ㈡. 走馬灯

建築は時代を伝える文化であり、この20世紀、多くの名建築が作られた。が、しかし、建築とは何か。建築から受ける感動とは何か。機能性、技術力、環境との調和、美しさ、経済性など建築に求められるものは判りやすく明解である。これは建築に求められる普遍性でもあるがそれだけでは感動となりえない。100年と言えば僅か人の一生に過ぎないのに、その間余りにも多くの考えや様式が提案された。古典主義の長い時代から、一気に近代合理主義の中へ猛スピードで突入し、未だその中から脱却することが出来ないでいる。建築に関する全ての事象が巨大な走馬灯のように映る。高品質を得た他産業に比べて、建築はまだまだ原始的で実験的要素を脱することが出来ない。名建築と言われるものはほんの一部で、大方は短絡的に少し乱作をし過ぎたようだ。よく言えばこれは21世紀へのエスキースとならん事を期待したい。

### ㈢. 特化技術

兼業の立場で今一番関心をもってやらなければならないことは次の4つです。

1．コスト競争力のある設計


アビタ67(モシェ・サフディ)

2．顧客の満足を得る設計
3．環境配慮設計
4．差別化技術

特命工事で顧客とじっくり仕込んで行くならともかく、競争物件でこの4つを満たすことは大変困難です。しかし、これらの目標を少しでも実現しないとゼネコン設計部の将来はあり得ないと思っています。

### ㈣．アイデンティティー

建築が人の生活を支えている以上、人の生活システムが大きく変わらない限り建築もまた大きく変わることはないと思います。21世紀も資本主義社会の自由な競争が続くでしょうから、アイデンティティーを求めてますます個性豊かな建築が作られるでしょう。しかしその前に、私達は群としての建築、即ち街造りについて考えなければなりません。そのためには土地政策を根本的に見直さなければなりませんし、幼少の頃からのコミュニティーに対する教育も必要になるでしょう。この2つを実現しない限り、日本の群としての建築は美しくならないと思います。単体としての建築は脱モダニズムを指向しながら、よりシンプルでより純化されたものになるでしょうが、歴史はまた繰り返し古典主義に新鮮さを感じることがあるかも知れません。

(たなか　えいいち)

# 抑制の思想

高口恭行
造家建築研究所

### ㈠．都市デザイン

都市デザインと言うキーワードのもとに作られた作品・提案のすべてに影響を受けたと思われる。丹下健三の代々木体育館は都市デザインと言う行為の実在を示唆したかに思えた。つり橋を実現したマクロエンジニアリングの応用や、歩車分離、屋根のスカイラインをシンボライズして見せた点などが、明快なテキストとして示されていた。

モシェ・サフディのアビタ67（モントリオール）は30年後に再見して見て、私に大きな影響をもたらしたものと再確認した。集合住宅をユニットに分解し、モデル化して、再構築すると言う手法が、都市デザインのテキストとして妥当と思われた。

ローレンス・ハルプリンの（サンフランシスコ）ギラデリースクエアは「賑わい」をデザインする方法を示した点で建築における都市デザインの弱点を補填するものである。

工業生産を前提とする機能主義は必然の流れとして正当であったが、つくり出された空間に魅力がとぼしく思われたのだが、「都市デザイン」は、まさに機能主義のもつ最大の魅力あるビジョンであり得たと考えている。

### ㈡．便利で健康的な建築

便利で健康的な建築の全体像を構築したと言う点で20世紀の建築家が果した役割りは大きいと思っている。

身辺的にみれば1950年代に私が住んだ家・町・都市は一口でいって不便で不健康な空間であったから、何はともあれ便利で健康的な空間を構想し、実現したことはすばらしいことであったと言える。

しかし、便利と健康の追求が個別的に進行し、課題の全体を展望する視点が欠けていたと言えるだろう。その結果、今日の「便利」と「健康」には不必要・不適切な行きすぎの便利、行きすぎの健康が多々含まれており自然、資源、歴史、コミュニティ、宗教…そういう複雑な「系」の視点が欠けていた。

### ㈢．環境デザイン

相変らず都市デザインこそ最重要課題であると考えているが、これまでの反省に立てば、用語的には「環境デザイン」とすべきであろう。

具体的な対象として私の住む一心寺界隈を興味深く注視している。その場所は上町台地と言う地形と天王寺七坂、天王寺七名水と言う場所性があり、「夕陽」を展望する場所と言う歴史があったが、今はそのすべてが埋没している。寺町と言うコミュニティと風景とイベント。台地の斜面を覆う緑なども埋没している。それらは今日、すでに掘り起すことが不可能なのか、掘り起しても生き返らないのか。しかし再生の可能性が残されているのではないか…。その可能性を環境デザインと呼ぶとして、このことに最も関心がある。

### ㈣．多元的価値観

近代建築の二元論的な単純な発想はそれゆえの普及力を持っていたのだが、その単純さゆえに都市デザイン、環境デザイン的でありにくい。めざすべき方向は科目別の設計思想・地域毎の計画思想、と言った「多元的価値観」。便利と健康の評価に関する多元的チェックシステムなど、一口で言えば「抑制の思想」と言ったことになると考えている。

(たかぐち　やすゆき)



ブリオン家墓地(スカルパ)

# 原型としてのミリマリズム建築

高砂正弘

高砂建築事務所

### 1. ミースとスカルパ

20世紀の建築を純粋な形で表現しているバルセロナ・パビリオン。この伸びやかな造形と、それを支えるハンドクラフトな技術に影響を受けました。また、イタリアのヴェネット地方で連綿と受け継がれてきた伝統と風土を駆使して、時にシャープに、ある時には鈍重に空間を表現するカルロ・スカルパの建築からも多くを学びました。

### 2. スタンダード

私にとって20世紀の建築は、善くも悪くもスタンダードであるように思います。無意識に建築を考えるときの原器にしています。

### 3. ミリマリズム建築

自然の中から生れた民家などの素朴な空間です。現代建築では少し恣意的ですが、ミリマリズム建築が、その延長線上にあります。その単純で多くを語らない空間が時代の感性にシンクロしていると思います。その寡黙な空間が小さな流れをつくる可能性があります。求める要求に対して、いかに少ない要素で空間をつくるかという時代にふさわしい建築の原型がそこにはあります。

しっかりしたプログラムに合わせて建築をつくるという方法ではなく、必要なことだけを最小限の言葉で語る。建築的に対話したいという時代の要請に対して、民家あるいはミリマリズムのような空間があると思います。

### 4. 自然な建築

最近の風潮を見ていると、強烈な自己主張よりも、ささやかな楽しみが主流という気がします。流れはつくったり、つくられたりするものではなく、自然に「なる」ものだとは、この前読んだ新聞の論説文です。そうすると、建築が人をコントロールする時は過ぎ、人が自然に建築をつくるようになりつつあるのかもしれません。21世紀は自給自足的な建築になるといった予測も出てきます。

19世紀末がそうであったように、今世紀末にも建築を取りまく色々な要素が急速に変化しています。例えば素材の思いもよらない新しい使い方や多様な構造形などです。また設計の進め方も少しずつ変化しています。近い将来、そうした小さな歯車が噛み合って大きく建築が動き、今とはまったく違った建築が現れる予感もあります。

(たかさご　まさひろ)

# Japan —— the beautiful

瀧　光夫

瀧光夫建築・都市設計事務所

答えにくい設問ばかりですので、まず4にかかわる駄言を少々。

紀元2000年は、20世紀か、21世紀か。

A.D.1年から100年までが1世紀、101年から200年までが2世紀ですから、2000年の暮れのあけた2001年の正月からが21世紀、になる筈です。なんとなく1年分、勘違いしている人々がおられるのではないか、という気がします。本来「年の流れ…」には区切りがなく、人の五感ではとらえにくいので、生活の便宜上、時・分・秒、日・月・年などの「区切り」を案出して、それを目安に暮らしています。「世紀：century」は、キリスト生誕をはじまりとして100年を単位にした西暦の考え方です。歴史を考えるには便利ですが、私たちの日常生活にはほとんどかかわりがありません。私が小学生の時は、第2次大戦中で、「紀元は二千六百年…」と歌わされました。一時的にせよ、日本流の「紀元」の考え方もあったわけです。また、「元号」なる年の数え方もあって、これは現在も使われています。

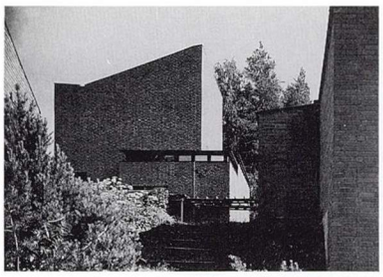
私自身が、「時代」というものに鈍感なのかも知れませんが、1900年代が2000年代に変わっても、「昭和」が「平成」になった程度のことではないか、と思っています。「20世紀の」とか「21世紀へむけて」などに答えにくい次第です。その程度の予感を前提にして答えます。

### 1　影響を受けた建築作品

あえてあげれば、まずはル・コルビュジエ、ミース・V.D.ローエ、F.L.ライト、アルヴァ・アアルト、ルイス・カーン、諸氏の作品群、また、アルネ・ヤコブセン、K+H・シレン、ヨルゲン・ボー（ルイジアナ美術館）、アーサー・エリクソン（カナダ）はじめ多くの国内外の作家、作品、毎月手にする数多くの雑誌などにあらわれるおびただしい写真・図版類にも多くの影響を受けています。影響を受けないように心がけているのは、C.ムーア、M.グレイブス、F.O.ゲーリー、P.アイゼンマンなどいわゆるポストモダンの作家や作品群。なお、ギリシア・ローマなど西洋の古典から、桂・修学院離宮などに代表される、20世紀以前のものから多くを学んでいて、その区別がつけにくいことは、前言のとおりです。

### 2　有史以来の建築的愚挙

わが国に限っていえば、i）第二次大戦で、都市部の建物はほとんど失われました。ii）その後に、復興の名のもとに乱開発が行われ、これは地方・田舎・山地にまで及びました。結果として都市美


セイナッツアロの役場(アアルト)

も自然美もない国になってしまっています。ここ半世紀の建築は、土木と相まって、視覚的にも物理的にも環境破壊そのものの集積を形成してきました。国際的レベルの「名作」と言える建築もつくられては来ましたが、それらは量的には「例外」的で、低質のビル群の中に埋没してしまっています。今世紀は有史以来の「建築的愚挙」が行われた時代、と言えるのではないかと思います。

### 3　現代のジャパニーズ・デザイン

「これが現代の日本の“建築”であり“にわ”である」と言えるような場所を創り出したい、そうでないものはつくらないようにする、ことを心がけているつもりです。「スカンディナヴィア・デザイン」と呼ばれるものがあります。知るかぎりでは、街並みから日常生活用具に至るまで、古いものと新しいものが、ほど良く調和して実に良く出来ていて、うらやましい思いをすることしばしばです。そういう質をもった、どこの国の人がやって来ても、これが「現代のジャパニーズ・デザイン」と胸を張っていえる場所——点ではなくひろがりとしての——をなんとかして生み出して行くべきと思います。その気になれば、つくる能力も技術も充分にあります。歴史的蓄積も充分にあります。そうしないと、この国は建築という名の粗大ゴミにあふれた、きたならしい島でしかなくなる（既にそうなっている）、という事に人々も建築界も早く気がつくことだと思います。

### 4　Japan——the beautiful

「21世紀に向けて」などと言わず、今すぐにでも手をつけるべき「方向性」は明白で、1）既存の醜悪な建築物は、改修・改変して美しい建築に変身させる。2）これからつくるものは、上記3の方向を目指す。3）少なくとも周辺の景観・環境に寄与しないものはつくらないようにする、ことです。それでもっと、「美しい日本：Japan——the beautiful」※と再び言えるような国にしてゆくほかはないと思います。50年、あるいは100年、ひょっとしたらもっとかかるかも知れませんが。　（たき　みつお）

※川端康也著、E．G．サイデンステッカー訳、「美しい日本と私」「Japan, The Beautiful, and Myself」—講談社—より。

# 建築と環境の融合

竹原義二
無有建築工房

### 1　影響を受けた建築家

○アルバア・アアルト
○ヴィラ・マイレア

### 2　20世紀の建築

○環境破壊。
○建築の短命。

### 3　エネルギーの行方

空間の裏側におかれている目に見えない設備の今後の動向。とくに、エネルギーのゆくえ。

### 4　めざすべき方向性

建築と環境の融合。　（たけはら　よしじ）

# 環境の力を発揮できる建築

塚口明洋
塚口明洋建築研究室

### 1．建築家、建築作品

1．F.L.ライトのユーソニアンハウス
近代の家族像に合わせたローコスト住宅をシステマチックに展開した。

2．丹下健三の香川県庁
コルビュジエ風の打放しの建築をベースにしながらも、日本的プロポーションの美しさをつくり出した。

3．磯崎新の大分県立図書館
ダブルウォールによる新しい空間構成システムの発見。空間、光の発見。

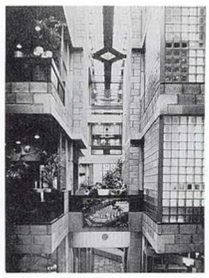
4．篠原一男の白の家
「住宅は美しくなければいけない。空間には響きがなければいけない。」

5．ルイス・カーンのキンベル美術館
単位空間、空間構成システム、素材、光。美しいコンクリート打放し。

6．アルド・ロッシのガララテーゼ集合住宅
驚くほどに何もない詩的な空間。語りかける建築。

7．ノーマン・フォスターのロンドン事務所
具体的な問題解決から、素材を組み合わせることで、詩的な建築ができる。

8．リカルド・ボフィールのウォールデン7
集合住宅の中では、住戸ユニットシステムから都市的スケールまで表現された建築。


セントラル・ビヘーア(ヘルツベルハー)

9．安藤忠雄のローズガーデン
建築における外部空間の発見。敷地環境を生かす。空間のシークエンス。

10. 槇文彦の立正大学
建築の中の都市。アーバンデザインの手法を用いた群造形の魅力。

11. 室伏次郎の上の家、下の家
アジア的肌触りのある原初的空間。

12. 伊東豊雄のシルバーハット
アジア的広がりのあるシンプルな住宅。

13. 象設計集団の名護市庁舎
自然を取り込んだ建築架構システム。地域性の表現。

14. 高松伸のキリンプラザ
都市のシンボルとしての建築。そして高松伸の世界を表現する建築。

15. 谷口吉生の土門拳記念館
幾何学構成による平面計画と、制御された空間のシークエンス。

16. 山本理顕の緑園都市
建築の中に都市を組み込む試み。

17. スチーブン・ホールのネクサス集合住宅
知覚される空間を明確に意識した建築。詩的表現。

18. ヘルマン・ヘルツベルハーのセントラル・ビヘーア
オフィス空間システムの提案。プレハブリケーションシステム。

19. レム・コールハースのダラヴァ邸
透明性、透過性を意識した新しい空間構成システム。

20. コルビュジエの繊維業会館
確かに現代建築の空間構成システムの源は、コルビュジエにある。

21. ゴードン・カレンの「都市の景観」
アーバンデザインの方法論として、領域形成・シークエンスの概念を取り入れる。

22. ケビン・リンチの「都市のイメージ」
都市のイメージを構成する要素を抽出。「わかりやすさ」という評価基準。

23. クリストファー・アレグザンダーの「パターン・ランゲージ」
設計条件の具体化と、それを解決すると思われる「パターン」の提案。

24. ロバート・ヴェンチューリの「建築の複合と対立」
建築デザインの評価基準を知覚される空間に限定し、倫理性、機能性等から独立したものであることを言明。

**[2]. 空間**

いつの時代も同じだと思うんですが、新しい素材、新しい構法、新しい技術によって、新しい社会に対応した「空間」を創造してきたことではないでしょうか。

**[3]. 都市の建築、建築の中の都市、透過性と関係性**

以上の3つのキーワードにもとづき、自然の力、周辺の環境の力を発見できる建築をつくり出すことです。

**[4]. 方向性**

建築は、その時々に、個別の解答を発見することだと思いますので、答えられません。

(つかぐち　あきひろ)

# 環境問題をマクロな視点で

寺地洋之

寺地洋之＋寺地建築設計事務所

**[1]. 建築家、建築作品、建築思潮**

数多くありますが、記述するにはスペースが足りません。

**[2]. 技術、形態、合理、消費、欲望、排除、メディア**

20世紀とは幅広いカテゴリーなので、20世紀＝近代化の時代と置き換えます。近代の建築は、合理性というテーゼのもとで近代以前の慣習、宗教など様々な曖昧なことが排除され、貨幣経済をバックに消費を喚起し、欲望を満たし、技術のための技術を追求し、メディアを意識した新しい形態を追求をしたものと考えます。

**[3]. 環境問題、生物技術**

エネルギーや産業廃棄物、環境遺伝子などの環境問題。遺伝子操作やクローン技術など、人間の存在を根本から問いかける生物技術の問題。

**[4]. モラル、マクロな思考、調和、コミュニケーション**

キリスト生誕を起源とした年数の境目を意識することは全く意味がないと考えます。ただ、現在は近代が押し進めてきた理想を客観視できる時代にあるとは思います。近代の悪の部分で際たる問題は自然の摂理を大きく越えた開発に伴う環境問題です。この問題は、人間の無知と傲慢の問題であります。

建築は、膨大な自然より得られる資源をもとに完成され、その後は膨大なエネルギーを消費していく器です。建築は、エネルギーを



マルセイユのユニテ・ダビタシオン(コルビュジエ)

含め、経済、流通、政治、法律、芸術、教育など様々な領域が交錯する分野で、それゆえ、現在の地球が抱えている問題に風穴をあけていく可能性が高い領域と言えます。

私も含め建築に携わる人々が、まず自分自身の無知、傲慢を問い直し、次世代の人々に対して責任ある行動をとるべきと考えます。技術による様々な恩恵を受けた人類が、アーミッシュのような質素な生活に戻るのは不可能に近いでしょう。環境問題を感傷的なモラルの問題と片づけず、新しい技術の問題としてとらえていく必要があります。ただし、この際、建築界はミクロな思考で満足しがちです。例えば、郊外にソーラーパネルを備え、高断熱な住宅を建てたとします。しかし、日々の移動に車を使っていたのでは、決してエネルギーの節約にはなりません．これはマクロな思考が欠けている例です。地球規模のモラルの視座のもと、マクロな思考とミクロな思考を調和させ、人と社会に長く愛され、必要とされ続ける建築を創ることが今後の流れと考えます。

また、建築に携わる人々は、閉じた建築界だけではなく、建築界の外に意識を向け、様々な分野の人とコミュニケーションを重ね、建築をとりまく制度やシステムなどに言及し、それらを改善すべく行動する必要があると考えます。　(てらち　ひろゆき)

# 建築における祝祭的要素

遠松展弘

日建設計大阪本社設計室長

### 1　コルビュジエ

本当の芸術と呼ばれるものは人々に生きる喜びを与え、元気づけてくれるものと定義していた人がいます。その意味で私はル・コルビュジエのマルセイユにあるユニテ・ダビタシオンが好きです。コルビュジエの凄さはこれまでになかった美的規範と体系に基づいた20世紀の建築様式を確立したことだと思います。ユニテ・ダビタシオンはその集大成であり、現代の都市住宅の可能性に挑戦した作品です。失敗作と言うひともいますが私にとってはコルビュジエの作品の中でも最も力強く、見る度に新鮮で元気づけられ勇気づけられる作品です。

### 2　祝祭性と共同体意識の希薄化

「20世紀の建築」が語れるほどの知識も見識も正直のところ持ち合わせていません。ただ現代化＝西欧化であった日本で近世以前の伝統的生活様式や風景と断絶して日本の建築家が独自性やオリジナリテイを確立していく難しさと空しさを感じてます。

むしろ問題は20世紀後半になり建築を作ることが一般化・大衆化したため、その祝祭的要素が稀薄になったことだと思います。大衆化したこと自体悪いことではなく、何よりこの時代に生きる設計者としてその恩恵に預かっているわけですが、一方で祝祭的要素が稀薄になった分、建築と都市や地域との関係も稀薄になり日本の建築がますます自己完結的で、内向きになっていると感じます。近頃よく建築の透明性等という言葉を聞きますが、このことへの反省であってほしいと思います。

### 3　耐久設計

都市と建築の文化的側面も含めて、その耐久性をどう考えて現時点で耐久設計をするべきかに悩みつつ、また大きな課題として興味があります。建築は都市の主要な要素であり部分・部品と言う側面もあり、都市が活力を持ち続けるためには、都市経営から都市・建築のデザインやエンジニヤリングまで幅広い分野で総合的に取り組むべき21世紀の建築に残された宿題だと思います。

### 4　サレド「ハコモノ」

建築には「用」だけではない祝祭的要素や文化・芸術的要素があることを再認識し、社会にねばり強く訴え、その成果を積み上げるという当たり前のことしか思い浮かびません。1で書いたように、本当の建築は人々に生きる喜びや元気を与えてくれるものと信じて、間違っても「ハコモノ」等と呼ばれないモノ作りの気概と熱意だけは失ってほしくないと思います。　(とおまつ　のぶひろ)

# 21世紀の新しい建築ビジョン

徳岡昌克

徳岡昌克建築設計事務所代表取締役

### 1　建築家、建築作品、建築思潮

1951～1965年：所属先 竹中工務店 岩本博行師の国立劇場、天神ビル、自邸等の一連の作品と、“日本の建築の美しさ・風土のもつ情感についての主張—日本にはその風土に合った建築を創るべきとする”思潮に共感していた。当時、建築設計をアンビシャスな試みとは捉えず、身近な環境整備の範疇にあるとの示唆を得ていた。

1965～1967年：所属先 ムーア建築事務所(ワシントンD.C.)及びC.F.マーフィー建築事務所(シカゴ、現マーフィ


デイア・カンパニー(サーリネン)

ー・ヤーン）での20世紀の材料、技術の実務体験とサーリネン、ミース、ライト、コルビュジエ、アアルトの作品の観察。特にイェーロ・サーリネンのダレス空港、デイアCO. 等一連の作品には類似造形が無く、現代建築家の中で当時異端視されていたが、私は彼の作品に流れる共通点、即ち人間の感情を捉える造形力に強く惹かれている。米国諸都市と帰国時に12カ国、20都市の景観に接して、現代建築とその地域の関わり方について観察した。この2年間で建築設計がアンビシャスな試みであることに気づいた。

1967～1983年：復職後、竹中工務店での設計活動中、大阪万博（1970）での西ドイツ館、カナダ・オンタリオ館、ポルトガル館のCO-ARCHITECTとしてそれぞれの独自性、共通点を観察。今までの経験を通じて私自身が感じとったことを基本に地道な設計活動に携わる。

1983～1998年：世界中の地域に根ざしたアノニマス建築作品に流れる愛着のもてる建築を目指して、設計活動中である。

### [2] 様式建築

私は1930年の生まれで、学校では特に様式建築を習ったことはありません。5歳上の兄はアカンサスのデッサンを残していましたから、まだ我が国ではそういう教育の時代だったのでしょう。1922年にミースは既にガラスの超高層を発表し、1938年に、アメリカに渡ってからその夢を実現させていますが、1965年頃のミースは、建築を文明の尺度としていましたので、そのデザインがそんなに目まぐるしく変わるものであってはならないとしていたようです。彼は素晴しい教育者でもありましたが、私自身は様式建築を現業を通じて学ぶと同時に、現代建築の材料や技術を修得し、地域に根ざした建築を創ろうとしてきました。様式建築に頼った時代から考えると、この100年間には目まぐるしい変化がありました。単に建築だけでなく、そうした時代で、何もかも混沌としているように見えますが、この世紀末をロマンチシズムと見ると分かり易いように思えます。20世紀の材料と技術で、夢みる建築を創りたいものと思います。未だ見ぬ建築へのウォーミングアップのようにも思います。

### [3] 21世紀の建築のビジョン

①20世紀の材料と技術をもって、我が国の伝統的な建築や世界様式建築が人々を惹きつけている郷愁やふれあいの場を創ること、創造的なデザインをもって人々の原風景に応えること。

②21世紀の新しい材料を発見し、それにふさわしい建築のビジョンを追い求めること。特に建築のもつアンビシャスな夢に向かって活動すること。

### [4] 質の時代

環境問題と地方分権の認識の高まり、市場の開放、こうした時代背景が我が国の建築環境をより良い方向に導くものと期待しています。私にとっては、改めて建築のもつロマンチシズムやビジョンを夢見るチャンスとなるので、21世紀の人々の願望や感動を建築環境に具現することを目指したいと考えています。ようやく我が国の建築も質の時代に入ろうとしています。量より質の時代、イメージとして残っていく質と、現実の建築としての質があると思いますが、私は後者を目指します。

（とくおか　まさかつ）

# 歴史の試練に耐えうる建築

中嶋龍彦
中島龍彦建築事務所

### [1]. ライト、カーン、ウッツォン

○F.L.ライト、ルイス・カーン

建築の創作活動において、前者はその建築思想を多くの後輩への指導と集団生活によりその思潮を広め、建築の創作を一つの宗教活動に近い形で実践し、ライト教を信じる建築家を世界にばらまいたこと。後者は創作を通じ、また違った形で自分の中に一つの宗教を感じ、深く、静かに思考を繰り返し、その創作において執拗なまでの追求をしたこと。

○ヨルン・ウッツォン

ギーディオンをして今世紀最大の傑作といわしめた大胆な造形力とそのひたむきな創作意欲、自然への観察から生み出された造形手法、そして何よりもその建築の優美なこと。

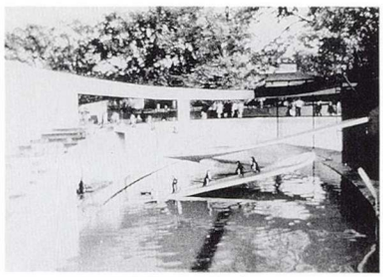
### [2]. 創り続ける

歴史的経過ならびに建築物からの意見はあるが、私にとって20世紀は特に意味のないものかも知れない。何んとならば21世紀になってもまだ建築を創り続けるであろうから。

### [3]. 時間と流れ

時間と流れを塑上すること。建築の物性的耐用年数と社会的耐用年数について。

### [4]. 歴史の試練



ロンドン動物園ペンギンプール(ルベトキン)

常に有る、今流行の建築、一部のジャーナルが創り出す一つの流行について建築の経験の浅い人達に何んらかの刺激を与えつつ、洗脳しているようで問題があるように思う。最今の学生の作品は顕著にそれを表わしている。建築が技術であり、芸術であり続ける限りに置いて、それは避けて通れない現象と思われるが、建築が創り得るであろう本源的な空間、歴史という時間の試練に耐え得るものが一つの理想として追求されても良い。 (なかじま たつひこ)

# ミリマリズム+ラショナリズム

中村勇大

中村勇大アトリエ

## 1 ミリマリズム+ラショナリズム

ファイアット・リンゴット工場 (1921) ——ジャコモ・マッテ・トルッコ

ロンドン動物園ペンギンプール(1936)——パーソルト・ルベトキン

フラックトゥルム (1942-44) ——フードリッヒ・タムス

スペースフレーム (1950-53) ——コンラッド・ワックスマン

ニコレットモール (1962) ——ローレンス・ハルプリン

船体組立ビル NAB (1967) ——NASA

セキスイ・ハイム M1 (1971) ——大野勝彦

スーパーカミオカンデ (1996) ——日建設計

インターナショナル・スペース・ステーション (1998-2003) ——NASA

これも建築なんだと、閉ざされた界からできるだけ遠くにほおり投げてしまえる、勇気と可能性を示唆してくれる。

## 2 戦争と技術革新

戦争と技術革新をネガティブに支えてきたもの

## 3 アフォーダンス

重力に対峙するうえでの身体性と、アフォーダンス。

## 4 枠組みからの超越

社会の状況を把握し、より開かれた関係性をたもちながら、カテゴライズされた建築の枠組みから一歩でも踏み外す行為そのものに価値があり、建築そのものにはもはや意味がない。

(なかむら いさむ)

# 大地に生きる建築を

新居照和

新居建築研究所

## 1 建築作品

多くの建築に関心があるし、学びたいと思っている。とりわけ身体の一部になるような象徴的な建築は以下の作品があげられる。インドの作品については、インドで暮らした生活の中からの空間経験に基づいている。

○ル・コルビュジエとルイス・カーンのインドの一連の作品。

ショーダン邸、サラバイ邸、織物工場経営者協会やチャンディガールの首都コンプレックスの建築など (ル・コルビュジエ)。

インド経営大学Ｉ.Ｉ.M. (ルイス・カーン)。

### 建築家

○カール・マルクス・ホーフ (カール・エーン)。

ルイス・カーンとル・コルビュジエ、絶えず存在感のある建築家である。

### 建築思潮等

○住居や都市をテーマとした近代主義の建築思想。

○近代建築興隆時にヨーロッパ各地で展開された近代建築の多様な方向性。

○アルヴァ・アアルトが展開したような地域主義的思索。

## 2 新しい市民社会の空間像

歴史上始めて、労働者階級の居住環境や都市問題が建築の主要テーマとなり、近代建築は新しい市民社会の空間像を現出し、その思想や美意識が高い普遍性をもったこと。

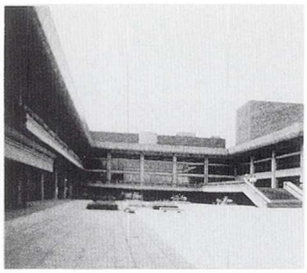
一方、建築の理解においては、世界の様々な民衆がつくりあげてきた多様な集落や建築の蓄積とその空間、場所のもつ固有の意味や価値がグローバルな視野で認識されるようになったこと。

## 3 大地に生きる

○建築を通して大地に生きていることを感じること。自然の営みの声をよく聞きたい。

○建築空間を介して地域で暮らすことの喜びが得られ、人と地域や自然との関係が意識の上で再構築されていくような建築になること。個々の地域が、元気で自律的な精神性を獲得できるような居住空間になっていくこと。

○多種多様な生命が生きるという原理に対応するような多様な空間



京都会館(前川国男)

的構造を構築していくこと。

[4] 多様な文化の共生

○建築が創り出す環境や建築生産が、地球環境の再生と維持、そして持続可能な社会に向けていかに応えていくかが、一層問われることになる。地球の物質循環や自然のメカニズムを認識した建築づくりが求められる。デジタル化社会になる中では、建築空間に自然に対する感性の覚醒の役割がますます求められるだろう。

○グローバリゼーション中で、地域から実体感のある建築を生み、個性ある文化が、発信できていくことをめざしたい。建築の存在は、国境の枠を越える刺激的なもので、かつ多様な文化が共生できる思想のもとに位置づけたい。 (にい てるかず)

# 初期近代建築の見直しを

西村征一郎

京都工芸繊維大学教授

[1]. コルビュジエ、前川国男、村野藤吾

○近代建築の巨匠であったル・コルビュジエには、私達の時代、関連する情報が最も得やすかったことと、実際の建築作品を見る機会にめぐまれたことで、長期にわたって人並みに、影響をうけているはずである。

○学生時代に竣工した京都会館は、現在でも最も好きな建築で、これを機会に、前川国男の建築の考え方(建築の前夜 前川国男文集他)に慣じんできたと思う。

○村野藤吾には関西を中心に数多くの作品があるが、これらの作品を通じて、設計行為のあり方(執念のようなもの)を学んだと思う。村野の影響は結果的に関西の建築界に幅広く広まっていると考えている。

[2]. 強者のもの

阪神大震災の後、誰のため、何のために建築に関わってきたかという疑問に悩まされた。少なくとも私の経験では、建築は常に強者のものでしかなかったし、それも欧米のリーダーにより設定された道を何の疑いもなく歩んでしまったという実感が残る。

建築やまちなみの価値判断が、何らかの権力をもつ者、あるいは経済社会の強者によるものにより、市民の(弱者の)住まい等は仮設住宅や再生の方法にいたるまで、単に偽善的に付加されたものであったと言えよう。

[3]. 国際化、地域性、高齢社会、集まって住む

建築の国際化と、それを利用する人々と、それが存在する風景がもつ地域性の関連について(古くて新しい問題)。人々が"集まって住む"ことの現在の意味。我が国の高齢社会と"地域性"がもたらす建築のあり方、考え方。(国民の4/1の高齢者のため"安心"できる建築をつくる法整備も不可欠)

[4]. 持続可能、近代建築の初期、見直し

地域における建築の流れ(歴史)の再確認と、広い意味で社会資本に足る、持続可能な建築のあり様を研究し続けていきたい。バブルに踊らされた建築の後遺症(○○主義の建築デザインを含め)を払拭するため、公共性の熱意に燃えていた我が国近代建築の初期(前川、坂倉、吉阪時代)を見直してみる必要を感じている。

(にしむら せいいちろう)

# 地球規模の視点を持った設計

堀田 正

清水建設大阪支店建築設計部部長

[1]. 人の暖かさを感じる建築

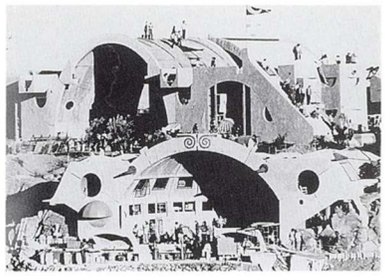
建築設計を志すきっかけになった建物は、香川県高松市内にある建物群であった。当時の県知事の考え方もあり、地方にしては有名建築家の建物が市内に散在していた。とりわけ高校のキャンパスからいつも見ていた丹下健三設計の香川県庁舎は、私にとって「建築」の原風景である。ガウディのサグラダ・ファミリア教会の造形は、それまで彫刻の三次元の美にあこがれていた私に、建築の魅力を教えてくれた作品である。

建築の美しさ、建築の技術、建築の様式など建築にかかわる事を教えてくれる作品はその後たくさん現れる。

建築が社会との関わりの中で、いろいろな制約を受けながら生まれてくるものであることを学ぶにつれ、制約を受けない道を選択したパオロ・ソレリの作品(アルコ・サンティ)と生き方は、組織設計の道を進んだものにとって刺激の強いものであった。

環境との調和に関して影響を受けたのは、エミリオ・アンバースのランドスケープと建築を一体に計画した作品(サンアントニオ植物園、ヴィラ・コルドバ)である。

建築の中に人の温かさを感じたのはケビン・ローチである。フォード財団、ナイツオブコロンバス、ユニオンカーバイド本社ビルなど彼の多くの作品は、それを利用する人達に満足していただけるよう真心を込めた設計をしている。DNタワー21(第一・農中ビル)


アルコ・サンティ(ソレリ)

で共同設計してわかった「人の暖かさを感じる建築」の重要さである。

### ⑵. 歴史は繰り返す

20世紀の建物といってもかなり幅がある。全体を通してみると「歴史は繰り返す」の感が強い。建築のブームは経済の発展に従って起こっている．経済の発展は商業主義偏重のブームを生み、建築関係のマスコミもその原理の中に組み込まれた。従って建築手法とか建築作品の傾向は、建物完成後、出来るだけ早い時期に確実に評価を受けるものの数が多くなり、建築作品の傾向も経済の大きなうねりの中に呑み込まれてしまった感がある。

20世紀末におこったバブル期の建築群は、本質的には19世紀に起こった「世紀末」、現象に似ている。社会の余ったエネルギーをあたかも「資源の消化作業」のようにやってきたように思える作品があまりに多い。

### ⑶. カレーズ

中国西部砂漠地帯の中にトルファンという町がある。町の市民は地下水を利用しながら生活すると共に、町の農作物や街路樹も地下水で灌漑する事によって緑を維持している。水は町の遙か何十キロ後方に聳える天山山脈から砂漠にしみこんだ地下水を「カレーズ」によって集めたものである。「カレーズ」は地下の水脈に沿って水平に手で掘り進んだ横穴と、20～30メートル毎に土砂の運び出しのために掘られた縦穴によって構成される。「カレーズ」は1500本、長さ延べ5000kmに及ぶ。表面には見えない、かすかな水資源を人間の英知によって上手に利用している。自然を壊さないようにしながら、快い自然を新たに作り上げている好事例である。

建築の設計も同じ考え方で進められないかと考えている。「限られた資源を有効に活用しながら、快適に安全に生活できるシェルター、環境づくり」を設計活動の軸としている。

限られた資源の有効活用として建物の保存、活用、リニューアルのように現在あるものの活用と共に、グローバルな視点で世界各地の資材、技術の活用をはかっている。建物を長寿命化する事やそうした寿命の中で合理的な建築設計を行うことも重要と考えている。

快適に安全に生活できるシェルターづくりとは五感（見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触る）に優しいものにすると共に、自然（風、水、土、光）を活用しながら地震、雷、火事等の災害から心身と財産を確実に守る建物を造ることだと考えている．

### ⑷. ロングレンジ

人々の生活は産業革命以来、飛躍的に生活が豊かになってきた。しかし、この「豊かな」といわれる生活の代償として地球環境を破壊してきたのも産業革命以来である。二律背反のこの現実を見ると、これからは産業を発展させること一辺倒で、生活を豊かにすることが出来ないのは自明の理である。建築も経済効率一辺倒の設計の進め方は止めなければならない。長いレンジ(50年、100年、あるいはもっと長く）と地球規模の視点をもって、人に優しい暖かい心遣いをした建物を一つでも多く造っていくことが重要だと思っている。

（ほりた　ただし）

# 建築家の新たな職能

本多友常

和歌山大学環境システム学科教授

### ⑴. 自然発生的建築

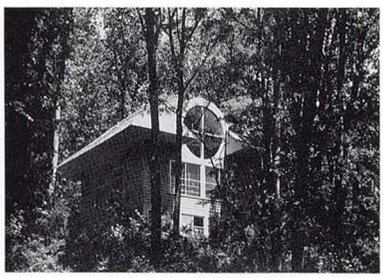
現代建築史だけが建築の歴史ではない。自然発生的な建築と呼ばれる世界の民家は、大昔からあったように思われているが、実はそれほど古くないものも多い。生活の本音と対応している（仮説でしかないが）はずの住居が、この20世紀において私たちの想像力を上回る環境を作り上げていることに、いつも心動かされてきた。

地球上で、神を持たない民族はいない。日本人は心の奥底では、宗教心に触れる心性を有している。しかし自分は神を持つことができなかったという空洞感が、心の裏のどこかに漂っている。振り返ると、建築世界にたいしても同じような認識パターンをもって捉えてきたように思う。20世紀以降の建築家とその作品を通して、多くの事を学び、それぞれに感動を受けた。しかし、特定の信奉すべき対象をもつこと自体に、懐疑的な思いが持ち上がってくる。世界の建築潮流の寄せては来る波の一過性に、知らずに影響を受けていることに対しては、むしろ警戒心を持つべきだと思っている。

### ⑵. 情報としての建築

20世紀の建築は、情報そのものであった。グローバルな視野に立たせてくれるフィールドであり、自分のおかれている時代と地域を確認するための「地」であった。激動する潮流に垣間見えるそれぞれのイズムやアイデアは、誘惑の磁力であるとともに、参照すべき対象として私の外部に存在し(それなりに功罪は別にして)、大いなるスプリングボードであったと思う。それは、社会にとっても同じ意味合いを持っていたはずであり、その事が、作品活動の動機を下支えしていたように思う。

しかしこの世紀末を迎え、予想していたとは言え、外部化されていたはずの出来事と、自分の作品活動との間に、電位差を失いつつ



タッカー・ハウス(ヴェンチューリ)

あることを感じている。これは個人の問題だけでなく、時代全体が自己参照化を加速させつつあるとも言える。しかし、その感性や思考法自体、あるいは20世紀が肥大化させた側面であり、一方にインターナショナリズムを据えつつ、創造性は個に属するという強迫観念を醸成したのも20世紀の時代性であったといえる。

**3. 創造性**

あらためて、個性という言葉が気になっている。ひねり出すようにして、個性を発見していくことも出来るし、語ることも可能だろう。しかし複数の個性が生み出す創造性というものがあるのではないか。これは組織論ではない。生命体として環境形成に向かうことは、原理的には個のレベルを超えた営みがあり、個々の創造力が出会った痕跡として、新たな可能性が開けることを待つ勇気が必要になると思っている。またその仕掛けが設計にとっての重要な要素になるのではないか。また、その内容においては、林業にリンクした生態系との関係において、自然との接し方について、様々なプロジェクトを通して試みていきたいと考えている。

**4. 建築家の新たな職能**

その点では、建築における時代の最先端はプレハブ住宅であるといえるかもしれない。建築家はそこに目を背けるべきではなく、介入していく努力をすべきだろう。また都市居住者の側も、高密度に居住することの意識改革が必要となる。

また、建築家は新たな職能として環境全体を配慮することが求められるようになる。いわば生態系、リサイクル、エネルギー消費に対しても見識をもつことが必須条件となってきており、場合によっては既得権に立ち向かう局面に対し、社会的なバックアップが保証される必要が増えてくるだろう。これを官庁の規制強化に振り向けてはならず、建築家のよき意味での権威として確立強化する方向を探るべきだろう。

(ほんだ　ともつね)

# 場所性の反映

三谷幸司

大林組本店建築設計部長

**1. コルビュジエの著作と作品群**
**建築の多様性と対立性ーロバート・ヴェンチューリ**

両者は近代建築を語る上で、視点を全く異にしながら相互に補い合っている。前者は近代建築の幕開けを、後者はいきすぎた近代建築の見直しの役割を果たしたと理解している。

**2. ポストモダン**

ポストモダンといわれる近代建築批判の動きは、行き過ぎた合理主義、機能主義に対する警告であろうか。

一方で飛躍的な技術革新、圧倒的な建築の力、建設のスピード時代の中で、建築がややもすると失いがちな自然や社会、文化に対する謙虚さを再び取り戻す必要性を痛感する。

**3. 場所性の反映**

グローバル化に伴い、建築の普遍性が進む中で、その建築の建つ場所性を的確に読み取り、設計に反映させることで、その建築の固有性をいかに際立たせるかに関心がある。

**4. 地球を枠組みとした設計**

有限な地球環境の中で、環境に与える負のインパクトを極力押えた省エネ、長寿命化といった建築づくりが不可欠となる。

(みたに　こうじ)

# 設計とは思想、主義、発見

三宗司郎

昭和設計代表取締役社長

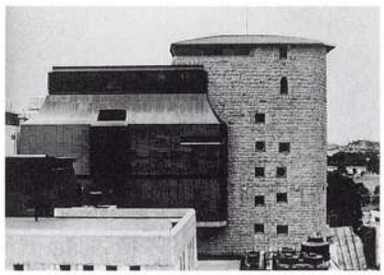
**1　思想・主義・発見**

1. フランク・ロイド・ライド —— タリアセン・ウエスト：有機的建築、自然環境とのマッチングの良さ。
2. ルイス・カーン —— キンベル美術館、ソーク・インスティテュート：明快な空間構成。
3. イェーロ・サーリネン —— 一連の作：プルアラル（多元的な）作風と力量。
4. I. K.ブルネル —— 一連の作品：アイデアに富む先見的な技術的発想の素晴らしさ。
5. B. M. フラー —— 一連の発明：技術の天才的ひらめき。
6. 鳥田家弘 —— 設計プロセス論：空間概念の捉え方とその操作性の明快さ。
7. 川口衞 —— 一連の構造的発想：柔軟かつ構成論としての本質的正しさ。

以上の方々から与えられた影響の結果、設計とは“思想であり、主義であり、発見である”という考え方に到ったと思っている。

**2　インターナショナルスタイルからの脱却**

20世紀は産業革命をふまえて、工業化の方向性の中で味けないインターナショナルスタイルという機能主義ベースの思想からの脱却


親和銀行本店(白井晟一)

努力の世紀であるし、かつまた、建築から実際的な都市デザインのスケールまで、日常的に行われるようになった世紀といえる。計画・設計という視点から捉えると“経済”の占めるウエイトが高くなり、結果的に事業企画というステップが重要になったはじめての時代といえる。同時に、“ハードからソフト”へ、そして“もの”から“こころ”への時代、すなわち“見え方”より“本質”を追求する時代に到達したといえる。それとともに“自然”の重要さ、“人間が自然の一環”であることの認識が芽生え出した時代といえる。その認識が計画・設計の中で具現化されつつあった時代であると捉えている。

### 3 プロジェクト・マネジメント

まず、環境問題と建築の関わりに注意し、地球環境の時代の中で建築の為すべき事柄を模索していきたいと思っている。例えば、建築のライフスタイルの捉え方、省エネルギー・エコロジカルデザイン、サスティナブルデザイン、緑化計画等々。次に建築を単に形を作るだけでなく、プロジェクト全体として捉えるプロジェクトマネジメントの視点を関心の中心においている。その中からCM(コンストラクションマネジメント)についても追求していきたい。そして内容については、建築と建築を取巻く状況の中で街づくり、村おこしに関心を持っている。設計方法論の中では、常に新しいコンセプト(そのプロジェクトに相応しいという意味)を打ち出すために、新しい展開と新しい発見を模索していきたい。

### 4 地球環境の時代

1. 地球環境の時代に相応しい建築。
2. 建築の表層のみを捉えることなく、本質的な内容を満たす方向性。
3. 建築のプロの間だけでなく、一般の人々に開かれたあり方。
4. 建築デザインのみでなく、企画とプロデュース機能をもつこと。
5. 改めて“公共”を中心に据える方向性。

「21世紀に向って如何なる方向を志向するか」という問いへの答えは簡単ではない。社会の動きが即ち建築の変化となる故に、未来当てゲームのように占うわけには行かない。私は20世紀に芽生えた思潮が、より発展的に結実しながら理想社会に向って、新しい問題提起をする時代が21世紀であると捉えたいし、建築もしかり、そうあって欲しいと思う。強きも、弱きも皆平等で、少数派を無視することなく、差別のない開かれた社会の中で、運命共同体のこの狭い愛しい地球環境を美しく守り育てていく、そういう国土、都市、建築の空間創りに励みたい。それは、建築家というプロ集団のサロン意識から抜け出し、旧来の建築概念にこだわることなく、人間として、世界へ、社会へ、責任を負った空間プロデューサーとして、より深い意味で“公共”概念を念頭において歩むべき時代であると思う。それ故、幅も奥行も深さも変化に富み、空間価値もより多様化し、計画、設計面においても、多元化の方向に向いていると考える。

(みつむね しろう)

# 芸術としての建築

山崎泰孝

A Z環境計画研究所

### 1 建築家と作品

ル・コルビュジエとその作品及びモデュロール、フランク・ロイド・ライトとブルース・ガフ及びその作品、ルイス・バラカンとリゴレッタ及びその作品、坂倉準三、丹下健三、西沢文隆とその作品、ニコラス・ペブスナーの「西洋建築史序説」(本)。

### 2 建築の機能・技術

物(もの)としての「建築の機能・技術」の学習。

### 3 建築の芸術性

建築の芸術性=人間の心の風景への影響について。

### 4 芸術としての建築

21世紀の新しい芸術・文化の創造に対し“力”のある「芸術としての建築」のあり方を考えてゆきたい。特に伝統=歴史的蓄積と地域性=地域の固有性に密着した芸術と文化との関係の中で——。

(やまざき やすたか)

# VAVAモダニズム

山田 元

鹿島関西支店設計部副部長

### 1 印象深い3つの建物

国立西洋近代美術館——大学3年が終った春、東京に見学旅行に出かけました。雪の朝2日酔いで上野に出かけて見た建物のイメージは今は何も残っていません。ただホールに入って立ち縮んでしまった記憶だけが鮮明に残っています。トップライト、吹抜け、彫刻群、空間の拡がり、これが建築家の創った空間かと……

親和銀行本店——商店街の一角に建つ建物は写真で知る圧倒的な力とはまるで異なったやさしい石の塊の様に見えました。営業室に入って印象は変わりました。石のボーダーと青い織物の壁、アールのついた石の幅木、格子模様の天井、大きな吹抜けの隅々にまで設


シュレーダー邸(リートフェルト)

計者の眼と手の跡が残っていました。今までの建築観とまるで異った空間がありました。

パンテオン——人の流れに逆って改修のための足場を通り抜けて入った空間にはひんやりとした空気が漂っていました。ただ内部の暗さになれていない眼に、天井の小さな開口から差し込んだ光の帯が薄暗がりのドームの空間を斜めに走り床に小さな光の輪を作っていました。その周りには天井を仰ぎ見ている見学者の姿がぼんやり浮んで見えます。神をも信じたくなる空間でした。

### 2 モダニズム

20世紀はモダニズムという美の形式が定着した時代のようです。モダニズムとは理性が見た美の形式と言えます。美は論じるより感じるものの様に思いますが、理性は生れ出た形(システム)に説明を求めます。合理性というより分かり易い根拠が必要となります。建築が好き嫌いを越えて、「芸術」という難解な部分とは異なる場でも議論されうるようになった、設計という行為が、建築家という大先生のブラックボックスから大衆の場へと引出されたとも言えます。

表相としてのモダニズムも確かにあります。手法が異なることに拠って表相も変化します。しかし表相には流行があり、移ろい易い表相はこの情報化された社会の中で変化を早めます。異った表相を求めて手法のアレンジが行われるのは当然の結果です。しかし、その基本的な考え方、方向性は誤っていない様に思われます。物には2面性があります。問題点を明らかにしていく方法もあるのでしょうが、私にはその中から大きくはずれられそうにありません。

### 3 居心地のよい建築

近年「形」を売りにしない建物を多く見かけます。厳格なフレームを持たない空間がいかにも心地良さそうに見えます。特有のおおらかさや曖昧さがすべてを包んでくれるとも思いませんし、心地良ければ良い建築かとの議論もありますが、その心地良さはどうしようもない魅力に思えます。設計とはゲームのようなものです。数学かもしれません。見事に解ければ気持ち良いものですがそれに酔っている訳にはいきません。もとより悪戦苦闘した跡が美しい訳でもありません。空間という言葉はもう古いのだそうです。確かにモノトーンに拡がる場はもはや空間とも呼べない様にも思われます。しかし「形」でもなく機能でもなくシステムでもない、ただ心地良い空間は建築家しか作りえないものです。「心地良さ」で建築が組み立てられるとも思いませんが評価することは可能です。初心に戻りたいと思っています。

### 4 よりオープンに

建築家は先を読むのが好きな人種のようですが、先々まで生き残る真実などそうはありません。さらばせめて時代の流れに乗り遅れまいと常に周りを見廻しているように見えます。今すべからく環境が叫ばれています。言葉を求められている現代の建築家は常に「神の言葉」を探して来ました。環境も「神の言葉」になりつつあるように思われます。もとより環境が大切な問題であることに異論はありませんが問答無用の「神の言葉」はもっともらしさの中に不合理を秘めています。建築設計は目標に合致した技術的裏付けのある形を提出することですが、同時に目標を生むための価値を創造する作業でもあります。「建築の99%は施主が決めます。私が決めるのは残りの1%です。」とは村野先生の言葉です。1%のアイデンティティの重要性が決して少なくなるとも思えません。合理的建築という方程式も変わるものでない以上、その1%を信じて社会によりオープンに、素直に、解り易い議論をすることが大切なことだと思います。

(やまだ　はじめ)

# モダニズムの熟成期

吉羽逸郎

アイ・エフ建築設計研究所

### 1. 影響を受けた建築家

自分の年齢とともに影響を受けた人がいます。もちろん受け続ける人もいます。近年の時点で選んでみました。

○アアルト

理論ではなく、人間の求めている精神、事、物に応答した自然流。

○ライト(タリアセン・ウエスト)

流れるような光と空間。

○リートフェルト(シュレーダー邸)

壁の構成、表現において、日本人の感性に通じる。

○バラガン

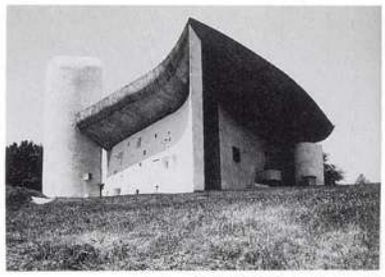
世界に通じる地域性に根ざしたアイデンティティー。

○村野藤吾

筋を通した中での自由な作風。

### 2. モダニズムの熟成期

西欧の合理主義に押し流された時代で、科学的といわれた分析的手法に基づく、理論やデザインがベースとなり、その組み合わせで部分も全体も構成されて来た。近年に至るまで東洋的思想が認められなかった。20世紀は、物質的な豊かさを与えたが、我々の持っていた大切なものを失わせた。モダニズムの熟成期でもあった。


ロンシャンの教会(コルビュジエ)

### ③. 時間の概念

時間の概念を建築に取り込むこと。速いスピードの時間を使うことから、ゆっくりとした時間を使う方への転換を建築においても考えねばならないと思います。エネルギー使用を少なくし、自然と共生することや、長い時間の中で建築を考えたり、ゆったりと時間を過ごせる空間を考えたり……。

### ④. 身体性の回復

多様性の混在を認めること、そのことが混乱ではなく、緩い統合へと向うこと。心を遊ばせる空間や装飾、ヒダのある空間、ヴァーチャルでなくリアリティーのある空間等の身体性の回復を目指すこと。 (よしば いつろう)

# アジア的発想の必要性

吉村篤一

奈良女子大学生活環境学部教授

### ① 建築家と建築作品

○ル・コルビュジエ——ロンシャンの教会(1954)／サボワ邸(1931)
○F. L. ライト——落水荘(1935)／ジョンソンワックスビル(1944)
○アルヴァ・アアルト——セイナッツァロの役場(1952)／カレー邸(1959)
○ルイス・カーン——リチャーズ研究所(1961)／キンベル美術館(1972)
○ルイス・バラガン——バラガン邸(1947)
○カルロ・スカルパ——カステルベッキオ美術館(1964)
○ヨルン・ウッツオン——シドニーオペラハウス(1973)
○レンゾ・ピアノ＋リチャード・ロジャース——ポンピドーセンター(1977)
○ノーマン・フォスター——香港上海銀行(1986)

時代精神や場所性の表現において優れており、つねに脳裏から離れない存在となっている建築である。

### ② モダニズムの限界

今世紀初頭のアールヌーボー、アールデコから始まり、近代合理主義の発展と共にモダニズムが開花し、良くも悪くも現代建築の礎を築いたといえる。しかしその花も80年代頃からしぼみはじめ、線香花火のようなポストモダニズムという徒花(あだばな)を咲かせながら世紀末へと移行し、多様性の海に漂っているかのようである。

このように見てくると、20世紀において、建築は合理性の追求によってモダニズムの限界が顕現した時代であったといえよう。

### ③ 人間と自然

多様性のなかで、人間と自然との関係を如何に空間として表現できるか。

### ④ アジア的発想

地球環境的に見ると今までは建築することが“善”であったが、21世紀は建築しないこと、または最小限につくることが“善”となるのではないか。また、21世紀はアジアの諸都市が注目されるだろう。(もうされ始めている)特に東南アジア、東アジア諸都市の多民族型、多宗教型のハイブリッドな都市空間が21世紀の都市・建築をリードしてゆく可能性を秘めている。わが国においてもアジア的発想が必要となるだろう。 (よしむら とくいち)

# アジアの瞑想性

渡辺豊和

渡辺豊和建築工房

### ① 山口文象

直接の師として山口文象の影響が大なのはいうまでもない。特にRIA時代になってからの「新制作座」は、当時の画一的な「近代主義」とは違い、劇団新制作座の特異性もあろうか、芸術集団としての共同幻想が建築に投影された傑作であった。社会主義リアリズムの退屈な表現に陥ることのない造形的にもレベルの高い共同的幻想表現体、または共同幻想空間であった。

世界レベルでは、一見陳腐ではあるがやはりコルビュジエに尽る。

### ② 滅びの予兆

一九六〇年代までの近代主義は否定的対象。

それ以後は自分自身の表現時期と重なるため自分自身以外のものは言及の対象にし難いが、あえて言うなら二十世紀は「滅びの予兆」として建築は構想されていたであろう。

### ③ 瀕死の都市風景

瀕死の都市風景を如何に救出するかと言うことか。

### ④ アジアの瞑想性

ルネッサンスから今世紀までのヨーロッパ主導の「人間中心主義」文明は崩壊し、人間の概念が異なる、新たな「人間主義」の文明が構築されるであろう。その軸をなすのが、東は日本から、西はイスタンブールまで広汎なアジアの「瞑想性」であり、これを建築空間化することこそ、21世紀の主題に違いない。 (わたなべ とよかず)

# 20世紀の建築は語られ、そして21世紀の建築は描かれたか

——アンケートのまとめに代えて——

佐藤不二男

編集委員・大阪大学大学院環境工学専攻助手

過去の歴史を振り返る時、100年という単位が果たして適切であるのか。例えば日本ではこの100年の間に、明治、大正、昭和、平成と4代も元号が代わる一方、大きな節目としては、第二次世界大戦の敗戦を境に、建築や都市の様相はそれ以前の50年とは比較にならないほど劇的な変貌を遂げた。その後、70年代の高度経済成長、80年代のバブル経済とその崩壊へ、と社会はめまぐるしく揺れ動き、ここ数年の高度情報化の動きは、過去数十年の変化に匹敵すると言われるくらいのスピードで猛進し、さらに加速度を強めながら一気に21世紀へなだれ込もうとしている。

建築はその社会や人々の心を映す鏡である、とも言われ、建築を語ることはある意味でその社会を語ることである。一方、建築のみでその社会のありようを語り、さらに予測することは、ややもすると一面的な見方に陥る危険性を孕んでいる。

このようなある種の矛盾や限界があることを知りつつ、あえて今、「20世紀の建築を総括して、21世紀の建築像を探る」というテーマを設定したのは、決して大上段に構えるのではなく、今世紀の建築デザインの果たした役割とその限界を素直に受けとめ、その教訓を次世紀の建築・都市デザインへ活かそうという謙虚で真摯な姿勢である。

20世紀の建築は何だったのか、という総体としての評価は別稿に譲り、ここでは実際の設計者ひとりひとりの言葉でどのように20世紀の建築を語りうるのか、いわば、個人の建築史の集積を通して20世紀の建築像を浮かび上がらせようという試みである。

このような試みに対し、主に関西で活動する43名の設計者の方々から果敢な回答が寄せられた。それぞれの年代、所属にも大きな幅があり、これらの回答から統計的な見方で一つの結論が集約されるはずもなく、むしろ、このような生きた意見の幅の拡がりこそが、20世紀そして21世紀の多様な建築像を端的に物語っている、とも言えよう。

とはいえ、このような大胆な矢を放った編集側の責任の一端を多少なりとも果たすため、若干の私見を重ねながら限られた紙面の中で寄せられた貴重な意見の解読を試みたい。

## 20世紀の建築とは

20世紀を既に過ぎ去りつつある過去と見るか、いやまさに現在そのもの（岸）と見るか、ひとつの大きな分かれ目であろうが、20世紀は、自由主義、合理主義、平等な市民社会、資本主義、大量消費、技術革新、などの時代であり、このような社会を背景にした建築は、ずばり近代建築（太田）と言われる。

産業革命によって生み出された新しい素材、構法、技術などによって、新しい社会に対応した空間を創造した(塚口)ことは論を持たないであろう。平等な場・消費される空間（池上）、それまでの建築や都市に比べ、はるかに便利で健康的な空間（高口）を実現し、普遍的な市民社会の空間像(新居)、などを提示したことは間違いない。

その結果、生まれたデザインの状況は、百花繚乱(浅井、上杉、岡田、佐野)、巨大な走馬灯（田中）としか言いようのない多様なスタイルの建築を生んだ。その大半は、19世紀末の歴史様式などに対して機能主義に基づく単純な形態として出発し、70年代のポストモダンの動きも一時はあったが、基本的には装飾を排した建築様式(小林一、久保）として定着し、資本主義を象徴する機械（遠藤）として、時には戦争をネガティブに支えながら(中村)、合理性と普遍性の世界的規模での様式化（上田）が行われた。まさに理性が見た美の世界（山田）の体現化である。このような建築の大衆化が極度に進んだ結果、建築の持つ祝祭的要素が後退し(遠松)、建築からポエティックな雰囲気が消え(瀬戸本)、都市や社会との関係が希薄になったという見方もできよう。

しかし、本当に20世紀の建築は市民社会に対して平等であり、人々を守り、心の豊かさを提供しえたのか。その答えは図らずも先の阪神・淡路大震災で露呈し、結局は資本主義の経済原理に基づく強者の論理が支配的ではなかったのか(西村)、といった率直な反省を生んだ。物理的には生活の豊かさが実現されたかのようにみえた一方、自然や伝統・文化に対する謙虚さを見失い、西欧の合理主義、機能主義に対してあまりに盲目的ではなかったのか(三谷、吉羽)、といった疑問も出され、20世紀の規範であった西欧の二元論的世界観（歌、柏木)、合理主義やモダニズムの限界（狩野、吉村）が指摘される。規範としての西洋の「建築なるもの」への信頼が解体された（加藤）とも言えよう。

その結果、建築の集積である都市や環境に対し、大いなる負の遺産を生み出したことも事実であろう。昨今指摘される様々な環境破壊（竹原）を生み、群としての建築の構成原理に対するストラテジーを欠いた（笹木）ため、今日の都市景観の混乱を招く結果となった。いや、むしろ、20世紀の建築はそのような環境破壊を押し進めた張本人ではないか(岡田、瀧)、といった厳しい指摘が必ずしも誇張した表現とは思われないのは、私たちの眼の前にある混乱した都市の様相である。その先に「滅びの予兆」としての建築（渡辺）を感じ取るのは果たして悲観的過ぎるであろうか。

## 21世紀の建築の主題は

21世紀は地球環境問題への対応（池上、金、小林一、寺地、新居、三谷、三宗）を重要課題として指摘する声は多い。この問題はライフスタイルのあり方などが複雑に絡み、決してハードな器としての建築だけで解決の有効な処方箋が見つかるわけではないが、果たして、サステイナブルデザイン(久保)、人にやさしい、自然にやさしい(岡田、堀田)、という綺麗な言葉を裏付けるどれほどの実行可能性のある具体的な提言が建築界から出しうるのか。

省エネルギー、リサイクル、長寿命化、など個別の課題に対しては今後の技術開発に期待する向きもあるが、大規模、超高層の建築は作らない（石井)、あるいは建築しないこと（または最小限につくる）が善となる（吉村)、といった、これまでの建築の経済活動一辺倒のスタンスを少しでもシフトさせよう（堀田）という指摘が社会に対してどれほどのリアリティを持ちうるか。まさに、建築家のよき意味での権威の確立（本多）が問われる時代である。いわば、このような地球環境問題への対応も含め、21世紀は社会のパラダイムそのものの問い直しが必要であろう。

これまでの二者択一的な西欧の二元的世界観、人間中心主義、合理主義ではなく、無に価値を見い出す非二元的価値観(柏木)、様々な考えや存在を許容する東洋的、アジア的な思想をベースに構築し（吉村、渡辺)、二元論的な単純な見方では解きえなかった都市や環境の複雑な課題に対し、むしろ、多様性の混在を認めながら（吉羽)、課題ごとに対応した多元的価値観（高口）をつくる、という考えである。その延長線上に描かれる一つのモデルは、ハイブリッドな様相を見せるアジアの諸都市である。

こうした背景には、その範を西欧に求めた日本の近代建築とそれまでの生活様式や伝統的空間との大きな断絶という矛盾が既に臨界点に達したという事実がある。モダンかポストモダンかという西欧的文脈の中で建築を語ることにそろそろ終止符を打ち、平たく言えば「現代のジャパニーズデザイン」（瀧）などについて地に足のついた議論がなされても良い時期ではないか。その意味で、西欧的モダニズムの手法と日本の伝統的空間性の表現との相剋に果敢に取り組んだ近代建築の黎明期を見直す（西村）という姿勢は、最近の初期モダニズムのイメージを彷彿とさせる透明感、開放感あふれる建築（小林恒）にその萌芽を見ることができる。今後のデジタル、ヴァーチャル社会への対応として、リアルな空間としての身体性の回復（貴志、吉羽)、自然に対する感性の覚醒(新居)、といった指摘もあるが、この身体性のある空間についてもこうした観点から今後深く議論される必要があろう。

これまでの様に目標や課題が明確な時代ならともかく、状況が複雑に絡み合ったこれからの建築の諸相を明快な主義や理論で解くには限界があろう。21世紀は、これまでに幾度となく繰り返された様々な流行に左右されることなく、建築のロマンティシズム(徳岡)、本源的な空間(中嶋)、芸術としての建築(山崎)、といった建築の本質を追及する姿勢も大切にしながら、人間が建築全てをコントロールするという強い主義主張ではなく、対話やコミュニケーションによる複数のまなざし(瀬戸本)、人が自然に建築をつくる(髙砂)、という柔らかな「静かな思考、弱い思考」が求められる時代であるかもしれない。

*　　*

今回のアンケートでは、各設計者に影響を与えた20世紀の建築についても語られている。ここに挙げられた数多くの建築家および建築作品は、20世紀を代表するデザインの動向というより、むしろ、それぞれの設計者と建築との出会い、感動、想い入れ、などが様々に重なりあった個々人の秘められた履歴であろう。

多くの設計者が言及したライト、コルビュジエ、ミース、カーン、アアルト、そして村野藤吾や丹下健三など、いわゆる20世紀の巨匠達とその作品は、20世紀の時代精神を体現化した原点として、あるいは、時代を超えた始源的、普遍的な空間として、今後も引き続き語られるであろう。しかし、私たちは彼等が獲得した地平にいつまでも留まっているわけにはいかない。

建築にはある意味で時代を先見する前衛性が求められる一方、時代に通底する普遍性があるのも事実である。歴史は繰り返す、と言われるが、単純さと豊穣さ、論理性と感性、世界的普遍性と地域性や伝統性、など、一見相反する概念そのものを包括しながら、デザインの針は両者の間を行きつ戻りつつ振れ続けてきたことを過去の建築は物語っている。

21世紀の針は果たしてどのような振れを見せるのか。残念ながら、時は昔ほど私たちにあまり猶予を与えてくれない。

ここに寄せられた多数の貴重な意見が21世紀の建築デザインを切り拓く重要な鍵となることを願うものである。(敬称略)

（さとう　ふじお）

# 素材と技術が生み出すdesign ゴム

## 雑貨から

板倉　満代　竹中工務店
Itakura　Mitsuyo



素材・技術の源流へ、Re－approachすることにより新たなる創造性にむかうことを企画するシリーズ第9回は、素材「ゴム」をとりあげる。

日常、実に幅広い使われ方をしているゴムだが、建築材料においては陽の目を見ない「縁の下の力持ち」的存在である。そんな凝り固まった概念に少しでも色づけできるよう、最近の雑貨事情を通してゴムの魅力的な建築素材としての可能性を探ってみたい。

（「素材と技術が生み出すdesign」幹事会）

最近の雑貨に共通な特長「透明：スケルトン」。雑貨に留まらず、日用品からウォークマン、衣服、携帯電話やコンピューターなどの情報機器まである。夏だけのキーワードとは限らなくなってきた。これらは、高強度のプラスチックやビニールや繊維の加工技術が、これまでの「隠す」という潜在的な抑圧からの開放が現代の人々の感覚にマッチしたあらわれと考える。

ところで、ゴムの分野においては、これまで合成ゴム製品として、タイヤや靴底、ウェットスーツ、建築関係では免震ゴム等など、ハードな条件下での飽くなき欲望に対する開発が進められてきた。補強材であるカーボンブラック（すす）が、もっと強く、もっと早く、もっと…という人間の欲望を満足させ、それ故に黒の衣装を脱ぐわけにはいかなかった。しかし、この分野においても透明化の波は押し寄せ、多様な特長を持つ透明ゴムが出現しつつある。

透明なゴム製品は、バスアクセサリー等、日用雑貨として街中に目に付くようになってきた。透明故に自在に色をつけることが可能となったそれらは、見た目だけでなく、手触りにおいても我々を楽しませてくれる。「ゴムの触感」と書いても伝わるまい。消しゴムの手触りを連想すべからず。今では「ラバータッチ」という表現まで世の中を闊歩しているのだから…。バックスキンのように滑らかで、ミクロな突起の集まりを持つそれは、温度さえも持っているかのようなマットな手触りのことをさす。しかし、これだけがゴムの手触りとは限らない。ゴムシートを作り出す過程の中で金型に細工をすることにより、ヘアライン状にも、布状にも、板状にも表面加工することができる。

このようにゴムの触感が作り出す奥深さは、また別の大切な責務を持つ。それは、人に優しい・安全であるということだ。











## 縁の下からお陽様の下へ

ゴムの歴史をたどってみると、その多様な性質が見えてくる。人類のゴム使用の痕跡は6世紀にさかのぼり、16世紀インディアンがゴムボールとして遊んでいたことが、17世紀同じくインディアンがゴムの樹液を衣服に塗り付けていたことや履き物として使用していたことが記録されている。18世紀になるとレインコートや消しゴムとして用途が拡大された。(ちなみにラバーrubberとはrub out：擦り消す、から派生したもの) しかしゴムの樹はアマゾン流域のジャングルにしか点在していなかったため19世紀に発明された加硫ゴム（硫黄、カーボンブラックとの化合物。弾性や耐久性が増した）は「黒い黄金」と呼ばれ珍重された。そして、植樹により生産が拡大した加硫ゴムは、19世紀後半自動車の発明により、タイヤとして自動車産業の担い手となって発展していった。

20世紀、天然ゴムの代用品として開発された合成ゴムは、多様な性質を持つ弾性物質を総称してこう呼ばれた。天然ゴムに負けずとも劣らないこの物性範囲は広く、戦後の石油化学工業の発展によって合成ゴムとプラスチックの類別が難しくなると同時に、ゴムを定義することも極めて困難になってきている。広義としての合成ゴムとプラスチックの違いは、常温にて弾性を持つものがゴム、塑性であるものがプラスチックと認識されてもいるようだ。

ここでは雑貨によくみられる弾性をもたないプラスチック製品よりも、弾性をもつが故に色を持たなかったゴムに注目してみた。なぜなら、ゴムの魅力は弾性にあり、建物は不動と決め付けている概念の中では不可能を可能にする唯一の材料と思われるからだ。

ゴムは、偉大なる功績にもかかわらず縁の下の力持ち的存在であり続けた。しかしゴムの多様な性質と世の中の流れに目を向けたならば、もっとちがった陽のあたる世界での活躍が見えてくる。透明な皮膜は、内と外との気配を伝え、見せたい・見られたいという人々の潜在的心理を突く。ソフトな触感は、人々に安心と安全を与え、柔軟な物性は、人々に夢を与える。



ゴム製品がガラス・プラスチックにかわり台頭してきている雑貨の世界において、割れない、人を傷付けないという特長がクローズアップされてくる。それは、ゴムの最大の特長「弾性」に寄るところが大きい。

弾性とは力による変形からもとの姿に戻ろうとする復元力のことをいい、いわゆる物質自身に固定した形を与えない。例えば、落としても割れないゴム製の花瓶（上の写真）は、花によってあるいはその日の気分によって姿を変えることができる。またファッション分野においては、人の動作、個性によってフォルムを自由自在に変化させることができるゴム素材のデザインが注目されたりしている（下の写真）。その商品に使われた「体との対話」というコンセプトを、そのまま建築分野に対応させることは可能かもしれない。いや、もっと欲張って、ゴムとは「人間と街と自然との対話」をコンセプトにあらゆる分野でデザインされうる素材、といいきってしまおう。

弾性



[座談会]

# Welcoming

## ファッション関係者に聞く

### ー建築とデザインー

——自己紹介及び今の仕事内容について。

**妹尾**　幼い頃から人形の服を作るのに夢中になっていて、服とは限らず布をいじっているのが楽しくて仕方がなかった思い出があり、デザイナーという職種になろうと思ってなったのではなく、服が好きで自分の服も作っているうちに自然に現在につながったという感じです。大阪モード学園ファッションデザイン学科を卒業して1993年、デザイナーの茅野正彦とともに「HICO IN PASSION, INC.」を設立。"HICO"というブランドでデビューし、その年に大阪コレクションの新人ステージに参加しました。「今を呼吸し、時代の生活・空間の感じるスタイルを創造融合する」ことがHICOのブランド・コンセプトですが、そのシーズンのテーマは「中世の光と石」でした。これは、写真で見たフランスのル・トロネ修道院、アーチの連続するロマネスク建築ですが、そこに差し込む光と影のうつろいに感動し、インスピレーションを得て、服として表現してみたくなったのです。美しいと自分が感じ、感じたものを表現する、それは新しい形やデザインを考えるとき、日常の生活で目にする雲や木の葉から美術や彫刻、建築まで興味のわくすべてのものを意識する感覚を大切にするようにしています。二人のデザイナーによって感覚を融合し一つのものを創造する形で仕事を進めていますが、もともと感性が近いこともあり、ディスカッションの積み重ねやスケッチのやりとりを繰り返すなかでイメージが共有でき、そこからまた新たな発見や驚きに出会い、そんな楽しさや新しいものへの探究心、これらは幼い頃から今にずっと続くものです。

**川嶋**　大阪コレクションは1987年、コシノヒロコ氏の提唱で始まったもので今年で12年目を迎えます。その年に関西ジャーナル社に入社して以来、同社が運営事務局を務める関係で本来の編集の仕事に加えて大阪コレクションを担当しています。繊維の町、大阪の活性化と若手デザイナーの発掘、育成を目的とする催しですが、財界や大阪府、大阪市などの官民一体主催のコレクションなので参加デザイナーには厳しい選考が行われます。また、業界向けの招待方式とは異なりチケット販売方式で誰でも見ることができるぶん、熱気のあるショーとなります。回を重ねるごとに海外での評価も高まり、昨年はベルギー、フランス、オランダから計4名が参加を果しています。新人部門は、今や大阪でデビューし、そこから世界に羽ばたくという登竜門的存在になり、インキュベーション機能を果しています。またここ数年、若手デザイナーたちが南船場に店舗やアトリエを開設する動きがあります。かつて若者文化の発信地であったアメリカ村が全国から修学旅行生らが集まるような観光地化してしまったことで新たに隣接する地域に移動しているのですが、これに伴いトレンディーゾーンが面として広がり、街の活性化をリードしている。この動きは南堀江や新町にまで広がろうとしているそうです。こうなるとまさにファッションが街を変える、大阪コレクションが大阪の活性化につながった、というところでしょうか。実際のところ、南船場あたりには今まで見られなかったおしゃれな若者が闊歩していたり、古いビル群の間にレストランや店舗が目立ってきたりしています。




有能な新人を次々輩出してきた大阪コレクション
（写真はHICOの作品）

**妹尾**　デザイナーはコレクションを発表することでより多くの反響や刺激をダイレクトに受けることが出来、また、新しいテーマや形に挑戦することにより意欲をかりたてられるものです。そういう発表の場を大阪コレクションが提供して下さっています。

**川嶋**　もともと「壁」＝「既成の概念」を壊すのが関西のパワー。大阪コレクションは既成のコレクションとは方式が異なるし、私達運営サイドやデザイナー側も既存のビジネスライクな取り組みではないぶん、観客に伝わるものがあります。大阪コレクションを経て生き残っているデザイナーも独自性を持った人、つまり「壁」を打破して生き残っていると言えるのでは、と思います。

——ところでファッションと生活のイメージをお聞かせください。

**妹尾**　ファッションと生活を個々で考えるのではなく生活すらもファッションの一部であり、また、ファッションとしてだけのスタイルを意識しているのではなく空間での一部として融合していることが自然だと私は思います。これは会社のコンセプトでもあるのですが、そういう意味では椅子などインテリアはとっても興味があります。"感覚にマッチする"ということ、これはデザイナーに限らず一般の消費者にとっても大切なことで、身の回りには好きなものを置きたいし、以前ならそれは憧れだけに終わっていたことが今は手に届く時代だと思うのです。それだけに選択もとっても厳しいです。また、デザイナーは夢を与える仕事と言えますが、消費者自身も夢を見るのがうまくなっているし、願望をストレートに表現する様になってきているという印象があります。私達のデザインも今の生活形態をエイジ（年齢）で分けたりするのではなく、年齢を越えたスタイリング＝"感覚がマッチする"人が自然に集まってくれればいいと考えています。

**川嶋**　実際のところ、あのデザイナーの服なら何でも着たい、そしてコレクションの当日には、そのデザイナーのファッションで身を



川嶋みほ子

㈱関西ジャーナル社 取締役社長室長

1959年大阪生まれ。同志社大学英文学科卒業後、貿易関連の会社を経て、1987年、関西ジャーナル社に入社。イベント企画運営を中心に、新聞・書籍の編集などに携わる。同社が運営事務局を務める関西最大のファッションショー「大阪コレクション」（主催・大阪コレクション開催委員会）には、第1回（'87年11月）から参画、事業運営や国内・海外デザイナーのケアなどを含む事務全般を担当してきた。



妹尾裕恵

HICO デザイナー／HICO IN PASSION, INC. 取締役

大阪モード学園ファッションデザイン学科在学中、エールフランス主催のファッションクリエーター新人賞、国際コンクール佳作入賞、日本ファッションデザインコンクール他、多数入賞。卒業後、1993年ファッションテザイナーの茅野正彦と「HICO IN PASSION, INC.」を設立、同年「HICO」ブランド・デビューとともに、1994年S&S大阪コレクション新人ステージに参加。'94年4月より東京コレクションに参加し、辰野㈱とオフィスウェア・ブランド（ライセンス契約）の「VENUSOL」を手掛ける。1997年セカンドブランド「ma-qui-a」を発表。現在、メンズウェア・靴・バック等を展開予定。

企画／会員企画小委員会
Director/MASAKO. TSUKAGUCHI
1998年6月8日　於本会会議室

W

固めて家を出るという若者も大勢います。提案されたライフスタイルすべてを含めて共感しているし、さらにはデザイナーを表現者として自分達のカリスマとして見ている部分もあるようです。ファッションというのは南船場の例もあるように、特に若い人達に影響を与えるパワーを持つものだと思いますが、その若者が生活空間や街の空気を変えているのです。一方、私自身、職業意識や勉強のために大阪コレクションのデザイナーの服を実際に着てみることがありますが、素敵なデザインと思っても着ると妙に窮屈に感じるものや逆に気持ち良く着られるものもあります。新しいものを提案するのがデザイナーの仕事ですが、既成概念を取っ払って新しいトレンドを発信、リードする傍らこうした着心地への配慮や着ていて楽しくワクワクする気分を引き出してくれる、そういうデザイナーが根強いファンを引きつけていると思います。

**妹尾**　HICOは年に2～3回展示会を開いています。多くは専門店・百貨店のバイヤーが気に入って買って下さいますが、ダイレクトに消費者への販売が出来、生の声が聞ける直営店を持ちたいと力を入れています。着心地や着て楽しい気分などの反応を直接得られるのは、何にもまさり励みになりうれしいことです。

――建築についてどのようにお考えでしょうか。

**川嶋**　ファッションに、優れたデザインでも着心地がいまひとつ、というのがあるように建築にも、最新の設備や素晴らしい設計と言われる建物に入って、何だか落ち着かなかったり、冷たさを感じた経験は誰にでもあると思います。建物を訪れる人やそこで働く人、そして住む人がリッチな気分を味わいながら違和感なく過ごせる、優しさと温もりを肌で感じられるような提案をしていただければと思っています。ファッションと同じで新しいものを取り入れながら、人の心に潜在する次なるニーズを具体化して示してくれる、バランスよく次のステップを感じさせてくれる、これもクリエイターとして求められることだと感じます。

**妹尾**　ファッションの背景に「建築」というものがあるとするならその建築物にもまた、背景があるのではないでしょうか。建物と言えば、頭に浮かぶシーンがあります。スペインのモンテフリーオという土地ですが、建物全部が白い、まさに集落で空が真っ青、人の服は皆、黒一色というシーンです。これが妙に印象的で、そのせいか"HICO"の服は修道女っぽいと言われることもあります。そんなシーンに象徴されるように、建物だけが目立つというのではなく、かと言って風景に溶け込むというのでもなく、調和しながら独自性を表現するようなそんな建築のイメージがあります。ファッションもそうですが、"周囲を尊重しながら個性を感じる"ということでしょうか。今思うに、私達は気が多い性もありますが、ファッションに限らずジャンルを問わずいろんなものに興味を抱くことは、物創りを行う上で、とても大切なことのように思います。様々な分野を大きな視野で見ていただければと思います。そして、建築家その人の個性や人間性をも全面に出していただければ、よりその人の作品に興味を持ち、楽しみと期待が広がる様な気がします。



オリエンタルをイメージにドラゴンのプリントをあしらった重ね着のドレス
（HICO S/S コレクションより）

**川嶋**　活気づかせるのは"スター性"ということでしょうか。古い話で恐縮ですが、かつてピエール・カルダンが種々の事業で大成功していたころ、世界中から大勢のデザイナーが彼に憧れて弟子入りし、また巣立って行ったという話を聞いたことがあります。スターがいれば、そこに若い人が集まり、活性化するのではないかと思います。新人育成をひとつの目的にした事業に関わってきて痛切に思うのは、才能のある若い人達が育つには、その作品や人物自身に憧れて目標にできるリーダーが必要だということです。建築家というと、クリエイター、アーティストというイメージはありますが、この"スター性"というのもキーワードのひとつかもしれません。

# 改正建築基準法の実効性を確保するために

炭崎　勉
京都市都市計画局建築指導部指導課



6月12日に公布された改正建築基準法は、国際化、規制緩和、行政改革、地方分権などの社会的要請に対応しつつ、制定以来およそ半世紀を経た基準法の枠組みを抜本的に変えるものである。

改正のポイントは、建築確認・検査の民間開放、中間検査制度の創設、性能規定化、そして連担建築物設計制度の創設と接道特例の許可化などであるが、これらの改正内容を実効あるものとするため、行政庁側の運用と建築業界の対応が、今まさに問われている。

## 中間検査の実施による安全性確保と違反防止

阪神・淡路大震災を契機として建築物の安全性が注目されたことを受け、建築物の施工段階で基準に適合しているかどうかをチェックし、安全で適法な建築ストックをつくり出すことに、中間検査制度の目的がある。

検査を必要とする工程（特定工程）とそれに続く工程（後続工程）は、特定行政庁が区域、期間、構造、用途及び規模を限定した形で指定するため、各行政庁の考え方を反映させることができる。たとえば、木造3階建て住宅の違反が多い地区を重点的に指定し、一定期間内で違反防止に成果を上げるといったことも考えられる。

## 民間確認・検査機関の活用

中間検査は、その対象に何を指定するかで行政庁の主体性が問われることになる一方で、増加する業務量に見合う人員確保が難しいという側面もある。行政改革の流れの中で行政の組織もスリム化が求められていることから、いずれの行政庁にとっても大きな課題となっている。

その対応策の一つとして、民間確認・検査機関の早期立ち上げによりある程度の業務をカバーしてもらうことが欠かせない。当面、民間サイドで自発的に設立されるケースは稀であろうから、行政側から民間団体等に積極的に働きかけて、設立を支援する必要がある。

## 確認重視から検査重視へ

着工前の設計図書の審査と竣工後の完了検査という現行のシステムにあって、入口に当たる確認はほぼ100%申請されるが、出口に当たる完了検査は、全国平均で約35%に過ぎないという実態がある。つまり、申請の65%は、検査を受けないため、申請どおり建てられているかどうかがわからない。にもかかわらず、行政は書類が合っているかどうかを細かくチェックすることに労力を使いすぎている嫌いがある。

中間検査の実施に向けて、これまでの確認段階の審査のやり方を簡素化する方向で再点検することも必要である。民間機関の活用と併せて、行政の内部努力により、検査に充てる労力を生み出すべきであろう。

確認が完璧であっても、実際に建つ建築物が適法でなければ、結果として法の実効性は確保されない。建築基準法が「ざる法」という汚名を返上するには、今回の改正を受けて、それぞれの行政庁が確認から検査へ重点をシフトさせる体制づくりを行う必要がある。

## 工事監理の充実

たいていの建築主は、設計や施工という概念は理解しているが、工事監理についてはほとんど認識していない。下手をすると、竣工後に見つかった不具合も行政の責任であると、誤解されることすらある。工事監理が建築物の質を大きく左右するにもかかわらず、しっかりと機能していないため、中間検査が制度化されたともいえる。

今後、中間検査が通らなければ、工事がストップされ、建築主は、損害を被ることになりかねない。そういうことを防止する意味からも、工事監理の重要性が社会的に認知される必要がある。これには、行政による啓発だけでなく、建築関係団体との協力・連携が不可欠である。

違反事例は、ほとんどが申請段階で工事監理者未定とされ、設計者は工事に関与していないケースが多い。施工者が、建築主から工事を請負い、設計者は確認だけを代理申請するというパターンが一般的であるが、これを設計及び工事監理優先の仕組みへと変えていく努力を建築士には期待したい。

工事監理がきちんと行われることが浸透すれば、中間検査は必要のないものとなるのであるから。

## 台帳整備とその活用

今回の改正では、特定行政庁は、建築物に関する台帳を整備することが義務付けられ、誰でも閲覧できる制度が用意された。閲覧内容は、建築主、設計者、施工者、建築物概要、確認年月日・番号、中間検査年月日・監理者、完了検査年月日・監理者などである。これ自体は従来の概要書情報を拡大する程度で、大きな変更ではない。

しかし、今後、不動産の売買に際して、確認の有無に加えて、中間検査や完了検査の有無もその評価に影響するというシステムが市場側に作られ、消費者が、敷地や建築物の大きさだけを判断基準とするのではなく、建築物の安全性や適法性にも着目することになれば、台帳の閲覧制度が有効なものとなる。

制度のねらいとして、市場の原理が適法でない建築物を自ら排除する仕組みが期待されているわけである。具体的には、検査済証のメリットを基準法とは別の側面でつくること、たとえば、済証がないと融資が受けられない、あるいは、火災保険の料率に影響するといったことが、今後の検討課題といえる。

## 要綱等の条例化

確認・検査の民間開放に伴い、これまで建築主事の判断とされていた接道義務の特例等が特定行政庁の許可とされた。中高層建築物や共同住宅などに関する指導要綱等も、従来は確認と併せて行政指導として行われたが、民間確認ではそれができないため、主なものは条例化することが各行政庁で検討されている。

*

現在、それぞれの行政庁が、改正法の施行に向けて準備を進めており、並行して、近畿では工事監理者の徹底や中間検査について統一した運用により高い効果を上げるべく、行政庁間で議論をすると同時に、関係団体との協議を始めたところである。

今回の法律改正を実効性あるものとするため、法の運用や体制づくりなど行政庁に課せられた課題は大きいが、これに加えて、建築業界の努力と市民の意識改革がうまくかみ合ってこそ、その効果は期待できると考えている。（すみさき　つとむ）

# 超音波でコンクリートの強さを調べる

吉荒俊克
非破壊検査㈱安全工学研究所副所長

## コンクリート構造物の非破壊評価の必要性

構造物が安全か否かを評価するためには、どの程度の強度を持っているか、設計耐震強度を満足しているか、ということを定量的に求めることが必要となる。

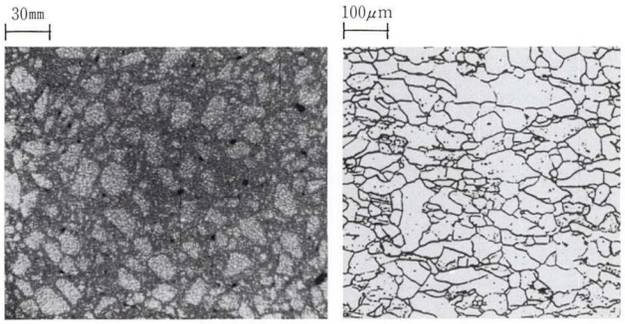
コンクリート構造物は、われわれの生活に最も身近なありふれたものと言えるが、それらがひとたび崩壊すると多くの人命が奪われる可能性があるにもかかわらず、健全性診断技術は整備されておらず、しかも実用性も乏しい。これは、“コンクリート構造物は壊れない”との安全神話が広く浸透していたことによる。阪神・淡路大震災においては、設計強度を超える応力が作用して倒壊したものが多数あるが、設計強度以下の作用応力であったにもかかわらず、それに耐えられなかったケースのあることも指摘されている。

“安全とは限らない”コンクリート構造物の安全性を担保するには、構造物の各部位の強度を非破壊的に評価し、構造物の耐震性能を定量的に把握することが必要で、それが社会的な要請であろう。

## 超音波で何が分かるか

金属材料では、超音波による物性評価研究が進んでおり、超音波伝播特性をもとにミクロンオーダのボイド、転位、析出物の状況、結晶粒径等の微細組織を把握できるようになってきている。鉄鋼材料のような多結晶体では、これら微細組織の状態が分かれば強度を推定することができる。

コンクリートでは、水とセメントが混合して固化したセメントペーストを母相（マトリックス）として、その中に1㎜以下のものから数十㎜のものまで大小さまざまの寸法の骨材（砂利あるいは岩を砕いた砕石）、気泡（ボイド）等が散乱体として存在しており、超音波による精度の高い測定は困難と言われてきた。**図1**は、コンクリート及び鉄鋼材料の断面を示したものである。コンクリート中の散乱体の大きさは、標準的な鉄鋼材料の結晶粒（超音波の目から見ると散乱体である）の大きさの数十倍～数百倍であるものの、散乱体の大きさのバラツキの程度では鉄鋼材料と同等であると見做せる。

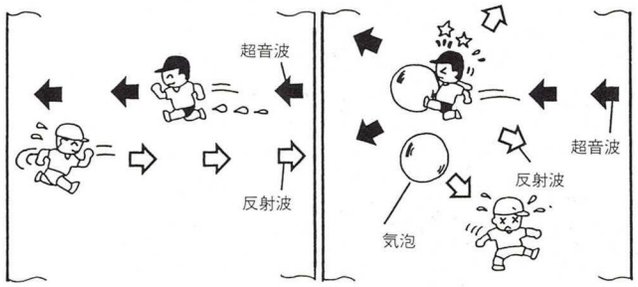



X線CTによるコンクリート試験体の断面像　　再結晶を完了した極軟鋼

**図1　コンクリート及び鉄鋼の組織写真**

このことは、散乱体の大きさに合わせて超音波の波長を適切に選べば、すなわち金属材料で適用されている周波数、数MHz～数十MHzの超音波の波長をコンクリート組織のスケールに合わせると、コンクリート材料では数十kHz～数百kHzの超音波を適用することにより、金属材料で研究が進められている物性評価技術を応用し、コンクリート中の組織（水セメント比、骨材配合、マイクロクラック等）を知ることができることになる。

材料中に入射した超音波は、材料中を伝播する間に材料中の組織（コンクリート材料では、骨材、気泡等）との相互作用によって、散乱、減衰、速度分散等を生ずる。**図2**は、材料中での超音波伝播の様子を模式的に示したものである。




散乱体が少ない場合　　散乱体が多い場合

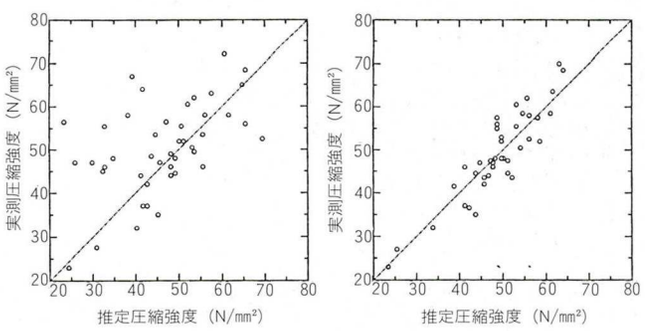
**図2　材料中の超音波伝播の様子**

散乱、減衰の程度は、組織の状態によって特有のものとなり、これを解析することによって“材料の内部を覗く”ことが可能となる。超音波信号から観測される情報は、超音波の音速、信号振幅の変化、並びに超音波信号の周波数スペクトラムの変化等である。コンクリート材料においても、これら超音波情報をもとに、水セメント比、骨材配合等の組織状態を材料を破壊せずに推定することができると考えられる。

いずれの材料でも、組織は強度と密接な関係がある。コンクリート材料では、水セメント比、骨材界面の剥離、セメントペースト中クラック等が強度への影響因子となる。強度を支配する組織因子の状態を超音波で推定することにより、コンクリート強度を非破壊的に高い精度で推定することが可能となる。

## 超音波によるコンクリート圧縮強度測定

コンクリート強度評価に対する上記の基本的な考え方に基づいた、著者らの試験結果を**図3**に示す。




従来法　　新手法

**図3　超音波によるコンクリート圧縮強度測定結果例**

ここでは種々配合のφ150㎜×300㎜ JIS規定コアサンプル形状の試験体を対象に、コンクリート中を伝播した超音波の音速、減衰特性、周波数スペクトラム特性をもとに求めたコンクリート配合の個々の情報より、圧縮強度を推定した結果を示している。比較しているのは従来式音速測定法による結果であり、従来法に比べ精度が大きく向上している。

（よしあら　としかつ）

# ビルの上に建つ観覧車の設備

中野渡晴夫　井上雅庸
㈱竹中工務店　〃



このプロジェクトは「都心に遊園地がほしい」という若者の声を反映させた、観覧車と建物とが一体となったアミューズメント性の高い複合商業施設である。都心で観覧車に乗るという新しい楽しみの創出と、若い人たちを中心に幅広い層を対象にした時代の先端を行くファッション小売店舗の集積が相乗効果を生み、より高い集客性をもたらすことを狙っている。

本計画地は、大阪の北の玄関口である梅田の中心地に位置し、計画地周辺には商業施設が集積し、若者たちでにぎわっている。建物は、地下1階から地上6階までが物販店舗、7階及び5・6階の一部が飲食店舗、地下2階及び8・9階がアミューズメント施設という構成になっており、また8階の南棟には約200名収容のイベントホールを内包する。本計画の最大の特徴である直径75mの大観覧車には、7階に設けられたプラットホームから乗ることができる。観覧車の最高部の高さは地上約106mに達し、ゴンドラの中から大阪の都心部を一望できる。

## ビルの上に建つ観覧車

**写真1**に示すように、高層ビルの上に大規模な観覧車が設置されることは、これまで世界でも例がない。構造的にも建物と同等の耐震・耐風安全性を確保するとともに、さらに乗客の安全性向上のため、52台のゴンドラそれぞれにパッシブ型制振装置を設置している。

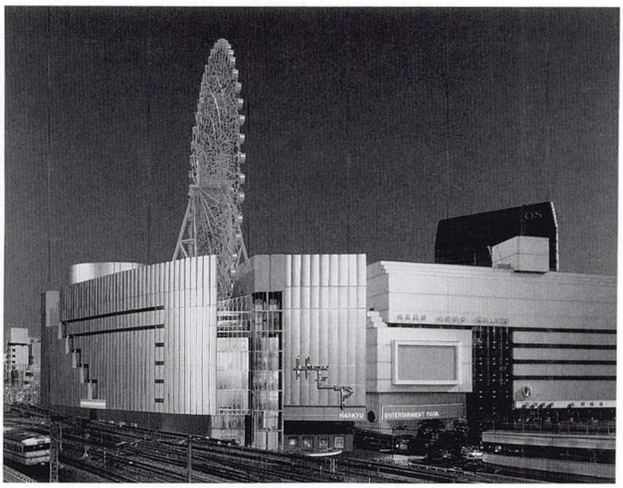


写真1　完成予想写真

また、大地震時にも観覧車の駆動タイヤが駆動レールから外れないように、駆動装置に追随機構を設けている。

その他の安全装置としては、乗降時のゴンドラの振れ防止用ダンパーとゴンドラの扉のラッチの開閉状態を検知し、「開」の状態で検知部を通過すると警報の発報及びゴンドラの停止をさせる設備を具備している。

## 観覧車の設備

観覧車は油圧により駆動される。ビル7階の機械室に設置した油圧ポンプの電動機動力が油圧に変換され、各油圧制御機器を経由したのち駆動装置部にある油圧モータを作動させる。駆動装置は油圧モータの出力をローラーチェーンを介し、スプロケット歯数比による減速機構を経てタイヤを駆動させる。

また、回転輪やゴンドラ内への電源の供給は、中心軸部と回転輪アーム部に設けた2箇所のスリップリングを介して行う。

**写真2**に、ゴンドラの取り付け前の写真を示す。ゴンドラ定員は4人で、外径2.25m、幅1.20mとゆったりとした空間を確保している。ゴンドラには照明、BGM放送、及び冷暖房設備を装備している。

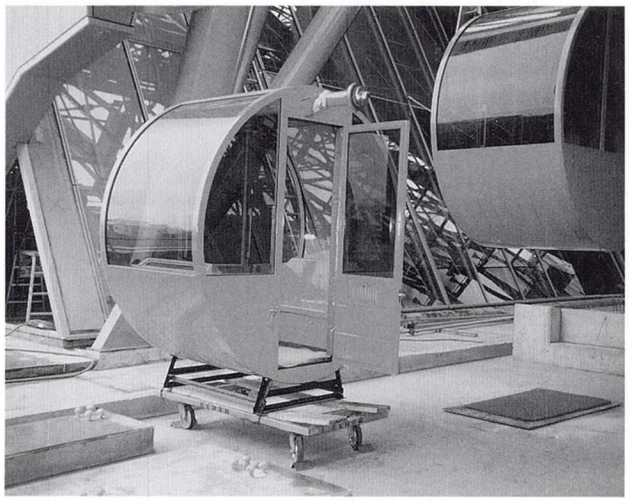


写真2　取り付け前のゴンドラ

なお、常設の観覧車としては冷房設備の設置は初めてである。

一方、防災設備としては非常電源、非常照明、非常放送、及び消火器を設置している。非常電源は、ビル用防災発電機と観覧車専用発電機により二重化を図り、乗客の安全性を高めている。

## ゴンドラの冷暖房設備

ゴンドラの冷房は、**図1**に示すように座席背後及び下部に設置する空冷の冷専エアコンにより行っている。このエアコンは、限られたスペースの中に収納するため、今回の観覧車専用に設計した。左右それぞれの座席背後及び下部に0.75馬力相当のエアコンを設置し、冷風を座席背もたれ上部より吹き出し、座席足元より吸い込むことによってゴンドラ内全体を循環させている。また、暖房は座席背もたれ裏とシート裏、及び床パネル裏に取り付けたロードヒータによる暖房方式としている。設計条件は、冷房時にはゴンドラ内で27℃（外気温度36℃、湿度53%）、暖房時には座席表面で36℃（外気温度0℃、湿度50%）とした。

エアコンの温度制御は還気側に取り付けたサーモスタットによる圧縮機のオン／オフで行っている。また、ヒータは自己制御型のものを採用し、サーモスタットは使用していない。

換気は3種換気とし、座席下部に設置した排気ファンにより常時排気し、扉の給気口から新鮮外気を取り入れる。

●観覧車冷暖房能力

冷房　0.75HP×2基（1ゴンドラ当たり）
　　3,700kcal／H（JIS）（1ゴンドラ当たり）

暖房　1 Φ−200V
　　座席部　160W×2本
　　背もたれ部　275W×2本
　　床部　325W×1本　計　1,200W

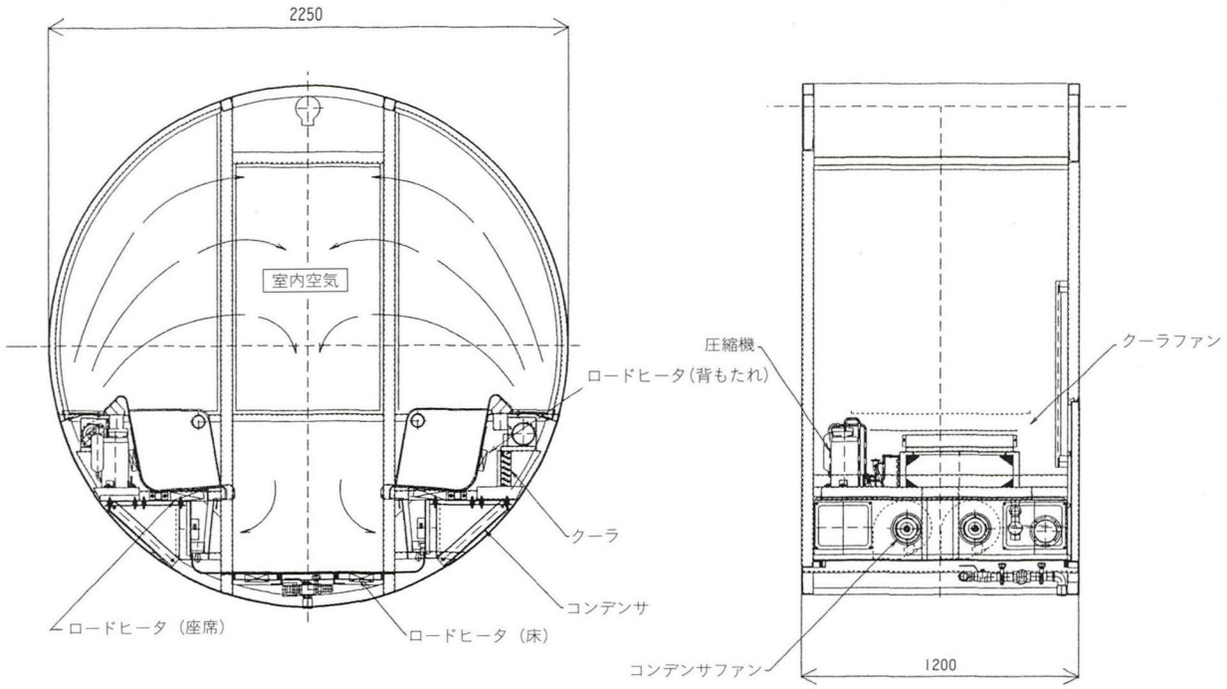



**図1　ゴンドラの冷暖房設備**

エアコンのドレン排水は、発生したドレン水を周回分貯め、ゴンドラがプラットホーム上に帰着したときに排水する方法をとった。これには、**図2**に示すようにゴンドラ下部のリミットスイッチにより、ゴンドラがプラットホーム上に戻ってきたことを検知し、その信号により配管経路終端に設けた電動バルブを開閉させるシステムを導入した。これにより観覧車の回転中、ドレン水を上空へ飛散させないようにしている。

エアコン使用時のゴンドラ内の騒音レベルについても、一般乗用車並みのレベルを確保している。

*

以上紹介させていただいた観覧車冷暖房設備は、株式会社サノヤス・ヒシノ・明昌、ダイキンプラント株式会社の両社との共同で開発したことを付け加えておきたい。

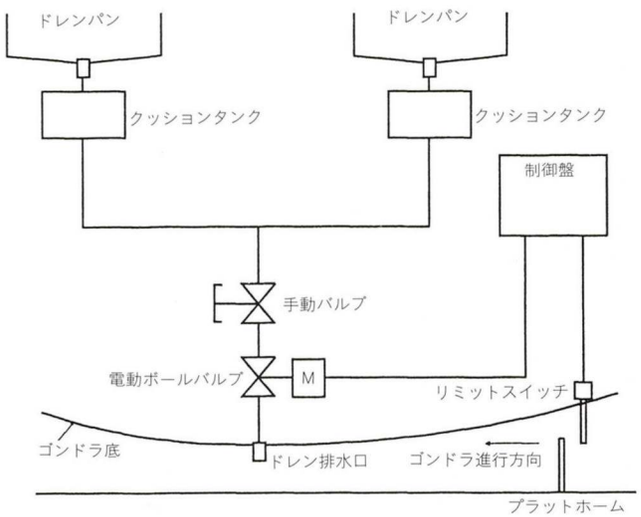



**図2　ドレン排水システム図**

**●建築概要**

建 築 地　大阪市北区角田町
建 築 主　阪急不動産株式会社、株式会社 阪急ファイブ
設　　計　株式会社 竹中工務店
施　　工　竹中工務店・大林組・森組　建設共同企業体
延 面 積　52,755㎡
構　　造　S，RC，SRC／B3、F10、P1
工　　期　'96.6～'98.11（予定）

**●観覧車概要**

直　　径　75m
高　　さ　GL＋105.7m
ゴンドラ　52台（定員4名、最大4名×52台＝208名）
総 重 量　606.4t（中心軸重量56t）
駆動方式　油圧駆動
原 動 機　交流誘導電動機 45kW
乗 り 場　7階
周回時間　約15分
設　　計　株式会社 竹中工務店・株式会社 サノヤス・ヒシノ・明昌
施　　工　竹中工務店・大林組・森組 建設共同企業体
　　株式会社 サノヤス・ヒシノ・明昌

（なかのわたり　はれお、いのうえ　まさのぶ）

# コードレス押ボタンスイッチシステム

岡田敏夫
東洋シヤッター㈱取締役企画室長



## 使いやすさと安全性の向上をめざして

現在、建築業界では、バリアフリー対応商品に代表されるように便利性、安全性の追求が大きなテーマとなっています。
業種は異なりますが、自動車の場合、ドアロックにキーレスエントリーシステム、さらに安全性を高めるABS（アンチロック・ブレーキング・システム）、エアバッグが標準装備されるようになってきました。
キーレスエントリーシステムの他にも、テレビ・エアコン・電話など、日常生活をとりまく電気製品のコードレス化が進んでいます。

このたび、東洋シヤッターが開発・発売した『CLPシステム』は、従来の3点押ボタンスイッチ（有線式）に代わり、コードレスの押ボタン送信機（無線式）により電動シャッターの開閉を行う≪コードレス操作≫とシャッターによる挟まれ事故を未然に防ぐ≪障害物感知機能≫を一体化した便利で安全なシャッター操作システムです。
また、すべての操作スイッチをコードレス化したことにより、施工面においても、従来のスイッチボックス及びその埋め込み作業とそれに伴う配管・配線工事が不要となり、現場施工の簡略化と建築コストの削減が可能となります。

## 特徴

**便利な≪コードレス操作≫**

コンパクトなコードレスリモコンである3点押ボタン送信機（縦80×横35×高さ12㎜）を2台標準装備しているので、手持ち操作と固定操作の両方が可能です。
『CLPシステム』で使用する電波の周波数は、自動車用キーレスエントリーシステムで実績のある信頼性の高い周波数帯を選定しています。このため、アンテナを送信位置から見通しのよい場所に設置していれば〈受信しない〉〈受信距離が短い〉等の不作動が発生することは、まずありません。また、誤作動対策として、多くのデータを送信し、判断ミスを起こさない誤り検出方法（CRC方式）を採用。これはパソコンのイーサネット等の有線LANにも採用されている優秀な検出方式で、誤作動を起こさない信頼できる方式と言えます。（誤作動の確立は通常条件下で1兆分の1）

**安全な≪障害物感知機能≫**

シャッターが降下中に障害物などに接触すると、自動的に反転上昇して停止し、挟まれ事故やシャッターの損壊を未然に防ぎます。

**安心の≪緊急開放機能≫**

〈リモコンがない〉などの緊急時でも、シャッターを開放することのできる≪緊急開放機能≫を備えています。

**施工の簡略化**

従来の電動シャッター施工に伴う配管・配線工事やスイッチボックスの埋め込みが不要になります。コードレスなので送信機などの設置が容易で、システム自体を既設シャッターに取り付けることもできます。従来品の場合、施工前にスイッチボックスの位置を決め、配管・配線工事を行うので、実際に使い勝手が悪くても、容易に移動することはできませんでした。
しかし、『CLPシステム』の3点押ボタン送信機、テンキー送信機は、配管・配線工事が不要で、しかも設置はシャッター施工後ですので、取付場所を選びません。また、コードレスなので、使い勝手により簡単に移動することもできます。

## 仕様（構成部材）

**受信機　1台**

3点押ボタン送信機からの無線電波及び座板スイッチ送信機からの赤外光を受けて、シャッターの動きを制御します。

**座板スイッチ送信機　1台**

障害物との接触を赤外光によって受信機に伝え、降下中のシャッターを安全に停止させます。

**受光部　1台**

座板スイッチ送信機からの赤外光をキャッチし、それを電気信号に変換して受信機に伝達します。

**3点押ボタン送信機　2台**

屋内からシャッターの開閉操作を行います。2台を標準装備としているので、手持ち操作（リモコン）と固定操作（ラックによる壁付け）の両方が可能です。

**アンテナ　1台**

3点押ボタン送信機、テンキー送信機からのシャッター開閉操作の無線電波をキャッチし、それを電気信号に変換して受信機に伝達します。

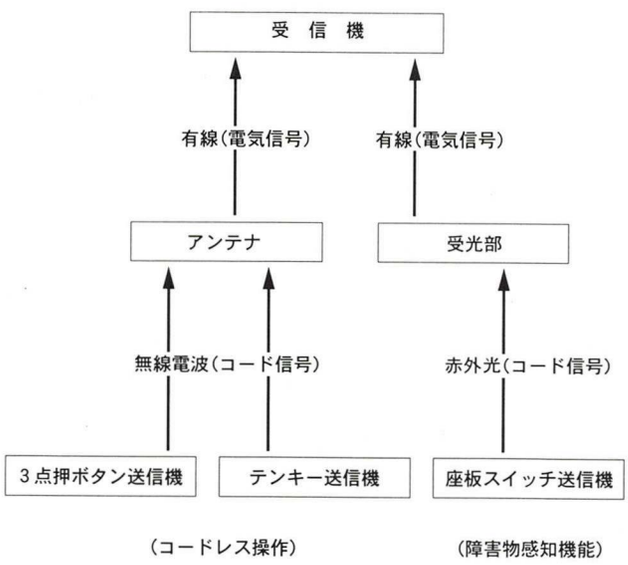
## オプション

**テンキー送信機**

屋外から0～9の暗証ボタンにより4桁の暗証番号を入力してシャッターの開閉操作を行います（固定操作）。登録した暗証番号を正しく入力しないと〈上昇〉〈下降〉のボタン操作を受けつけません。
その他、ビル用の鍵付きボックスも用意しています。

（おかだ　としお）

■フローチャート



# 照明設備

谷本敏和
㈱きんでん技術本部 FM・BM 推進部部長

照明設備とは、電気エネルギーを光エネルギーに変換して、その光を人間の生活に役立たせることを目的としています。

## 照明設備の動向と照明計画の要点

### (1) 照明設備の動向

最近の照明設備は、明視性、快適性、安全性、高効率、高演色性など視環境、作業環境、生活環境についての質的向上および経済性の面より、イニシャルコスト、ランニングコストの低減が強く求められています。

### (2) 照明計画の要点

特に、建築関係の皆さんにとって、電気設備のうち一番身近に感じられるのが照明であり、また照明の基本計画は建築設計担当の皆さんが決められるケースが多いといえます。

さて一般的には、事務所ビルに対する利用者のクレームの多い順序は次のようにいわれています。

①エレベーター、②空調環境、③照明環境

一方、建物の見栄え（芸術性）とか快適性の創出には、照明効果が大きな役割を果たしているといわれています。

①ライフサイクルコストに合致した最適照明設備の採用

最近の厳しい経済情勢下では合理性が強く要望され、次の点を考慮して計画する必要があります。

・最適照度の採用――照度基準（JIS Z 9110）参照
・目的に合った高効率光源と照明方式の採用
・イニシャルコスト、ランニングコストの低減化
・メンテナンスの容易性

②建物の芸術的遊びの創出と照明計画

しかし、あまり経済性を追求しますと、芸術的遊びがなくなり、人々の楽しみがなくなります。

一見むだに見える遊びへの投資が、人々を呼び寄せ、その施設に大きな利益をもたらせるかも知れません。

施設は合理性ばかりでなく、“きらびやかさ”や“落ち着いた雰囲気”の演出も必要です。さらに、夜間のライトアップ照明で、夜の街並みの楽しさを、町の人々に提供したいものです。

## 光源の特性と照度

### (1) 光源の特性

光源の特性を十分に把握し、目的物に適した光源を選択する必要があります。（表1）

### (2) 照度

（ルクス：微少面に入射した光束を単位面積に換算した値をいう）

作業の効率化と安全性を確保するために、照度基準JIS Z 9100（紙面の都合で省略）で決められており、これに準拠して計画する必要があります。

## 照明方式の決定

良い照明計画をするためには、次のような点を考慮する必要があります。

(1) 光源の選定――演色性、照度等より決定します。

(2) 照明器具の選定

・全般照明か、局部照明か
・直接照明か、間接照明か
・直付タイプか、埋込タイプか

(3) 建築化照明

天井や壁を照明兼用の仕上げとする方式で、建物空間の演出に優れた効果を発揮します。（図1）

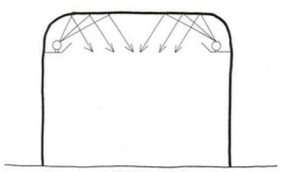


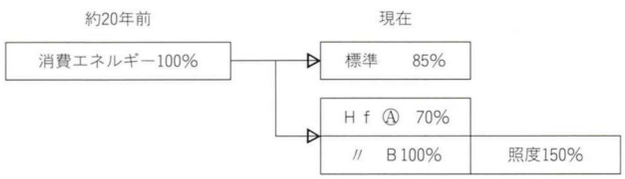
図1 間接照明の例

(4) システム天井方式の照明

天井材と照明器具を一体化し、工場製作とし、現場では組み立てのみとし、作業効率化を図った方式です。

## 省エネルギー化

(1) 高効率器具の採用（蛍光灯40W×2灯用の例）




インバータ（Hf）を採用すると

・省エネ――30%省エネ
・明るさ――50%照度アップ

(2) センサーの採用

便所とか廊下で、人間の利用が間欠的である場所では、センサーによる照明の点滅を行い、省エネルギー化を図ります。

(3) スケジュール運転の採用

施設には、休業時間、清掃時間、準備時間、開業時間帯があり、それらの時間帯に合わせた照度決定を行い、段階的な点滅を行う方式です。中央監視制御等で多く採用されています。

（たにもと としかず）

表1 各種光源の特性（概要）

| 項目 | 白熱電球 | 蛍光ランプ | 高圧水銀ランプ | メタルハライドランプ | ナトリウムランプ |
|---|---|---|---|---|---|
| 容量 | 数W～数kW | 4～220W | 40W～2kW | 100W～2kW | 35W～1kW |
| 演色性 | 演色評価数100 | 60～75 | 40～60 | 60～85 | 20～30 |
| 効率 | 7～22 lm/W | 50～100 lm/W | 50～60 lm/W | 80～88 lm/W | 高圧130～160 lm/W<br>低圧135～180 lm/W |
| 寿命 | 1000～2000時間 | 3000～10000時間 | 6000～12000時間 | 6000～9000時間 | 9000～12000時間 |
| 用途 | 比較的狭い場所での全般照明。アクセント的局部照明、気分を主とした効果を得やすい。大型のものは高天井、各種の投射照明。 | 屋内、展外、全般照明、局部照明。見ることを主とした良質照明が経済的に得られる。また間接照明などにしてムード照明にも効果を発揮する。 | 1灯当たり大光束が得られ、かつ長寿命なので、高天井、投光照明、道路照明に適する。 | 1灯当たり大光束が得られ、長寿命、良演色性なので、良演色性を問題視される高天井、屋外照明に適する。 | 光質の特質を利用して、道路照明、トンネル照明などに利用。 |

(注)演色性が良いほど、人間のはだ、肉、魚、果物、衣類等の色の見え方が良くなるといわれる。

第2回ユニオン建築フォーラム

# 妹島和世「近作について」を聞く

森田昌宏
竹中工務店大阪本店設計部

1998年7月23日(木)、建築情報システム研究所の馬場璋造氏が企画運営する、上記フォーラムが大阪で開催された。今回の講師は、今年「マルチメディア工房」で建築学会賞を受賞した妹島和世女史で、受賞作をはじめ、コンペ案や計画案を含む9作品をスライドで披露してくれた。参加者には概してオジサン達が多かったのだが、と同時に女性参加者の姿が目立ったのも印象的なフォーラムだった。

## セジマという分裂的統一体

スライドレクチャーの後、女性からの質問が皆無だったのとは対照的に、オジサン達からはしつこいくらいの質問が多数繰り出された。しかし、妹島さんからの、それぞれへの返答に納得していたオジサンは、結局1人も居なかったようだ。一見すると、全てがうまくはぐらかされている様でもあったのだが、私にはどうも、妹島さんが、磯崎さんのように頭の中で計算した上でそうしている風にはとても見えなかった。何故なら、妹島さんの語り口は、彼女の建築の持つ魅力と同様、オジサン達には違和感を与える、納得しかねるものであったとはしても（馬場さんはそうした新人類的超理解ジェネレーションを第4世代と称していたが）、彼女の持っている感覚は、確実に身体化されている確固としたものに思えたからだ。

1人の人間の内で身体化されているほどの感覚であれば、同じ人間である限り、普通ある種の調和性を持った、理解可能な（分かり合える）ものであろうと考えたくなるのが一般的な心情だ。ところが、彼女は外部からは、十分確実に引き裂かれていて、とても確固たるものなど持っていないかのように見えてしまう。したがってポイントはこの辺にこそ隠れているのではなかろうか。「つまり外部からは確実に分裂的に見えるものが、実は彼女の中では確固たる統一性を持って存在しているのだということ。」一見矛盾するようなこの考えをさえ素直に受け入れることが出来れば、オジサン達の戸惑いと、逆説的に感じてしまう魅力の原因とは、容易にうかびあがらせることもできるはずだ。

ところで、上記の分析が正しいとすれば、この世にも不思議な事実（まさに不思議という言葉こそが妹島さんを端的に表現するのにふさわしい）が産み出す独特な個性は、平気でいくつもの切断面を1つの作品の中にパラレルに併せ持つことが出来るのだ。そしてそれはまさに天地の判りがたいスライドのように、それを味わうオジサン達には、最初新しい義歯に戸惑うような違和感を覚えさせてしまう。しかしその不思議さも、案外単純な原則の単純な組み合わせによるものにしかすぎないのではないかというのが私の考えだ。それが結果として複雑性を生み出すことがあったとしてもだ。


講演する妹島和世氏と講演会風景

以下は「セジマ」という一見多元的・分裂的ミラクルワールドは、主に3つの要素のパラレルに併存する組み合わせからのみ紡ぎ出されているだけなのだ、という大法螺の一端である。

①原始的な快適さ・日常置き忘れがちなだらしなさをめざしている。
②独特の距離感やスケール感を持ち、発生させている。
③虚像を用いたファサード(表情)でヴィジュアル的な成功をめざす。

これら3つの項目は、プロジェクトによって、多少の強弱がつけられはするが、彼女のプロジェクトには必ず通底しているといってよい。特に顕著に上記の3項目が拮抗して併存しているプロジェクトには、岡山の住宅と、岐阜のマンションのプロジェクトを挙げることが出来よう。

実際①は、住宅の廻廊的バッファースペースや、マンションのオープンバルコニーと一体になった共用廊下的スペースに見ることができる。つまり共に、「・・的」なスペースではあっても、同時に何ものでもない不気味な保留空間なのだ。しかしそれは、彼女に独特の、名前の付けようもない一種原始的な快適さを持つ空間達なのだ。②は、住宅1階の個室スペース間の距離と、それらと2階のリビングスペース間との奇妙な距離や、マンションの単位個室群と共用廊下との織り成すやはり奇妙な距離の取り方のことである。こうした通常ありえないようなプラニングの裏には、プライベートとパブリック間との、彼女自身の身体に刻まれた、特異な距離感覚が見て取れる。そして③は、住宅のポリカーボネイトの波板に映る、行灯のような影絵的光や、マンションの3枚割サッシと水平区画のステンレス鏡面に映る鏡像の移ろいである。これらは常にパターン化されたテイストを持つ。

これら無理矢理に単純化した3つの項目は、もちろんその1つ1つを取り出しただけでも十分に面白いのだが、これらが相互にパラレルな状態で結びつき、結果不思議なセジマワールドを生ぜしめるのだ。

自身の身体的感性に、忠実なまでに誠実であること・地で生きること。それが多分「セジマ」のミラクルワールドの魅力の源なのだ。耐久性などの問題は棚上げにされたままだ。しかし上記の3項目については、他のどのプロジェクトでも1つ1つ指摘していくことが可能なくらい、常に遵守されている。しかもこれら3項目は、一見引き裂かれながらも、同時に緊密に絡み合い、どの1つにも包含されてしまうことはありえない。つまり、多様に変化して見えているのは結果としての組み合わせであったりしているだけで、根っこにある妹島さんは実は、単純で頑固で不変的な、予定非調和的統一体ということだ。

そう言えば、今回のレクチャーで最も印象的だったのは、最初、伊東事務所時代の「遊牧民のパオ」に触れ、彼女の実感として、その押し付けがましい軽さがうっとうしかったことを告白したことだ。これは、オジサン的予定調和感覚への根源的異議申立てだと捉えておいても良いのではなかろうか。

(もりた　まさひろ)
e-mail:morita. masahiroa　@takenaka. co. jp

# 書評

## 70年代の日本の夢を見事に鑑別してみせた写真集

高口恭行




**日本の写真家39　山田脩二**

岩波書店
1998年5月25日刊
B4判変形　72頁　本体2300円

岩波のシリーズ「日本の写真家」に山田脩二が出ていると聞いて早速、目を通した。＜日本村＞―変容する1970年代の光景―とサブタイトルがついていて、表紙には見覚えのある東京新宿西口。眼鏡型ランプを埋めつくしたデモ隊と機動隊の群衆を俯瞰する白黒写真が飾られていた。

このタイトルの出版が示すように1970年代の初期において、すでに山田脩二の名は建築・都市の特異なカメラマンとしてよく知られていた。ところが10年ほどして彼は、突然、この名声を捨てて淡路島・津井へ移住し、時給700円の瓦職人に転進したのである。実家の家業を継ぐ必要があったのか、あるいは彼自身が若い頃にその術を習得していたのか。何か事情があったらしく思われたのだが、そう言った一切の理由はなく、彼自身の説明では「カメラマンがカワラマンになっただけのことで、メとワの一字違いですから」と言う禅問答のような転向であった。そうこうするうちに象設計集団の用賀プロムナードや長谷川逸子の湘南台文化センター、石山修武の伊豆長八美術館などを皮切りに、カワラマン山田脩二の名前が目立ち始めてきた。京都府の大江町で鬼瓦祭や鬼瓦美術館と言った町おこし運動の一画を占めているらしいと言う情報もあった。阪神大震災のあと、急に家屋倒壊の原因扱いされ始めた「瓦ぶき」を復興するために色々な動きが伝えられていた。やはり「一字違い」と言うだけあって、大したものだと思い始めたところへ今春、「瓦を焼くのをやめて、炭を焼くことにした」と言う手紙をいただいた。「もうすぐ還暦の年齢になりますから、老化した体力と気力を振り絞って、これからは瓦も炭も写真も、スミからスミまで焼ければ最高です」……。

この写真集も無論そうだが、山田脩二の写真は黒い。白黒写真と言うが、彼の写真はスミからスミまで黒黒写真のように見える。人物や空など、本来、黒くないはずの対象でも、焼きこんでいるから黒く見える。1970年代を象徴する大阪万博会場であっても、裸体が寿司詰めの千葉船橋のヘルスセンターであっても彼の絵は黒々としているのである。この黒さにさえあきたりず、彼は瓦の黒を目ざし、今、それさえも放棄して、芯まで黒そのものである「炭」を焼き始めた……。カメラとカワラと炭。いずれも焼くと言う言葉づかい。体力を振り「絞って」などと言う彼の説明は、あくまでも禅問答ふうなのである。

彼がアートを修学した東京の桑沢デザイン研究所の先輩に山田耕雲さんと言う10才上の坊さんがいて、彼はその後、弟子入りして大円と言う名前をもらったと聞いた。レンズは円い。心も「円」でなければいけない、と言われて……と言う話も聞いたことがある。そうしてみると、禅問答ふうに飛躍する生き方も考え方も根本は禅なのかと思えなくもないのだが実はそうではないと私は思う。

山田脩二と言う人は時代の「夢」を追っているのである。何だか、語り口まで感化されそうだが、夢は白黒写真だと言うではないか。彼が瓦に転進した1982年はバブル、ポストモダンなどと言ったことと併せて、日本の伝統文化や歴史的景観がようやく市民権をもち始めた時期である。彼はその原点とも言える瓦の「夢」に迫ろうとした。そして今、炭に象徴される自然環境と人々の共生の夢へ向って、次なる転進をはかろうとしている。「夢」はこの姿婆で語ろうとすると、常にいくばくかの恥しさを伴なう。彼の禅問答はそのための照れ隠しのように思えてならない。

この写真集を見ることは1970年代の日本人が見た夢を再確認することだと言ってよいだろう。ただ、その夢はたとえば70年万博や船橋ヘルスセンターなどがそうであったところの「極彩色」。それに高度経済成長や超高層ビルといった「高さ」によって人々の目を眩ませるものであったとも言えるのであって、山田脩二がビルに登り、ヘリに乗り、地を這って撮った白黒の「黒々写真」はその夢の弱点と奇妙さを見事に抽出していると思われるのである。そう思って見てゆくと、彼がこれからやると言う「炭」において彼は自然環境と人々の共生の夢をどのように把えてゆくのか。まことに興味深い。

そう言った「夢」のもついかがわしさと、にもかかわらず存在する何がしかの正当性を識別する、山田脩二式鑑識法みたいなものがこの写真集の中にみてとれるのである。

(たかぐち　やすゆき／建築家・一心寺住職)

# BOOK STATION

ブックステーション



## バウビオロギー

新しいエコロジー建築の流れ

佐々木徳貢 著

学芸出版社
1998.4.10刊
A5判　192頁　本体2100円




21世紀に向け、建築の分野でも環境問題は大きな課題の1つとなっている。しかし、「エコロジー」「エコ」「地球に優しい」等々、今や誰もが使う言葉のどれ程が本当に理解されているだろう。そして、日本ではあまり聞き慣れない「バウビオロギー」とは？

本書の中で、エコロジー思想が浸透するヨーロッパ・ドイツ語圏で盛んに用いられている建築手法「バウビオロギー」を、スイス在住の建築家が、現地での設計活動を通じて体得したテクニックを交え、紹介している。「バウビオロギー」とは、建築と生物の中間をロゴスで繋げていこうとする行為・努力、すなわち、人間と自然に適合した理性ある建築と位置付け、従来のエコロジー建築とは異なる建築であることを強調する。そして、設計手法として、用地の選定・測定、材料選択、エネルギー計画、リサイクル、緑化計画など最新事例を取り上げながら、解りやすく解説したマニュアル的一冊である。

（Y．O）

## ヨーロッパ建築史

西田雅嗣 編

昭和堂
1998.4.30刊
A5判　242頁　本体2400円




ヨーロッパ建築史の基礎知識をコンパクトにまとめた一冊。構成はごくオーソドックスな通史のかたちを取っていて、古代ギリシアから近世の新古典主義、歴史主義までを時代様式ごとに分け、それぞれの様式の特徴や代表的な事例などが解説されている。大学での初歩的な授業などを想定されて編まれたその内容はいかにも教科書的で、様式名や事例などの固有名詞が列挙されていく文章に読み物的な面白味は期待できないけれども、逆にそんな面白さは最低限この程度のことを身に付けてからと、各章末にある基本文献リストがしっかりと次のステップを用意してくれている。

これから建築を学ぼうとする学生の方はもちろん、建築史の授業をまともに受けずに社会に出てしまった方にもお薦めの一冊。

（S．T）

## インテリアの地震対策

ー家具と家電製品から人をまもるー

北浦 かほる
北原 昭男　著

リバティ書房
1998.6.8刊
A5判　187頁　本体1200円




本書の前半では、阪神・淡路大震災における住宅室内被害の調査結果が具体的に報告されている。室内にあるさまざまな物品、また住居のタイプ（一戸建・集合住宅）による被害の特徴が多くの写真や図表とあわせてわかりやすく説明されている。同時に地震波による家具の挙動のしくみを原理から平明に述べられ、その恐ろしさが伝わってくる。

後半では前半で報告された個々の被害に対して、どのような対策が可能であり、その大半は住まい手自身で十分に実行できるものである事が丁寧に解説されている。

広く生活環境を研究する著者が、一般への啓発と系統的な対策知識の参考書の必要を感じてまとめた本書は、誰もがなるほどと納得できる内容になっている。それだけでなく地震対策をきっかけとして自分たちの住まいに関心を持ち、積極的に維持・管理を行うことの大切さ、ひいてはそれが家族の安全で快適な生活につながることを教えてくれる。

（A．K）

日経BP・建築デジタルブックス・05

## サイバー時代の空間デザイン

渡邊朗子 著

日経BP社
1998.7.6刊
B5変形判　168頁　本体3000円




サイバースペースとは、デジタルネットワーク・コンピューティングが創り出す電子空間のことです。本書は、電子メディア時代の可能性について、研究者兼建築家の立場から、日米両国でのフィールド・スタディをもとに、具体的に記述されている。

その中で、仕事や生活の場が実際にどのように変わっていくのか、また、その空間をどのようにデザインすればいいのかについて考察されている。

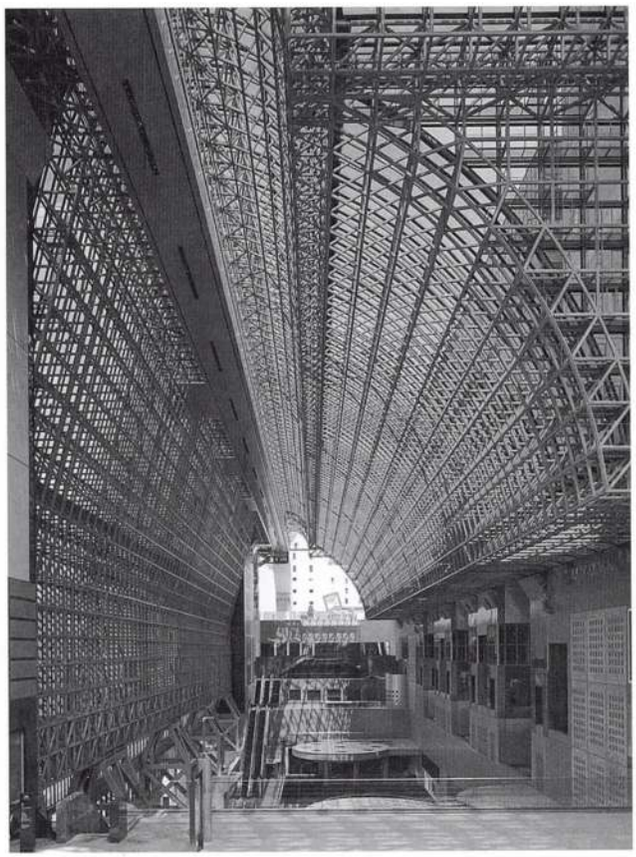
現代において、私たちはコンピューターを避けて、仕事も生活もできない。建築の歴史をふり返っても、技術の革新が建築を変化させて来た。コンピューターのもつ情報ネットワークの力、シミュレーションの力が、建築の可能性を広げると思われる。

（A．T）

担当：会員企画小委員会／大谷由紀子・河崎敦子・高岡伸一・塚口明洋

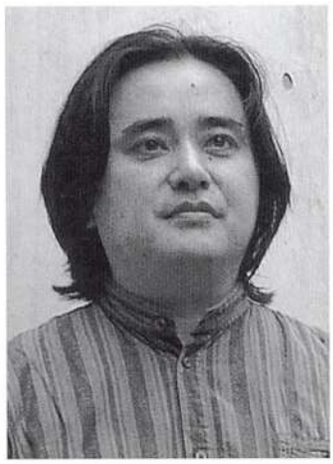
# 話題建築を聞く
第27回
# オープン後1年たった京都駅ビル
## オーナーと設計チーフに聞く

日　時　1998年 9 月18日㈮
14:00―17:00
会　場　エルイン京都・1F会議室
＊京都駅南側徒歩１分
講　師　椎名信義／元京都駅ビル開発
常務取締役建設部長
河瀬行生／アトリエ・ファイ
建築研究所設計チーフ
定　員　80人
＊申込者多数の場合は抽選
参加費　会員 2,000円、一般 3,000円
＊コーヒー付、税込
申　込　９月10日㈭までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
①催し名：話題建築を聞く
②氏名
③個人会員、団体会員、一般の別
④職場・学校名
⑤参加証郵送先
⑥連絡先電話番号
をお知らせ願います。
＊参加証を９月11日㈮に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
大阪市北区梅田1-1-3-2100
TEL.06-348-0633
FAX.06-348-0634
〒530-0001





**椎名信義**（しいな　のぶよし）
1943年神奈川県生まれ
66　東京都立大学建築科卒業
69　同大学院修了、日本国有鉄道入社
現在　京都駅ビル開発㈱常務取締役を経て本年６月より大鉄工業㈱常務取締役
主な作品
ホテルメトロポリタン仙台、ホテルグランヴィア岡山、金沢駅ビル、JR博多オフィスビル、京都駅ビル



**河瀬行生**（かわせ　ゆきお）
1959年静岡県生まれ
76　United World College of the Atlantic留学
85　東京大学工学部建築学科卒業
87　同大学院修士課程修了（原研究室）
現在　アトリエ・ファイ建築研究所設計チーフ
主な作品
飯田市美術博物館、茶室遊喜庵、相鉄文化会館、梅田スカイビル、マイアミリンカーンロード再開発、京都駅ビル、東京大学キャンパス計画、札幌ドーム

京都駅ビルは、昨年（1997年）９月11日、事業についてから15年余の歳月をかけてグランドオープンした。新駅ビルは、地下３階・地上16階、延床面積23万８千㎡の日本でも最大級の駅ビルで、東西約470m、南北約90mの、細長い敷地に駅・ホテル・百貨店・文化施設・駐車場に加え広場・通路が縦層して配置されてある大規模な複合施設である。
平安建都1200年を記念する事業の一つとして、1990年11月内外の著名な建築家７名による国際的設計コンペを実施し、世界の歴史都市・京都という特殊性を考慮しつつ、「市民に親しまれ、市民の誇りとなり、世界の新名所として通用するシンボリックな形状」および「京都の南北軸上に位置する新しいランドマーク」の創出を求めた設計条件を、きめ細かい洗練された感覚と機能的なバランスに留意した原広司氏の作品が最優秀案に選ばれた。
原氏は、この作品の設計主旨を次のように述べている。「京都は、歴史への門である。京都駅の建築全体は、この短文の形象化でありたい。平安京の都市形態が、今日にも鮮やかにその姿を刻み込んでいるように、歴史はひとつに地理学的である。ここでの提案では、それ故、＜地理学的コンコース＞なる概念の具象化を門の表現の第一に据えた。多くの人々が、この幅員27m、高さ60mのしかし、長さにして470mのコンコースを通過して行くだろう。」
開業以来約半年間で、2,150万人と予想を上回る大勢のお客様にご利用いただき、この建物は確実に京都の新しい名所として定着しつつある。
今回の講演では、この駅ビルの誕生にいたるさまざまな軌跡、すなわち京都の新しい景観創造に対するリアクションとその対応、都市計画法・建築基準法における諸問題解決に向けての苦闘、事業採算性と良質な建築グレードを堅持するための相克、そして京都の新しいランドマークとなった当ビルの設計の神髄についてお話ししたい。

（椎名・河瀬）

所在地　京都市下京区烏丸通塩小路下ル東塩小路町
主要用途　駅施設、ホテル施設、商業施設、文化施設、駐車場施設
建築主　西日本旅客鉄道㈱
京都駅ビル開発㈱
設計監理　原広司＋アトリエ・ファイ建築研究所
施　工　大林組・鉄建建設・大鉄工業・フルーアダニエルジャパン・公成建設JV
敷地面積　38,075.50㎡
建築面積　32,350.87㎡
延床面積　237,689.10㎡
構造規模　SRC・S, B3・16F・P1
最高高さ　64.3m
設計期間　1991年６月～1994年６月
工　期　1993年12月～1997年７月

## 東西アス協組建築講演会

東西アスファルト事業協同組合と田島ルーフィング㈱の主催で13年目を迎えた建築講演会は、名古屋、大阪、東京、札幌の全会場入場無料。

会場は先着順で、整理券が必要。参加申し込みは各地区の田島ルーフィング㈱へ〈各地の田島ルーフィング㈱の電話番号問い合わせは、03-5821-7720へ〉。

■名古屋会場　1998年10月1日㈭ 18：30～20：30
講師　長谷川逸子氏「公共建築と都市」
会場　今池ガスホール（358席）
　　名古屋市千種区今池1-8-8　今池ガスビル

■大阪会場　1998年10月13日㈫ 18：30～20：30
講師　伊東豊雄氏「近作を語る」
会場　朝日生命ホール（368席）
　　大阪市中央区高麗橋4-2-16　朝日生命館

■東京会場　1998年10月30日㈮ 18：30～20：30
講師　妹島和世氏「自作について」
　　佐々木睦朗氏「スチールによるライトコンストラクション」
会場　有楽町朝日ホール（776席）
　　東京都千代田区有楽町2-5-1　有楽町マリオン

■札幌会場　1999年3月4日㈭ 18：30～20：30
講師　内藤　廣氏「建築にできること」
会場　札幌市教育文化会館（360席）
　　札幌市中央区北一条西13丁目

## JIA 市民大学講座開講

㈳日本建築家協会近畿支部都市デザイン委員会主催の「21世紀の街づくり」セミナーが、今年も10月～12月の木曜日18:00～20:00に、計6回開講される。

10月8日　『都市計画』は可能か／白幡洋三郎氏（国際日本文化研究センター教授）
10月15日　まちづくりに文化をプロデュースする／河内厚郎氏（文芸・演劇評論家）
10月29日　日本の空間のシークェンス―揃える空間からの脱皮―／材野博司氏（京都工芸繊維大学大学院教授）
11月12日　中心市街地の空洞化と大店法後／矢作弘氏（日本経済新聞社編集委員）
11月26日　ガーデニングとしてのまちづくり／隈研吾氏（建築家）
12月10日　風景の中の建築／妹島和世氏（建築家）

会　場　安田火災海上保険㈱安田火災ビル12F
　　大阪市中央区瓦町4-1-2 TEL 06-227-4430
定　員　100名（先着順・代理出席可）
受講費　一般2000円／回（通し券6回10000円）
　　学生1000円／回（通し券6回5000円）

申し込みは、勤務先・住所・電話番号を記入し、FAXまたはハガキで㈳日本建築家協会近畿支部（大阪市中央区備後町2-5-8 〒541-0051 TEL 06-229-3371、FAX 06-229-3374）へ。

## パブリックアート・フォーラム高岡で交流を

行政担当者、専門家、市民、地域住民が集い、地域の環境づくりや公的施設におけるパブリックアートの役割を討議し、分野間、地域間の交流を行う第5回フォーラムは、銅・アルミ合金鋳物の生産地で、ブロンズ像や街路灯、車止め、橋梁高欄などアート街具類の生産でも有名な富山県高岡市と、真宗寺院の門前町として宮彫技術を生かした欄干や置物の木彫刻をつくり続ける同県井波町を舞台に開催される。

会　場　高岡商工ビル、国宝瑞龍寺、井波五箇山
参　加　一般5000円、パブリックアート・フォーラム会員3000円＋報告書進呈、学生2000円
申　込　パブリックアート・フォーラム事務局（〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-2-8、TEL 03-3407-9098、FAX 03-3407-5247）へ。

■第1日／10月2日㈮ 9：00～
見学会　アルミ・ブロンズ鋳物工場 or シビックロード
講演会　「文化革命としてのパブリックアート」（13:30）PUBLIC ART REVIEW誌発行人／ジャック・ベッカー氏
トーク　「アートと地域社会との新しい関係」（15:15）高岡市長／佐藤孝志氏、井波町長／清都邦夫氏、アートフロントギャラリー代表／北川フラム氏、地域計画コンサルタント／長島キャサリン氏、コーディネータ／杉村荘吉氏
見学会　国宝瑞龍寺（17:45）
懇親会　瑞龍寺大庫裏にて（別途3000円要）

■第2日／10月3日㈯ 9：00～12：45
分科会　①「アートを生かした地域のまちづくりと住民参加」彫刻家／吉田昇氏ほか3名
　②「アートと街具の可能性」長野五輪聖火台作家／菊竹清文氏ほか3名
　③「パブリックアートの保守管理と市民の視点」米国歴史芸術作品保存修復士／グレン・ワートン氏ほか3名
　④「学校教育と生涯教育の現場で」武蔵野美術大学講師／林容子氏ほか2名

■第3日／10月3日㈯午後～4日㈰
伝統木彫刻の町井波と世界文化遺産五箇山任意ツアー

## ～日本建築の可能性～

㈳大阪府建築士会の近代建築セミナーの7回目は、アメリカ生まれの東京工業大学教授ディヴィッドB．スチュワート氏が語る「日本建築の可能性」。

1975年から東京工業大学で教鞭をとるスチュワート氏の、日本人とは違った視点による西洋の近代建築と日本の近代建築の流れの話を通して、アジアにおけるこれからの日本建築を探ろうとするセミナーである。

日　時　1998年10月9日㈮ 18：30～20：30
会　場　イトーキクリスタルホール
　　TEL 06-223-3181
　　大阪中央区淡路町1-6-11
講　師　David B. Stewart氏（東京工業大学教授）
定　員　50名
参加費　建築士会会員1000円、一般2000円
申込先　所要事項を記入し、ハガキかFAXで㈳大阪府建築士会（〒540-0011 大阪市中央区農人橋2-1-10、TEL 06-947-1961、FAX 06-943-7103）へ。

## 東京芸大学生による椅子展

東京芸術大学美術学部建築科教室は、家具制作という課題を通じて、デジタルな表現が氾濫する建築分野にあって表現の原点に立ち戻り、身体性を持った創作活動を続けていこうと、学部1年生による椅子展を開催し、今年で5回目となる。

学生自身のユニークな発想による椅子展は、下記のとおり開催される。

会　期　1998年9月21日㈪～10月3日㈯
　　――平成9年度学部1年生（現2年生）
　　1998年10月12日㈪～10月24日㈯
　　――平成10年度学部1年生
時　間　10:00～17:00（最終入場16:30、最終日15:00）
会　場　東京芸術大学美術館1Fギャラリー
　　日曜日休館／入場無料
　　東京都台東区上野公園12-8
問合先　東京芸術大学美術学部建築科黒川研究室
　　TEL 03-5685-7618、FAX 03-5685-7775

## 20世紀のイタリア建築をたずねて―大阪府建築士会―

■第12回海外建築セミナー「イタリアの都市と生活」
日　時　1998年10月2日㈮ 18：30～20：30
会　場　YKKap会議室（大阪市中央区谷町4-8-7）
講　師　井口勝文氏（竹中工務店開発計画本部専門役）
　　古山正雄氏（京都工芸繊維大学大学院教授）
定　員　50名（先着順）
参加費　建築士会会員1000円、一般2000円

■第12回海外建築研修旅行
日　程　1998年11月19日㈭～29日㈰の11日間
訪問先　アンティコリ・コロラード、オルヴィエート、アッシジ、グッビオ、シエナ、サン・ジミニャーノ、フィレンツェ、ボローニャ、ヴェネツィア、トレヴィーゾ、ポッサーニョ、ヴェローナ、ミラノ
参加費　245000円（参加者30名の場合）
定　員　30名（先着順、最少催行人員15名）

いずれも、問い合わせ・申し込みは㈳大阪府建築士会（TEL 06-947-1961、FAX 06-943-7103）へ。

## タキロン・国際デザインコンペティション'98公募

第10回タキロン・国際デザインコンペティション'98のテーマは【都市におけるアトラクターと記号場】。
名所旧跡、記念的建築物等を〈アトラクターattractor〉と呼び、〈アトラクター〉が離散的に平面上に点在している領域の状態を〈記号場〉とし、魅力的な〈アトラクター〉群を考慮し、それらを巧妙に配置して生き生きと楽しいあるいは静かで優美な〈記号場〉をつくることを、意識的に、建築や都市計画の方法的課題としている。
建築設計事務所や建設会社設計部、建築系の学生などを対象とし、広く海外からも作品を公募する。

課　題　【都市におけるアトラクターと記号場】
登　録　官製ハガキまたはFAXでタキロン・国際デザインコンペティション'98係（〒113-8501 東京都文京区湯島2-31-2㈱新建築社内、FAX 03-3818-6742）へ、10月9日㈮までに。
応　募　応募作品はAIケント紙あるいはそれに類する用紙1枚におさめる。表現は自由。
郵送の場合は10月26日㈪消印有効。持参の場合は正午までとし、上記登録先へ。
審査員　原　広司氏（建築家・東京大学名誉教授）
賞　金　1等1名100万円、2等1名50万円など。

## 「チーフ・アーキテクト バージョン5.0J」発売

建築設計用3次元プレゼンテーション・ソフトウェア「チーフ・アーキテクト　バージョン5.0J」が、アンドール㈱から6月25日に発売された。
昨秋発売の「チーフ・アーキテクト」の、簡単な平面図入力による室内／屋外パース・断面・立面・俯瞰・外観の自動生成に加え、この“バージョン5.0J”では、日本建築固有のライブラリを80追加し、表現力をも併せて強化している。製品価格は128000円
動作環境　ペンティアム搭載パソコン、32MB以上のメモリ、100MB以上のハードディスク空き容量、Windows95、WindowsNT4.0以上
問い合わせは、アンドール㈱ TEL 03-3639-1451へ。

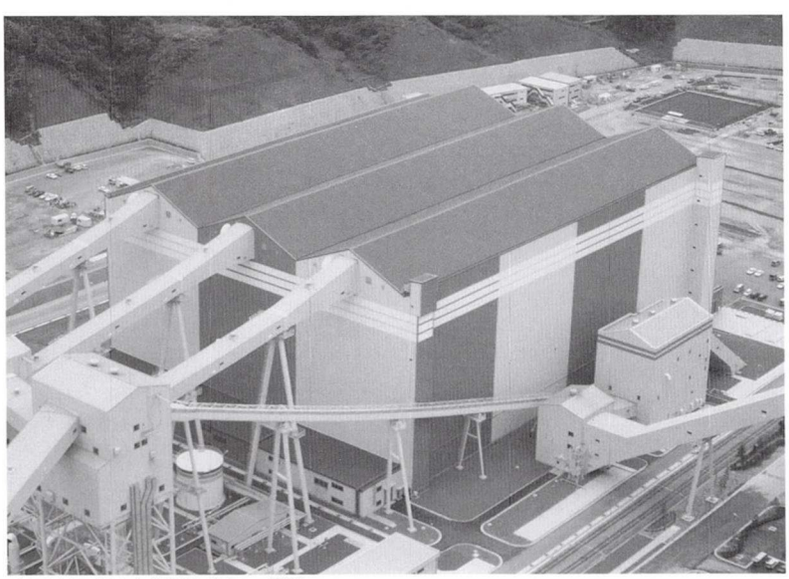
## 建設リサイクル推進ー建設省ー

建設リサイクル推進計画'97に基づき各種施策の具体化を図っている建設省は、「建設リサイクルガイドライン」をとりまとめ、この8月に、建設省所管の直轄事業実施にあたって建設リサイクル行動計画の指針とするよう地方建設局等に通知した。

## 『設計プロポーザルの進め方』発刊

プロポーザル方式実施検討委員会（伊藤誠委員長）を設置、プロポーザル方式運用における諸課題を検討してきた㈳公共建築協会は、プロポーザル方式による設計者選定の普及を図るため設計プロポーザルマニュアルを作成し、発売を始めた。
本マニュアル『設計プロポーザルの進め方』は、公共建築の設計者選定に携わる人々への手引きとなることを主眼に、設計プロポーザル作成委員会（委員長：橋本喬行）を設け、作成委員会の独自の提案という形でとりまとめたもの。A4判、販売価格1部6000円。
問い合わせは、㈳公共建築協会（TEL 03-3234-4945、FAX 03-3234-4967）へ。


TOF フッ素樹脂積層被覆鋼板 & COM 耐酸被覆鋼板


中国電力三隅火力発電所（TOF ご採用）

「耐酸被覆鋼板」のパイオニアとして約半世紀の経験を生かし、新たに「フッ素樹脂積層被覆鋼板」を製品群に加えました。
建築物の耐久性と、独創的な色彩と外観をクリエイトします。

■ フッ素樹脂積層被覆鋼板
　ＴＯＦ（タフフロール）
■ 耐酸被覆鋼板
　ＣＯＭ（ケミカラーオーシマメタル）
　ＥＢＭ（エバーブライトメタル）

OSHIMA OHYO
本社　大阪市旭区太子橋1-15-22　Tel.06(954)6521　Fax.06(954)6480
大島応用化学工業株式会社
●支店 東京、名古屋、新居浜 ●工場 新居浜、寝屋川 ●営業所 四日市、岡山、広島、宇部、福岡

日本建築協会

# 月間の動き

【平成10年6月分】

## 評議員会

第1回定時評議員会
24日・5時～5時35分・於本会会議室
出席者　鶴田議長ほか57名（委任状共）
議　事　(1)平成9年度事業報告承認の件
　　(2)平成9年度決算報告承認の件
　　(3)理事補選の件

## 総　会

第1回通常総会
24日・5時40分～6時・於本会会議室
出席者　市川会長ほか17名
議　案　(1)平成9年度事業報告書について承認を求める件
　　(2)平成9年度収支決算報告書について承認を求める件

## 理事会

第1回常任理事会
24日・4時～5時・於本会会議室
出席者　市川会長ほか17名
議　事　(1)各支部の平成9年度決算報告書等承認の件
　　(2)理事補選（追加）の件
　　(3)入・退会者承認の件
　　(4)後援・協賛名義承認の件
　　(5)経過事業報告
第3回会勢理事会
24日・3時～4時・於本会会議室
出席者　岡本副会長ほか5名
　　オブザーバー／市川会長ほか3名
議　事　入・退会状況と今後の進め方

## 編集委員会

第3回会員企画小委員会
2日・7時～8時半・於本会会議室
出席者　塚口副委員長ほか3名
議　事　(1)シリーズものの報告と掲載予定
　　(2)新しい企画案について
第3回施工材料分科会
4日・4時～6時・於本会会議室
出席者　植田委員ほか5名
議　事　(1)施工材料特集の企画
　　(2)「施工材料の頁」の企画
第3回計画分科会―建築系―
4日・7時～11時・於本会会議室
出席者　刃金幹事ほか8名
議　事　9月号「建築分科会」特集の企画
第3回構造分科会
9日・6時～8時・於本会会議室
出席者　田辺幹事ほか2名
議　事　(1)「構造の頁」の企画
　　(2)10月号「新技術でゆれをとめる」特集企画
第3回「素材と技術が生み出すデザイン」幹事会
10日・6時半～9時半・於本会会議室
出席者　本多幹事ほか8名
議　事　7～9月号テーマの内容検討
第2回広告企画小委員会
11日・5時～6時・於本会会議室
出席者　小幡副委員長ほか4名
議　事　(1)独自特集企画経過報告
　　(2)作品作風関係報告
　　(3)収支状況報告
第3回編集委員会
11日・6時～8時半・於本会会議室
出席者　内田委員長代行ほか9名
議　事　(1)8月号「建築設備メンテナンス」特集経過報告
　　(2)9月号「建築への証言'98」特集経過報告
　　(3)10月号構造特集企画検討
　　(4)1月号合同特集企画検討
　　(5)会員企画、シリーズ頁経過報告
　　(6)表紙の再検討
　　(7)収支状況報告
第3回法令分科会
18日・2時～3時40分・於本会会議室
出席者　炭崎幹事ほか3名
議　事　(1)「法令コーナー」の企画
　　(2)「建築基準法改正」特集の件
第3回設備分科会
23日・6時～8時45分・於本会会議室
出席者　安江特別幹事、山根幹事ほか7名
議　事　(1)編集委員会報告と「建築設備」特集の検討
　　(2)「設備の頁」の企画
　　(3)新「基礎講座」の提案
第3回作品作風小委員会
25日・7時～8時半・於本会会議室
出席者　前川副委員長ほか3名
議　事　(1)作品の掲載状況・掲載予定の報告
　　(2)作品の選定
　　(3)「gallery」「SKETCH BOOK」掲載報告・予定

## 事業委員会

第3回若い会員の集い小委員会
3日・7時～9時5分・於本会会議室
出席者　杉本副委員長ほか3名
　　オブザーバー／植田氏、岡崎氏、笠原氏
議　事　(1)実施報告と今後の予定
　　(2)当小委員会の今後のあり方及び新しい名称
　　(3)「委員の時間」
第2回情報小委員会京都駅ビル分科会
15日・6時～8時・於本会会議室
出席者　中西主査ほか8名
議　事　話題建築を聞く（第27回）京都駅ビルの検討

## 出版委員会

第3回出版委員会
18日・5時半～7時・於本会会議室
出席者　山田委員長ほか10名
議　事　(1)〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
　　(2)今後のテーマと執筆者選定

## 教育委員会

第1回講習会小委員会
16日・6時～7時・於本会会議室
出席者　ゲスト：吉田豊氏・仲村澄夫氏
　　藤井副委員長ほか5名
議　事　(1)本年度の建築工事実務講習会開催について
　　(2)テキストについて

## 30's EYE―21世紀へのエスキス

建築少年／KENCHIKU SHOWNEN Architect & Associates
「年限ユニット―ダイアローグの集積―」
26日・6時半～8時45分・参加者36名

## 80年史編纂委員会

15日・4時～6時・於本会会議室
出席者　長谷部委員長ほか6名
議　事　80年史編纂について

## 建築クラブ

第314回　朝食会
9日・8時～9時半・於リーガグランドホテル
演　題　「西鶴に学ぶ商いの原点」
講　師　桝井　寿郎氏（梅花短期大学教授）
参加者　41名
第2回建築クラブ役員会
9日・9時40分～10時40分・於リーガグランドホテル
出席者　田村委員長ほか8名
議　事　(1)平成10年度運営委員引き継ぎ
　　(2)今後のスピーカー検討（報告）

## 入会者（敬称略）

〔団体会員3社〕
神鋼商事㈱鉄鋼本部大阪鋼材部
笹原メーソンリー㈱
三菱電機ビルテクノサービス㈱

〔個人会員21名〕

| | | |
|---|---|---|
| 芦田　裕之（東畑建築事務所） | 井上　哲也（東畑建築事務所） | 井ノ本　亘（東畑建築事務所） |
| 石橋　尚之（東畑建築事務所） | 樫原　雅民（東畑建築事務所） | 小山　昭（東畑建築事務所） |
| 清水　徹（東畑建築事務所） | 新庄　康裕（東畑建築事務所） | 中井由紀子（東畑建築事務所） |
| 浜口　春生（東畑建築事務所） | 藤原　賢治（東畑建築事務所） | 宮原　賢二（東畑建築事務所） |
| 脇田　隆史（東畑建築事務所） | 池上　明（エーアイアーキテクトスタジオ） | 大上　勝（大上建築工事店） |
| 太田　曄（共立建築設計） | 徐　竜学（狩野建築研究所） | 延原　理恵（梅花短期大学） |
| 藤原時一郎（竹中工務店） | 中村　雄治（広島大学） | 森村　政悦（森村政悦建築設計事務所） |

〔準会員1名〕
田島　大介（早稲田大学大学院）

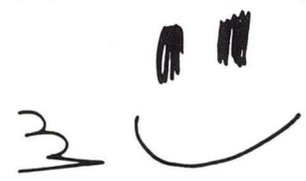
◀会員の訃報
正会員　田中孝男氏　　平成10年5月19日
正会員　中出弘光氏（鴻池組）　平成10年7月6日

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59 電話 06(302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03－3344－1851(大代)　大阪本社☎06－448－3603(代)
大阪支社 ☎06－448－5851(代)　名古屋支店 ☎052－211－1535(代)　中国支店 ☎082－247－5541
九州支店 ☎092－431－2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市区江戸堀１丁目９番25号　電話(06)441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

大晃設備株式会社

本　　社
大阪営業所　大阪市此花区西九条2丁目13番28号　電 06－466－2268
枚方営業所　枚方市甲斐田東町９－３　電0720－49－2128

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　大島　剛
取締役大阪支店長　琴浦　健

大阪支店　大阪市中央区北浜２－２－21　電話 06(202) 3071（代表）
本社・東京本店　東京都千代田区有楽町１－４－１　電話 03(3502)6111（大代）
支　　店　名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・横浜・東関東・北関東・京都・神戸・四国

給・排水・衛生・消火・空調設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

大阪市北区中津６丁目８番４号　電話大阪(458)3628番
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西・神戸

空気調和設備
衛生設備設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町３番５号　電話（352）１１３１代
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町２－22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

OKUJU
スペース クリエイター

建築に革命をもたらした技術がある
「大規模天井無足場工法」

内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社オクジュー

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号 〒530-0047
TEL(06)312-4131　FAX(06)312-7998
東京・九州・横浜・名古屋・仙台・宮崎・京都

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社三晃空調

本　　社　大阪市中央区城見２丁目１番61号ツイン21MIDタワー　電話 06-949-1371
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満３丁目13番20号　電話 06-363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

Digital Pri-Press

AOBA PRINTING CO.,LTD.,

代表取締役社長 依藤孝行

青葉印刷株式会社

〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-351-5428 Fax.06-351-5299

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町２丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪（06）768－５０３１代表
メンテナンス　電話　大阪（０６）７６８－１６５１代表
東京支社　東京都文京区小石川１丁目12番14号（日本生命小石川ビル７階）
〒112-0002　電話（03）５６８９－２３５１代表

特殊壁装材製造販売　和室に最適
●聚楽壁紙 ●ホクシノン（無機質壁紙）

(株)ホクシンクロス

〒583-0881　大阪府羽曳野市島泉８－173－１
TEL（０７２９）３９－３６１０

工場　〒580-0046 大阪府松原市三宅中8丁目1番9号
第一　〒639-1042 奈良県大和郡山市小泉町２７４４
第二　〒597-0051 大阪府貝塚市王子５０１

夢×技=∞ 無限大
何時もあなたの街で
お会いしている
クリハラの技術



電気・計装・空調・土木
栗原工業株式会社
本社/〒530-0017大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル)
TEL06(313)1101
創業1919

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。
電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役 山本貴士
本 社 〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(385)1361(代) FAX 06(385)1050

電気設備設計施工
株式会社 三興社
代表取締役社長 上田正雄
本 社 大阪市北区西天満2丁目6－8(堂ビル5階)
電 話 06(361)3671(代)
支 店 東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電 話 03(3666)1478(代)
営業所 堺・泉州・泉南・滋賀

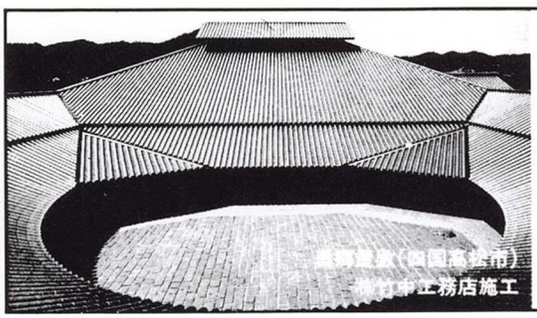
電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関西支社
取締役支社長 伊藤義信
大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号 電話大阪(202)0325～9番
本 社 東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支 社 北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

人と都市の快適な環境をつくります
営業種目 設計・施工・監理
●電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装
●空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム
●プラント
プラント計装
システムエンジニアリング
●情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム
●電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電
あかと緑があふれるクリエイティブカンパニーをめざす。
住友電設株式会社
大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06) 537-3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

電気設備・計装制御設備・空調設備・クリーンルーム設備・プラント設備
給排水衛生設備・エネルギー集中監視システム…設計施工
三宝電機株式会社
SANPO
取締役社長 嘉納秀一
本 社 〒530-0047 大阪市北区西天満2-6-8(堂ビル) TEL 06(364)1471・FAX 06(364)5533
東京支社 〒105-0003 東京都港区西新橋3-9-3(ランディック新橋ビル) TEL 03(5472)3311・FAX 03(5472)0085
名古屋支店 〒462-0847 名古屋市北区金城3-12-14 TEL 052(991)5131・FAX 052(914)7535
神戸支店 〒657-0035 神戸市灘区友田町3-6-11K・Tビル TEL 078(842)6411・FAX 078(842)6416
堺研究所 〒590-0906 大阪府堺市三宝町七丁369 TEL 0722(27)8408・FAX 0722(27)1424

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工
株式会社 川岸窯業商店
本 社 大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06－532－0461(代表)
FAX.06－535－5181
天理営業所 天理市丹波市新町49

学校建築のトータルアドバイザー
二葉工業株式会社
黒板・掲示板・家具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547-0001 大阪市平野区加美北3—4—5
TEL06(792)5858 FAX06(792)2810



〒556-0024 大阪市浪速区塩草一丁目二番三号 ☎ 五六一～七四一六
ファックス 五六一～七四五四
ナニワ瓦株式会社
あらゆる屋根工事の相談は、
施工中工務店施工

新鮮
情報処理／編集・企画／印刷・製本
ハード&ソフト…プリンティングの先端を拓きます。
ND
日本電植株式会社
〒530-0043 大阪市北区天満2丁目5番15号 TEL.06(352)7502㈹
FAX.2F事務所 06(355)2714 3F制作06(357)7250

省エネルギー時代の断熱用シート防水材
日立バイナリーシートP
日立バイナリーシートPは,日立防水シートに発泡ポリエチレンを独自の貼り合わせ技術で積層した,二重構造の断熱兼用二重防水シートです。
日立電線株式會社 本社 東京都千代田区丸の内2丁目1番2号(千代田ビル)

Construction chemistry for the future.
コンクリート用混和剤／コンクリート用補修材
高性能無収縮材／コンクリート用高性能床材
株式会社 エヌエムビー
株式会社 ポゾリス物産
本 社：東京都港区六本木3－16－26
大阪支店：大阪市中央区北浜3-2-23(信愛ビル)
TEL06-202-3294
Master Builders Technologies

# テトカッパー防水層

カッパー防水帯――――――――コーパータイト／オクロン防水帯

資料をご請求下さい。

## 奥山化工業株式会社

本　社 東京都中央区銀座8-4-9 奥山ビル　TEL03(3571)2703㈹ FAX03(3571)0264

大阪事務所 TEL06(391)1081－2 FAX 06(395)2109　名古屋出張所 TEL052(811)3660

横浜営業所 TEL045(320)4832　FAX045(320)4765　厚木出張所 TEL0462(21)1761 FAX0462(23)1341

埼玉営業所 TEL048(774)2845　茨城出張所 TEL0292(28)0878 FAX0292(28)2614

---

快適な明日を提案する

# TOYO Shutter

東洋シヤッター株式会社

本　社　〒540-0024 大阪市中央区南新町1－2－10（TSビル）
TEL（06）943—6571（代）

■東京/横浜/仙台/水戸/静岡/岡崎/名古屋/富山/滋賀/京都/神戸/広島/高松/福岡/他全国主要都市

---

# デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に

●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに

●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に

●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入

●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・綱野（07727）2－2220
舞鶴（0773）76－0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）443－6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）252－6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83－2381
TEL 大阪（06）877－1581

立山アルミ



# 人間にやさしい

## 快適空間をめざして

高度化する技術と進化するデザインがつくりあげた都市。
そこには、決して忘れてはならない視点があります。
人にやさしいかどうか、自然や環境に調和しているかどうか。
人間が「快適」だと感じる21世紀の空間へ向かって、
未来をつくりはじめている立山アルミです。

**立山アルミニウム工業株式会社**

本　　社/〒933-8602 富山県高岡市早川550（ビル建材事業部）　TEL（0766）20-3321
大阪支店/〒570-0032 大阪府守口市菊水通4-13-11　TEL（06）994-8633

立山アルミ ホームページ　http://www.tateyama.co.jp/

三協アルミ



ALLIED BANK TOWER

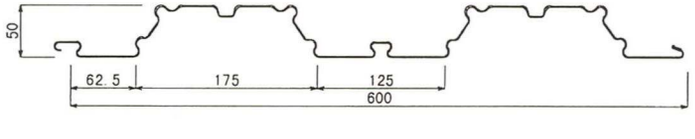
# better to BEST

暮らしにいちばんの快適さをお届けしたい。
住宅用建材からビル用建材まで。
三協アルミの技術です。

三協アルミニウム工業株式会社
本社／〒933-8610 富山県高岡市早川70 広報室 TEL.0766-20-2332
三協アルミホームページ Web MAGAZIN http://www.sankyoalumi.co.jp/
三協アルミの商品ガイド・技術レポート・ダウンロードサービス・Mrプランナー CD-ROM受付・ニューリリースなど、わかる・使える情報サービスを行っています。

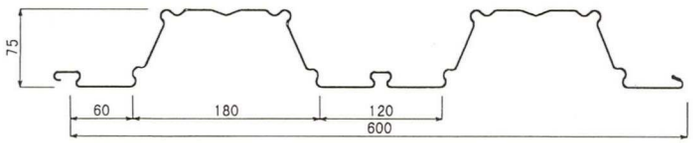
# デッキ専門メーカーだから出来るサービスを、ご利用下さい。

**A** US50デッキプレート（合成スラブ用）



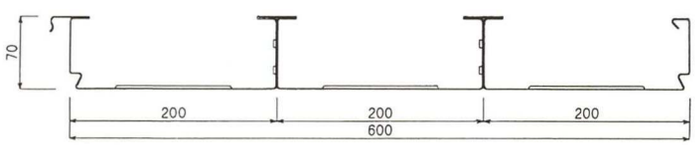

●構造認定
建設省東住指発　第9号
●耐火認定
（通）1時間～2時間
●合成スラブ工業会会員

US75デッキプレート（合成スラブ用）



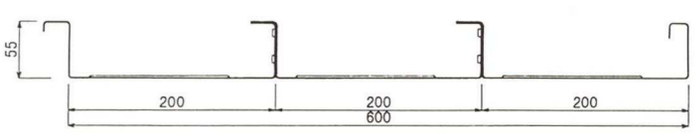

●構造認定
建設省東住指発　第9号
●耐火認定
（通）1時間～2時間
●合成スラブ工業会会員

**B** UT70デッキプレート（合成スラブ用）



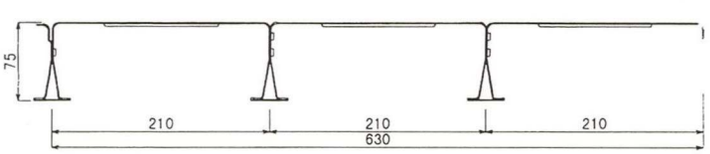

●構造認定
建設省東住指発　第655号
●耐火認定
指定　F2101、F2102
建設省東住指発　第467、468号
USA3時間耐火・UL社第D926号

**C** UB55デッキプレート




●特許申請中
●耐火認定
建設省東住指発　第337号
建設省東住指発　第338号

**D** SUFデッキプレート




●フラットデッキ工業会会員
（社）公共建築協会
評価第954-001-00001号

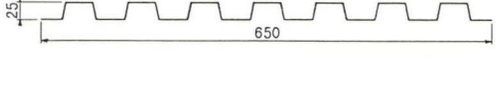
**E** 各種デッキプレート

●耐火認定　建設省東住指発　第137、138号
（UA、UA-N、UKA、UKA-N）

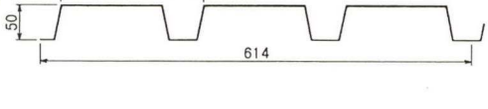
KP1



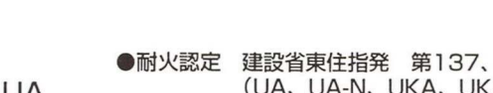

V50



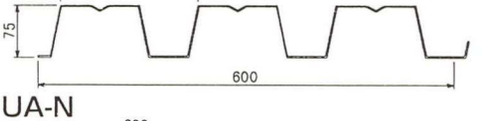

V50A



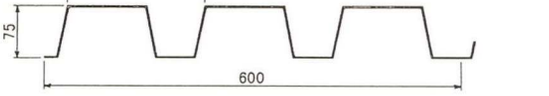

UA




UA-N




UKA




UKA-N




**F** UP-フロアー（自送式立体駐車場・中2階用）




◆各種デッキプレート、カラー&ホワイト、防雪棚、角パイプ、C形鋼、軽量鋼矢板、UK鋼板（囲い用）、特殊成型歓迎します。
お問い合わせは、各ネットワーク迄、お気軽にご連絡ください。

UEKI **植木鋼管株式会社**　『JIS認定工場』

本　社　〒205-0023　東京都羽村市神明台4-5-9　Tel.042-579-0111　Fax.042-554-0825
三重営業　〒510-1251　三重県三重郡菰野町千草5727　Tel.0593-93-2111　Fax.0593-93-1001
東　京　Tel.03-3281-8511　　埼　玉　Tel.0495-72-6111　　岡　山　Tel.086-232-7111
札　幌　Tel.01267-3-2011　　新　潟　Tel.0255-36-2100　　九　州　Tel.092-482-2111
仙　台　Tel.022-344-2111



建築と社会　第79輯9号
社団法人　日本建築協会　〒530-0001　大阪市北区梅田1の1の3の2100　電話大阪06(348)0635　FAX06(348)0634　振替口座　00ホニ-01九七七七七
定価1,200円（●本体1,143円●送料共）正会員の購読料は会費に含めて徴収